
アラウンド・サーティーン

鶴川 梧郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラウンド・サーティーン

【Nコード】

N7507T

【作者名】

鶴川 梧郎

【あらすじ】

「人前に出る時だけ分身を身代わりにできたら……」

学級副委員長の肩書きと極度の上がり症の狭間で悩む新生・渡瀬準は、

その他力本願全開な潜在思考を、学園裏手にある廃神社の守り神に読まれ

分身として憑依されてしまった。

「13歳くらいにしか見えない美少女が神様で、しかも俺の分身！？」

困惑しつつも、人懐こい神様に”分身”類する者”の意から”ルイ”と名前をつける準。
そんな準の前に、廃神社から脱走したルイを血眼で探し回る上級生が現れ、
今すぐ彼女を手放すよう迫られる。
大人しくルイを引き渡すか、抵抗あるいは逃避行を試みるか。準が選んだのは――！？

プロローグ（前書き）

今回はプロローグのみの投稿となります。
本作は引き続き第一章へと続きますので、
少しでもお楽しみいただけたら幸いです。

ブローグ

（体がふたつあれば……）

手元の紙切れに視線を落としながら、渡瀬^{わたせ}準は心の中で呟いた。

元は四つ折りだった名刺サイズの紙切れ。その折り目の内側には『副委員長A』と手書きの文字が並んでいる。

「入学早々ついてないよ、まったく」

キング・オブ・ネガティブの称号をその場でサプライズ贈呈されても何らおかしくなさそうな台詞が、口について吐き出される。

目の前の紙切れを手にした瞬間、いくつにも枝分かれしていた道が忽然と姿を消し、唯一残されたのは地獄への緩やかな一本道。そんな錯覚すら覚えながら、準は強く瞼を閉じた。まるで、すべての現実を拒絶・否定するかのように――。

4月6日。高校生活1日目。

入学式に自己紹介、クラス担任からの連絡事項などを淡々とこなすだけの数時間。

少なくとも準はそうに考えていた。もちろん人生におけるひとつの節目であるし、それなりに緊張もしているが。

講堂から教室に戻り、さっそく出席番号順に自己紹介が始まる。

渡瀬という名字から、出席番号ではいつも最後の方に甘んじていた。しかし、このクラスは五十音順でも入試の成績順でもなくランダムに決められている。もちろん他のクラスも同様で、その旨が外に貼り出された学級編成表に但し書きされていた。

ちなみに準の出席番号は5番。席も廊下側の後ろから2番目という好位置を確保していた。

全員の自己紹介が終わると、担任が連絡事項を伝え始める。ほとんどが配布されたプリントにも書いてあることなので、真剣に聞いている生徒はごく一部だ。準も完全に聞き流しモードに入る。

やがて「それでは最後にクラス委員を決めたいと思います！」という担任の声が耳に入ってきた。

クラス委員は学級全体の顔とも言える存在だ。しかも、クラスの大半は見知らぬ者同士の新入生。教師側も選出に当たっては、かなり神経質になるはずである。

したがって、入試での成績や中学時代の内申点が良かった者が無難に自動選出されるのだろうと、その場の誰もがタ力をくくっていた。準もご多分に漏れず、静観しながら事態をやり過ごす作戦をとろうとする。

「えー、何だか急に静かになっちゃいましたね。この中から委員長1名と副委員長2名をくじ引きで決定したいと思うんだけどなー」途端に教室内は騒然となった。

大学を出て2、3年目くらいの若い女担任と、そばに控える20代後半といった風情の男の副担任は「文化祭・体育祭・修学旅行といった目玉行事以外は大した仕事もないし、委員長だけに仕事が偏らないよう副委員長も2人付けるから安心していい」などとしきりに強調している。生徒の不安感をできるだけ取り除こうと彼らも必死なのだろう。だが、くじで決まってしまうくらいなのだ。委員と言っても、クラスの体裁を整えるための飾りか、せいぜい雑用専従班に過ぎないのかも知れない。

しかし、準にとっては地獄の審判の始まりでしかなかった。なぜなら……仕事云々の前に、人前に出るのが大の苦手だからである。

準にできることはただひとつ。ひたすら祈ることだけ。

だが、悪い予感に限ってよく当たるもので、結果は見てのとおり。さらに口をつくように脳裏をよぎったのが「体がふたつあれば」という、実に後ろ向きな妄想だった。

（そうだ、別に仕事を丸投げするだけが分身の使い方じゃない。普段の実務や雑用は自分でこなして、人前に出る時だけ分身に代わってもらえばいいんだ。もっとも、性格まで忠実にコピーされた分身だったら、向こうも全力で拒否してくるだろうけどな……）

何も一から十まで、とことん平穩無事にやり過ごしたいと思ったわけではない。周りが見ず知らずの元他校生だらけという現状を基準とした場合の『平穩無事』は、誰とも接点を持たない、平和な孤立状態が卒業まで続くことを意味する。

授業を受けて帰宅する、適当に復習して授業を受けて……の繰り返しに3年間耐えられるほど準の精神は強靱ではないし、部活でも学校行事でも恋愛でも、せめて人並みに青春を謳歌したい。図々しい言い方をすれば『そんなお年頃』なのだ。

「さて、クラス委員も無事に決まったところで、今日はおしまい。みんなお疲れー！」

「委員になった3人は、さっそくだが顔合わせがあるんで残るように。他に連絡事項は特にないな。それでは解散！」

副担任の号令を合図に、みな一斉に帰り支度に取りかかる。5分もたつ頃には、教室内の生徒は半分以下になっていた。

役職3人前に対し、クラスメイト42名。

14分の1という確率が、果たして高いのか低いのか。そんなことを延々と考えながら頭を抱えていると、

「あの……副委員長さん、だよな？」

不意に声をかけられ、準はハッと我に返る。

顔を上げると、2人の女子生徒が立っていた。たしか、くじで決まったクラス委員の紹介の際、準と一緒に教壇の上に立った生徒だ。

1人は髪を後ろで束ねてポニーテールに、もう1人は肩の少し上あたりで短めに切り揃えられている。人前に出た緊張のあまり壇上では顔を確認する余裕すらなかったが、2人とも透き通るような肌に整った目鼻立ち、真新しい制服から伸びる手足も均整がとれており、なかなかの美少女と言えた。

「あたし、久坂未波くさかみなみっていいます。って、これは自己紹介で言ったばかりだったね。クラスの委員長とかやったことないし、何をすればいいのかもよく分からないんだけど……ふつつか者ですが、よろしく願います！」

ポニーテールの方が顔を真っ赤にしながら、勢い良く頭を下げる。かなり緊張しているらしい。

「どうも、副委員長Aの渡瀬準です。俺も本当はクラス委員とか務まるようなガラじゃないんだけど……。こちらこそよろしく」

やや圧倒されながらも、言いよどむことなく返事をする。

集団を前にすると（家族や親戚相手でも）、緊張のあまり何も話せなくなってしまうが、1対1の会話なら初対面の相手とでも普通に話せるという、何とも摩訶不思議な法則が準にはあった。

このことを自分から誰かに相談することはない。が、場の流れでこの手の話題になった時は、まず最初に説明するようにしている。さもないと十中八九『人見知り』で片付けられてしまうからだ。

「ふふ。婚約が成立したお見合いカップルみたいになってるわよ、未波」

ポニーテールをせわしなく揺らしながら場当たりのしやべりまくる未波をたしなめるように、今度はショートカットの方が口を開く。

再び「どなた？」といった表情に戻る準。

「あ、私は妹尾^{せのお}二三^{ふみか}香。さっきのくじが大当たりで副委員長Bをやることになったの。よろしくね」

ばしっ！

手短かに自己紹介を済ませたと思いきや、ショートカットは2人の肩を思い切りたたいてきた。締めめの挨拶のつもりなのだろうか？
「こちらこそよろしく」と口を開きかけていた準は、突然の痛みにたまらず悶絶する。

「ちょ、痛いつてば、二三香あ！それにお見合いみたいとか変なこと言わないでよ」

「未波がトンチンカンな挨拶をするのが悪いのよ。自分から人に話しかけるなら、少しは考えてからにすることね。中学の頃から散々言ってるのに、ちつとも直りやしないんだから」

半分涙目になっている未波の抗議は、さらりと受け流された。

と言うか、同じ中学なのか。どうりで妙に仲がいいわけだと準は納得する。

「かなり落ち込んでたみたいだけど何かあったの？」

痛みをこらえつつ2人のじゃれ合いを眺めていると、不意に二三香がたずねてきた。

準としては頭を抱えていただけのつもりだったのだが、二三香たちにはそうは見えなかったらしい。つい今しがた幕を開けたばかりの高校生活を揺るがしかねない重大な懸案事項であるとはいえ、いささかオーバーリアクションだったようだ。

「悩める青春だもんねえ。あたしで良ければ相談に乗るよんっ！」

未波も机に手をついて、こちらに身を乗り出してくる。

制服の上着からでも分かる胸の膨らみが一気に目の前に迫り、準は危うく飛びのきそうになった。これが生地の薄い夏服だったら……という妄想を必死に振り払いながら、努めてクールに答える。

「いや、別に大したことじゃないよ。昔から人前に出るのが苦手でさ。ほら、クラス委員になると、ホームルームの司会やったり意見まとめたりで、必然的にクラス全員と向き合う形になるだろ？ しかも、こっちは普段馴染みのない教壇の上、他の連中はいつもどおり勝手知ったる自分の席でこっちを見てやがる。もうそれだけで緊張しまくって、頭の中が真っ白になるんだ」

「上がり症ってやつかなあ？」

「いえ、単純にそうとも言い切れないわ。少なくとも今、私たちとは普通に話せてる。そうよね？」

「1対1の会話なら初対面でも平気なんだ。逆に大人数を前にしてこっちが一方的に話すだけの発表会みたいな形式になると、顔見知りの友達とか親戚でもアウト」

「それじゃカラオケとか苦手なタイプだねっ」

あまりにも直球かつ具体的なたとえだ。

もつとも、得意か苦手か以前に足を踏み入れたことがほとんどないので、

「ま、まあ得意じゃないことは確かかもな」

と適当に話を合わせる。

「それじゃ今度一緒に行ってみるー？ 大人の階段昇ってみるー？
何事にもトライ、それが青春だよー？」

「ちよつと未波。『それじゃ』って意味不明にも程があるわよ。それに、たかがカラオケくらいで、あんたの『大人の階段』はどんだけハードル低いのよ！」

「二三香も一緒に行きたいなら素直にそう言えばいいのに。んー？
未波がいたずらっぽい笑みを浮かべながら、二三香に詰め寄った。
口論などで敵に回したくないタイプだ。

「バ、バカなこと言わないでよ！ あんたが考えなしに変なことを言うから……」

「そんな盛大に噛みながら反論されてもねえ。で、正直なところどうなのよ？ 恥ずかしがらずに言ってみりゃんせお嬢さん」

「そんなんじゃないんだって言うてるでしょ！？」

テストに出ない！ そもそも歴史の教科書にすら載らない！

そんなキャッチコピーを付けても問題なさそうな第二次少女紛争が幕を開ける。今度は相手の本音を突いた未波が優勢のようだ。二三香を正攻法の騎馬軍団とするなら、こちらは奇襲やゲリラ戦に長けた足軽集団といったところか。

（そう言えば、このあと顔合わせがどのとか言ってたよな？ 時間も場所も言わないでどこに行っただ？）

先ほど担任が話していたことをふと思い出し、あたりをきよろきよると見回す準。

いつの間にか教室内は準たちだけになっていた。

「どうしたの？」

何やら落ち着かない準の様子に気づいた未波がたずねる。

「このあと顔合わせがあるって言ってたけど……。どこでやるか聞いてないかな？」

「あー、それなら12時半に学食集合で始めるって伝言もらってる

よん？ でも、その前に準ちゃんを元気づけといてあげてって頼まれちゃったんだ」

「そんなに悲壮感漂って見えてたのか……」

そうそう、と二三香も首を縦に振る。

「今にも錯乱して窓から飛び降りちゃうんじゃないかって本気で心配してたわよ、先生。でも、入学早々必要以上に教師とべつたりになっちゃうと新しく友達とか作りにくくなるだろうから、ここは同じ境遇の仲間同士でつてことになったの。2人ともちゃんと空気読める先生でラッキーよね、私たち」

「同じ境遇の……仲間……」

「そう、あたしたちは仲間なんだよ。委員の『い』の字も知らない素人集団だけどさ」

二三香たちのさり気ないフォローが嬉しくもあり、同時に自分に対する情けなさで、準は胸が痛くなってきた。

「入学早々ごめん。色々と気を遣わせて」

「別に気にすることなんかないわ。ろくに会話もしないまま顔合わせに突入して、お互いにギクシャクしながら仕事をするよりマシなもの。未波もそう思うでしょ？」

「あつたりまえじゃん。だから気にしない！ ところでさ、そろそろ時間だよ？」

携帯で時間を確認すると、12時20分を回っていた。

「おっと、急がないと。でも学食だったって相当広いだろうし、そもそも2人の名前をまだ聞いてなかったような……。ちゃんと合流できるかな？」

「入口のメニュー看板の前で待ってるそうよ。名前は顔合わせの時にしっかり聞いときましょう」

「自分たちの紹介忘れる先生って初めて見たかも。まあ毎日のように顔合わせてれば、そのうち色々分かるのかも知れないけどさ」

「やっぱ初日だから緊張して……って、先生に限ってそれはないか」
「改まって自己紹介とまでは行かなくても、黒板に名前と担当教科

を書いとくらいの配慮は欲しかったわね」

互いに好き勝手言いながら荷物をまとめ、教室を後にする。

悪いことばかりでもないみたいだな……と準は思った。

クラス委員という本来望んでいない形の付き合いとはいえ、気さくに声をかけてくれるクラスメイトが2人も見つかったのだから。

第一章 お願いは計画的に #1（前書き）

容量や読みやすさを考慮し、分割投稿しています。

第一章　お願いは計画的に　#1

ぎゅるるる。

クラス委員選出からの騒ぎで忘れていた空腹が、好物であるカレーライス&福神漬け山盛りを前にするなり、猛烈な自己主張を始める。

が、それは準だけではなかったようで、5人は互いに顔を見合わせて笑った。

「よし、冷めないうちに食べよう。話はそれからだ」

言うが早いか、副担任の男は特盛りの山菜うどんを豪快にすすり始める。

細身の体に、少し長めに伸びてウェーブのかかった髪、教室ではかけていなかった縁の赤いメガネ。一見すると手品師かクイズ番組の司会者といった、爽やかながらも、どこか胡散臭い出で立ちだ。よほど腹が減っていたのだろうか、外見に似合わぬいい食べっぷりである。

「あらあら……。それじゃ私たちも食べましょうか。あ、これ奢りだから遠慮しないで食べてね」

そう言つと、担任も親子丼の丼のフタを開け、中から立ち上る湯気にうつとり目を細めている。

「い、いただきます」

少し呆氣にとられながら、準もスプーンを手に取り、カレーライスを口に運び始める。

仕込みに時間をかけたのか、やや黒ずんで水気のないカレーに、崩れることなくしつかり原形を留めた野菜、贅沢にも奥深くまで味の染み込んだ牛肉。準のストライクゾーンを真正面からぶち抜いたそれは、瞬く間に量を減らしていった。

「ふう」

「はい、お茶。いい食べっぷりだったよっ！」

いつの間に持ってきたのか、未波が湯飲みを差し出してくる。

「サンキュー」

一口飲んで湯飲みを置く。

と、そこで担任が口を開いた。

「それじゃ私たちの自己紹介から入るわね。名前だけでも最初に名乗っておくものだって妹尾さんにも叱られちゃったし」

いよいよ本題——彼らの言う顔合わせとやらに入るらしかった。

「私は塩崎奈津しおさき なつ。もうみんな知つてのとおり1年3組の担任で、担当教科は英語。ちなみに23歳で教師2年目の独身です。よろしくね！」

「えー、俺の番……かな？ 俺は初島史郎ついでしま しろう。学生の頃は頭と最後の文字を取って『いろいろ』とか呼ばれてたな。担当教科は日本史と政治経済。年は28だけど、実は新米教師なんだ。ここに来る前は求人広告のデザイナー兼制作オペレーターをやってた。立場は違うけど、同じ新入り同士ってことでよろしく！」

2人とも、ほぼ外見どおりの年齢だった。

特に初島には、新入り同士という点で親近感を覚える。

自分にとっては高校生活のスタート、初島にとっては教師生活のスタート。不安を抱えているのは自分だけじゃないという思いが徐々に湧き上がってくる。

「そうそう、ひとつだけ補足するとね」

再び塩崎が口を開いた。

「え？ 何ですか？」

未波がいかに興味津々といった目を向ける。

「私と初島先生は元オフ仲間だったりします！」

「オ、オフ仲間！？」

予想の斜め上に行く言葉に、つい間抜けな声が漏れる。

「そう。ネット上でしかやり取りのなかった人同士が実際に会って、お茶を飲んだり、カラオケに行ったりするのをオフ会って言うんだけど。聞いたことくらいはあるでしょ？」

「そりゃ知ってはいますけど」

「お二人は知り合ってどのくらいになるんですかつ？」

「ちよつと未波。そんな根掘り葉掘り聞くもんじゃないわよ」

テーブルに両手を身を乗り出した未波に、二三香が釘を刺す。

「いや、別に気にしなくていいさ。隠すようなことでもないし。俺たちが最初に顔を合わせたのは3年前の夏だったかな。そう、たしか昭和記念公園の花火大会の日だ」

昭和記念公園の花火大会は、準も噂に聞いたことがある。

毎年7月の最終土曜日に行われ、夜7時から9時までの2時間で15000発が打ち上げられる。おそらく花火大会としては相当大がかりな部類に入るはずだ。それだけに人も多く、いつもは比較的閑散としている最寄り駅周辺も、この日ばかりはシャレにならない混雑ぶりを見せる。秋津学園からは直線距離で、だいたい15キロほどだろうか。

「もう3年になるのかー、懐かしいなあ。当時大学生で夏休みに入りたてだったから、バイトもゼミもない日は暇で暇で仕方なかったのよ。その日も何となくネットの掲示板を流し読みしてたんだけど、なんとなんと花火見物オフの告知があるじゃないの！で、思い切って参加してみたら、その中に若かりし頃の史郎ちゃんがいたってわけ。……あの時のログ、まだ残ってるのかしら」

「史郎ちゃん！？今、史郎ちゃんって言いました？」

今度は未波が素っ頓狂な声を上げた。

隣のテーブルの上級生2人組が驚いてこちらを見ている。そのうちの1人と目が合いそうになり、準はあわてて目を伏せた。

「おいおい、学内で史郎ちゃんはずくないか？あと久坂さんも大きな声出さないで。その、何て言うか……かなり目立ってるから初島も周囲の視線に気づいて焦り始める。」

かと思いきや――

「別にいいじゃない。もう私の中ではこの呼び方が定着してるんだし、教壇を降りちゃえばこっちのもんよ！」

騒ぎの元を作った張本人はまったく気にしていないのだった。

「いや、開き直るなよ……」

「史郎ちゃんの考えすぎよ。私たちは何も悪いことしてないのよ？
ここはひとつ、先輩である私を信じなさい！」

冷静なのか単に図太いだけなのかはともかく、先輩教師としての
風格だけは一人前な塩崎だった。

しかし、準はどうにも釈然としない。

（いきなり何なんだよ、このチート設定は。正真正銘の独り者は結局俺だけってことなのか？）

オフ会で知り合った者同士が同じ職場で働いていることがチート
設定に当たるのかはともかくとして。事実、準は独り身同然で、こ
こ秋津学園に入学していた。

第一章　お願いは計画的に　#2

2月中旬。

準は第一志望校である土浦学園の推薦入試に合格し、あとは中学卒業を待つだけの身だった。自宅と学校をただ漫然と往復する、受験の重荷から解放された以外は特に変わり映えのない日々。

いつものように帰宅すると、両親と小5の妹がリビングで何やら話し込んでいた。いくら公務員とはいえ、父親が夕方5時前に帰って来ているのは珍しい。

とりあえず制服から着替えるため、2階にある自分の部屋に向かうとする。

「準、大事な話がある。着替えたらずぐに降りてきてくれ」

父親の呼びかけに、準は足を止めて振り返った。

「何？　大事な話なら今聞くんよ」

「そうか。実はな、父さん4月から静岡に転勤することになったんだ。単身赴任も考えたんだが、次は色々忙しい職場だな。母さんと宏美も一緒に来てもらうことになった」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。それはつまり俺も向こうの高校の編入試験か何かを受けて、父さんたちと一緒に引越すってことか？」

あまりにも唐突な引越宣言。

正直、訳が分からない。ただ、確実に土浦学園に通えなくなるのとだけは理解できた。

ショックのあまり全身の力が抜け、準は思わず膝をついてしまう。「準、落ち着いて。たしかに今のまま土浦学園に通うのは無理だけど、何が何でも静岡までついて来いって言ってるんじゃないのよ」

息子の落胆ぶりを見かねた母親が、ついに口を挟む。

「それじゃどうすればいいんだよ……。いや、俺はどうなるんだよ！」

夢にまで見た土浦学園への入学を諦めなければならぬ無念さ。

これからどうすればいいのかという不安。

進むはずだった道を突然塞いだ拳句、言葉を濁して本音を明かそうとしない両親への苛立ちと不信感。

これらが一気に爆発し、つい語気が荒くなる。

「問題はそこなんだ」

父親が静かに口を開く。

「お前が必死に努力して合格を勝ち取ったのは、父さんも母さんもよく分かってる。だから、もう1度試験を受けろなんて言わない」「試験なしで入れる高校がどこにある。それとも高校行かずに働けとでも言うのか？」

「いや、今のお前にはあるんだよ。試験なしで行けるところがな。秋津学園つてとこだ。ほら、いつだったかお前が学校説明会の時にもらってきたパンフレットに系列校として載ってただろ。系列校同士での編入なら無試験でOKだそうじゃないか。静岡に行きたければもちろんそれもアリだぞ」

受験前、それこそ手垢が付いてボロボロになるまで読み返したパンフレットを思い浮かべる。たしかに、系列校の地図や外観写真などと一緒にそんなことが書いてあったかも知れない。

「そう言えば、関東と東海に何ヶ所か系列校を抱えてるって書いてあったな。でも、秋津つてたしか東京じゃなかったか？　ここから通えないこともないけど、片道2時間くらいかかるぞ」

秋津——東京と言ってもほとんど埼玉との県境に近く、小規模ながら私鉄とJR線それぞれの駅を擁する街だ。ふたつの駅を結ぶ道は、実質1本しかない。道沿いには古くからの商店や飲食店、銀行やパチンコ店などが立ち並んでおり、街と言うよりは賑やかな商店街という表現が似合っている。準の最寄り駅からは1回の乗り換えで済むが、その路線は地図上でぐるりと円を描くようなルートを走行するため、実際の距離以上に時間がかかるのが難点だった。

「でも仕方ないな。静岡行きよりはマシだし、ここに残れるなら……」

…つて、いや待てよ？　ここに残るなら、そのまま土浦に通えばいいだけの話だよな？」

「父さんの従兄が新秋津駅の近くでマンションを経営しててな。お前はそこで一人暮らししながら通うんだ。大学もそこから通ったっていいんだぞ？　いずれにしても1人で住むには十分な広さだ」

「この家はどうなる？」

「貸家にする。借り手も今日見つかった」

矢継ぎ早の質問にも淡々と答えが返ってくるので、準は逆に面食らってしまった。転勤になることや家を人手に明け渡すこと自体は、かなり前から決まっていたと見て間違いなさそうだった。それならそうと一言欲しかったが、今となっては後の祭りである。

「あと少しで、こことお別れなんだね」

それまで黙っていた妹の宏美が感傷的な面持ちでぽつりと呟いた。「いや、それは違うぞ。あくまでも持ち主はうちなんだからな。戻ってくる日もいずれ必ず来る。必ずな。母さんも準も、そのことだけは頭に入れておいてくれ」

家族を励ますと言うより、自分に言い聞かせているように感じられる言葉だった。

「父さん、ごめん。ろくに話も聞かずに怒鳴ったりして」

「いや、お前が怒るのももっともだ。気にするな。ただ、3月の半ば過ぎには完全にここを引き払うから、荷物はしっかりまとめとけよ」

生まれた時から15年間住み慣れた家を離れたのは、それからちよつと1ヶ月後のことだった。

第一章　お願いは計画的に　#3

「それにしても『史郎ちゃん』にはびっくりですよ。オフ仲間だったからなんて言われても、苦し紛れの後付け設定にしか聞こえませんでした」

目を輝かせながら食いついたのは、意外にも二三香だった。そんな二三香に初島は、

「さっき話した広告会社を不況でリストラされて困つてるところに、塩崎先生がこの学校の教員採用枠を紹介してくれたんだ」と説明する。

「でも、かなり畑違いですよ」

「幸い教員免許は大学時代に取つてたし、こう見えて個別指導塾でもバイトしてたから一応専門だよ。実際、簡単な面接と模擬授業だけで採用してもらえたし」

「なるほど」

「ただ、オフ会のことは他の先生たちにも他言無用で頼むよ。特に教頭先生みたいな頭の固そうな人の耳に入ると厄介なことになるから」

「大丈夫ですよ。誰にも言いません」

半ば哀願するように釘を刺され、二三香は笑って答える。

教頭に限らず『教師』無駄に生真面目で融通が利かないもの』と勝手に思い込んでいたが、必ずしもそうではないらしい。

「ところでみんな、この後空いてるかしら。まだ20分くらいお昼休み残つてるし、少し外でも歩かない？」

親子丼の最後の一口をお茶で流し込んだ塩崎が唐突に切り出した。
「俺も行くのか？」

「あなたもです！ 史郎ちゃ……じゃなくて初島先生」

「参ったな。いや、俺も昨日今日来たばかりで学内のことをよく知らんから、そういうツアーみたいながあると助かるといえば助か

るんだが」

「じゃあ決まりね。さっそく行くわよっ！ ほら、その若い衆も急ぎなさい」

言うが早いのか、塩崎は井と湯飲みが乗ったトレーを抱えて食器返却口へとダッシュしていく。やや遅れて追いかける初島。

「ちょ、ちよつと……！」

「待ってください先生！」

「お茶が鼻に入ったあ」

準たちもあわてて立ち上がり、塩崎と初島の後を追った。

*

*

*

秋津学園はごく普通の高校である。

系列校のひとつ——かつて準が進学を決めていた土浦学園と同様、偏差値は中の上ながら、難関大学・有名大学への進学率の高さと平和な校風が特徴だ。入学試験には毎年数千人が押し寄せ、無事に合格を果たした生徒は学業・スポーツ・アルバイト・ボランティアなどに精を出し、学園生活を謳歌する。準もまた、自由な中にも一糸乱れぬ風紀を保つ学園に憧れを抱き、受験を決意した。

学園側も生徒の自主性を全面的にバックアップするべく、10年ほど前から学内施設の充実化を図っている。もっとも、そんな能書きを垂れ流すまでもなく、公立中学出身の受験生を魅了する役目は真新しく綺麗な校舎が一手に担っていたが……。

その一環として建てられた真新しい部室棟の裏で、準たち5人は立ち尽くしていた。

部室棟の裏はフェンスを挟んで一面の雑木林。日中でもほとんど日が当たらないため、先ほどまで歩いていたグラウンドなどに比べてかなり薄暗く、空気も湿っぽい。夜ともなれば霊的な何かが徘徊しているような雰囲気だ。

「薄気味悪い所だな。いくら日陰でも同じ学園の敷地内とは思えな

い」

「このフェンスもちよつと変ですしね」

初島と未波が眉をひそめながら言った。

視線の先には学校や公園、図書館などでよく見かける緑色のフェンス。おそろく、敷地の境界を示しているのだろう。

しかし、そのフェンスはちょうど5人が立っている目の前で、突然1メートルほど途切れていた。途切れた部分からは雑木林を切り開くように道が続いており、10メートルほど奥には古びた小さな鳥居。その先は再び一面の雑木林で、祠や賽銭箱といった神社を連想させる物は一切見当たらない。

フェンスの向こうが学園の外で、なおかつ鳥居や雑木林も誰かの所有物であれば『立入禁止』の看板でもかかつていそうなものだが、予算の都合でフェンスを全体に張り巡らせることができなかったと仮定するなら尚更だ。

そして、肝心の鳥居にしても何十年、下手をすれば何百年もの間放置されていたかのように朽ち果てていた。今にも崩れ落ちそうで、霊とは別の意味で危険感を抱かずにはいられない。

「いわゆる学園七不思議的なやつかしらね。私、去年の今頃も同じように学園内を歩き回ったし、ここも何度か通ってるんだけど、あんな不気味な鳥居なんか見たことないわよ」

鳥居をじつと見つめながら、塩崎が沈黙を破った。

「奥にあるのは鳥居だけなのかなあ」と未波。

「ちよつと未波。変な気起こすんじゃないわよ。私は入るの反対だからね」

「お、俺もあんまり入りたいとは思わないな……。初島先生はどう思います？」

ともすれば『みんなで入れば怖くない！』的なノリになりそうな空気に耐え切れず、準は初島に無茶振りをかます。

「そうだな。いい年した大人がオカルトめいたことを言うのも何だが、突然現れたり消えたりするってことは、幽霊と同じで実体を伴

っていない——つまり、この世のものではない可能性が高い」

「あの鳥居自体が何かの結界になってるかも知れない、ってことですか？」

「ああ。迂闊に近づく、向こうの世界に引きずり込まれて2度と現世には戻れなくなるかも……なんてな。まあ何にせよ、近づかない方が安全なのは確かだと思う」

「ほ、ほらね？ これは先に進んじやいけないフラグなのよ。未波も分かったんなら、さっさと退散するわよ！」

二三香が声を震わせながら未波の手を引こうとする。見かけによらず怖がりらしい。

「で、でも塩崎先生が……」

「塩崎先生がどうかし——あっ!？」

全員が目を疑った。

第一章　お願いは計画的に　#4

「危ないですよ！　戻って来てください！」

視界に飛び込んだきたのは、鳥居に向かって一直線に進む塩崎の姿だった。二三香の呼びかけにも立ち止まる気配はなく、1歩また1歩と、鳥居との距離を縮めていく。

「何考えてんだ！？　戻ってこい！」

初島も叫ぶが、やはり聞こえていないのか、塩崎は一切振り返らず……そして、ついに鳥居の真下まで到達してしまった。

「あいつ、何てことを……」

力なく肩を落とす初島。

と、不意に塩崎がこちらを振り返った。そして、子供のように飛び跳ねながら大声で叫ぶ。

「初島せんせーっ！　別に大丈夫みたいよー？」

「はあああ！？　あのバカ、聞こえてるなら返事くらいしろっつーの！　心配したんだぞ、本当に。俺たちも行こう」

初島に続き、準たちも鳥居に向かって走り出した。

近くで見ても、やはり鳥居は鳥居だった。

「さて、せっかく来たんだからお参りでもして行きましようか」
またしても、突拍子もない言葉が塩崎の口から飛び出す。

「鳥居しかないのにどうやってお参りするんですか？」

二三香が首をかしげる。鳥居に危険がないと知るや冷静さを取り戻したらしい。

「さあ。とりあえず鳥居の下で手を合わせとけばいいんじゃないかしら」

「考えてなかったんかい！」
すかさず初島がツッコむ。

「ほらほら、神様の御前で大声出さないの。とりあえず一列に並び

ましょ」

「まったく仕方ないな」

ぶつぶつ言いながらも初島は指示に従う。

全員が一行に並んだのを互いに確認すると、5人は目を閉じ手を合わせた。

（学園生活を無事に送れますように）

いくら切羽詰まった状況とはいえ、見ず知らずの神様仏様に「人前で口ごもらない優秀な分身をください」などと祈るわけには行かない。

そんなこんなで、当たりさわりのない言葉を選んで祈ること30秒ほど。そろそろ目を開けても良い頃合いだろう。別に宗教に詳しいわけでもなければ入信もしていないので、祈る時の細かい作法など当然知らない。

それに、本当に神様がいるとしたらである。無駄に長時間居座る参拝者など迷惑でしかないし、たかがワンコインで多くの願い事をするなど言語道断だろう。わざわざ神様の怒りを買うほどMではない。

準は頭の中で適当な理屈を付けると、さっそく目を開けようとする。

「……っ!？」

次の瞬間、準は激しい眩暈に襲われた。

至近距離に雷でも落ちたように視界が真っ白になり、続いて猛烈な吐き気と浮遊感。

（な、何だ？ 貧血か？ とりあえず落ち着け。落ち着くんだ……）
心の中で念じてはみるものの、短く浅い呼吸が繰り返されるばかりで、一向に治まる気配がない。

不意に乾いた土と枯葉のにおいが鼻腔をくすぐった。

「ああ、倒れたんだな」と直感的に悟る。

このままじっとしていれば、そのうち楽になるだろう。

今はできるだけプラスの方向に考えつつ、成り行きに任せるしか

ない。とりあえず今日は鉄分を多めに摂って早く寝よう。それでも改善しなければ……不本意ではあるが医者行きだ。

5分ほどそうしていただろうか。吐き気はすぐに治まり、やがて視界もはつきりしてきた。

なるべく脳に振動を与えないよう、おそるおそる体を起こす。

「よかった、気が付いたのね」

声のする方に目を向けると、すぐ横で塩崎が両足を投げ出して座り込んでいた。

「何が起こったんでしょうか？ 急に眩暈がして立っていられなくなつて……」

制服についた枯葉を払いながらたずねる。

「私も眩暈で立っていられなくなつて、さっきまで倒れてたの。見て。他の3人も倒れたままなのよ」

未波と二三香、初島がうつ伏せに倒れていた。

3人とも顔が青白い。まるで貧血を起こして倒れた時のようだ。

「やっぱり下手に起こそうとしない方がいいですかね？」

「そうね。少し様子を見ましょう」

そう言つて塩崎は腕を伸ばして深呼吸を始める。未波ほどではないが、幾分小柄なため上半身の自己主張は実に控えめだった。人知れず安堵のため息をつく準。

少したつて、最初に目を覚ましたのは初島だった。続いて、未波と二三香も額を抑えながら起き上がる。

「あたし、どうなつてたんだろ？ うう、まだ微妙に気持ち悪い……」

「無理に起き上がらない方がいいぞ」

頭を押さえながら苦しそうに呻く未波に、準は声をかけてやる。

「私もどうしてこんな所で倒れてるのかしら」

「久しぶりに貧血かと思つて焦つたよ。今のはいったい何だったんだ？」

揃って首をかしげる3人に塩崎が答える。

「みんな同じように倒れてたのよ。私と渡瀬君は一足先に目を覚ましたけど」

「全員が同時に、か……。やはり何かあるんだな、この鳥居には。とりあえずここを離れよう。長居は無用だ」

そう言いながら立ち上がると、初島は急ぎ足で歩き始める。

「えっ！？　ちょ、ちよっと、置いてかないでくださいよ！」

二三香の完全に怯えきった声が、薄暗い雑木林に木霊した。

準は悩む。本音としては、二三香のそばにいて励ましてやりたいところだ。しかし、迂闊なことを言えばいらぬ誤解を招き、余計に事態が混乱する。

「とりあえず落ち着こう。な？」

そう声をかけると、準は後ろを振り返りもせず小走りで初島の後を追った。

第一章　お願いは計画的に　#5

「別に変な願い事とかしなかったのになあ」

未波が鳥居の方を恨めしそうに睨んだ。

「あつちの世界に引き込まれなかっただけラッキーと思うしかないわね」

深いため息と共に二三香が答える。一気に体力を消耗してしまったのか、さっきまでとは打って変わって声に張りがない。

「因果関係はともかく、あそこには2度と近づかないことだな。よろしいですか、塩崎センセイ？」

背中を向けたまま、皮肉たっぷりに初島は言い放つ。

正直、塩崎の突拍子もない行動には準も翻弄されっぱなしだ。その一方で、つい数時間前に知り合ったばかりの未波や二三香たちとの距離感を一気に縮めてくれたことへの感謝の念もある。

初島の言うことは正しい。しかし、準はどうにも塩崎を憎めなかった。

「何もそこまで言わなくても。近づきたくないってのは同感ですけど」

「いいえ、初島先生の言うとおりよ。ごめんね、初日から変なことに巻き込んで」

神妙な面持ちで頭を下げる塩崎。かなり落ち込んでいるようだ。

「そんな、気にしないでください。初島先生も心配だったんですよ、きっと。あ、そろそろお昼休み終わりですよ」

二三香が携帯のサブディスプレイを塩崎に見せながら告げる。

「いつけない、職員会議があるんだった！　こんな所で悪いんだけど、私たちそろそろ行くわね」

「みんな気を付けてな。まさかとは思うけど、何かあったらすぐ教えてくれよ」

「はい、分かりましたっ！」

心配無用とばかりに未波が威勢よく返事をする。

「「それでは失礼します」」

準と二三香も軽く会釈をして踵を返すと、校門に向かって歩き始めた。

*

*

*

正門を出て商店街へと続く、緩やかな上り坂の途中。

「ところで2人はさ」

長い沈黙を破るように未波が口を開いた。

「私たちがどうかした？」

「今日はまっすぐ帰るのかなーって」

「俺はそのつもりだけど」

「私も帰るつもりだけど、どうして？」

「あの……あたしが考え過ぎなだけかも知れないんだけどさ」

急に未波の声が小さくなる。

「もったいぶってないで早く言いなさい」

「あたしたちさ、このまま帰ったらひとりぼっちだよ。先生たちは何かあつたら相談しろって言うてくれてるけど、明日学校で顔を合わせる前に『何か』が起こるかも知れない。親とかにも相談できるようなことじゃないし、もしもの時のために準ちゃんやんと連絡先を交換しておいた方がいいんじゃないかと思って……」

「なるほど。未波にしては名案ね」

「あんなことがあつた後だし、1人でいるのはたしかに心細いかな」

「じゃあ決まりね。さっそく交換しましょ。渡瀬君の携帯は赤外線通信に対応してるわよね？」

「対応はしてるけど、ほとんど使わないから呼び出し方がよく分からないんだよな。ちょっと待ってて」

とりあえずメニューを表示してみる。皮肉にも一番左上に赤外線

マークが出てきた。さっそく通信モードに切り替える。

「よし、OK！」

二三香の携帯に向けて発信し『データ送信完了』のメッセージが表示されると、二三香も「あ、来た来た。これで登録完了」と素早く指を動かし始めた。

「それじゃ次は久坂さん」

「未波でいいよ、呼び方。何かよそよそしいし」

さらりと無茶な要求をされ、準は一瞬面食らう。

「え、そう？　じゃ、じゃあ未波……い、行くよ？」

ほんの数時間前まで見知らぬ者同士だったことを忘れてやしませんか、お嬢さん？

そう言ってやりたいのをこらえながら、再び通信モードにして携帯を差し出す準。

「うん……。やさしくしてね？　初めてだから」

「……はい？」

「未波、そのへんにしときなさい」

二三香の冷やかな声が割って入った。

「誰もいないからいいようなものの、学校前の道端で白昼堂々口にしていい台詞じゃないわよ。渡瀬君も未波の悪ふざけにいちいち付き合うことなんてないからね？」

「あ、ああ……」

何とか落ち着きを取り戻し、軽く笑ってみせるものの、準の目は完全に泳いでいた。引きつり笑いもかくやという顔だ。

一方、未波はと言うと。

「ちよっと言ってみただけなのに……」とつまらなそうな顔をしている。

「バカやってないで、さっさと交換しちやいなさいよ」

「そ、そうだ。早く交換しよう」

再び互いの携帯の赤外線通信部を近づける。二三香の時と同じく数秒ほどで通信は完了し、続いて逆の要領で2人の連絡先が準の携

帯に登録された。

携帯そのものは塾に通い始めた小6の頃から持たされていたが、従姉妹たちを除く同年代の女の子の連絡先をメモリに登録するのは、これが初めてだった。

「このあと私たち電車なんだけど、渡瀬君は？」

「俺はここが最寄りなんだ。だから駅でお別れ」

「へえ、地元なんだ？ 近くていいな」

「ほんと羨ましいわね。それに引き替え、私たちは片道1時間半。特に朝なんか大変よ」

未波と二三香、2人分のため息が重なる。

「いや、出身は元々ここじゃなくて茨城なんだ。ほんの1ヶ月前まで向こうに住んでて、高校も土浦に入る予定だったんだけど、親の転勤の都合で……」

「え、そうだったの？ じゃあ家族でこっちに？」

「いや、転勤先は静岡。親と妹は向こうに引っ越して、俺はこっちで一人暮らし。この近くで親戚がマンション経営してて、そこに住んでる」

「ひ、一人暮らし！？ 高校生で？」と、派手に驚いたのは未波だった。

無理もない。当の準でさえ未だに事態を把握しきれていないのが正直なところだ。

「まあ珍しいと言えば珍しいかも知れないな。漫画とかアニメだと一人暮らしの高校生なんて当たり前に出てくるけど、俺もまさか自分がそうなるとは思ってなかったし」

「一人暮らしかー。憧れるな」

二三香も遠い目をしている。おそらく彼女たちの中では『一人暮らし』自由気まま』といったイメージなのだろう。

たしかに自由気ままではある。遅くまで起きていようと、寝転がってゲームに没頭していようと、誰からも文句を言われない。

しかし、それはあくまでも自己責任の代償として与えられるもの

だ。朝は誰も起こしてくれないし、食事を作ってくれる人もいない。生まれてから15年間、ずっと母親任せにしていたことが、一気に降りかかってきたと言っても過言ではない。掃除、洗濯、食料の買い出し、果ては新聞勧誘のやり過ぎ方まで。

「これが結構大変なんだよ。それより今入ってきた電車じゃないか？ 君たちが乗ろうとしてるのは」

やや年季の入った黄色の車体がホームに滑り込んでくるのを視界の端で捉えながら、準は改札の向こうを指さす。

「あつ、急がなきゃ！ それじゃまた明日ね」

「何かあつたらすぐ連絡するから、よろしくね」

「ああ、また明日な」

2人が改札の向こうへ消えると、準は歩いてきた道を引き返した。大手チエーンのラーメン屋や定食屋が並ぶ通りを抜け、突き当たりの角を曲がると、準が住んでいる5階建てのマンションが見えてくる。

今年の秋で、ちょうど築20年。風呂・トイレは別々、8畳の洋室と6畳の和室それぞれにクローゼットと押入れが付いていて、一人暮らしにはやや広すぎる間取りだ。

鍵を開けて玄関に鞆を置き、洗面所に直行する。鳥居の下で倒れた時に付いたであろう土埃や枯葉をできるだけ早く落としておきたかった。

ハンカチを水で軽く湿らせ、丁寧に土埃を拭き取っていく。

入学初日から派手に汚れたものだ。ひとまずドライヤーでも当てておけばシワにならずに済むだろうか。

着替えを済ませて時計を見ると、まだ1時半を少し回ったばかりだった。

この時間帯ではテレビをつけてもさして面白くないし、商店街をぶらつくこうにも、まだ足が言うことを聞きそうにない。学園の敷地を1周して駅まで歩いただけなのに、入学初日のプレッシャーと立ちくらみが拍車をかけ、実際の運動量以上に体力を消耗していた。

（少し昼寝でもするか…）

座布団を枕代わりに横になり、手足を思い切り伸ばす。軽く目を閉じると、未波と二三香の顔が浮かんだ。

話して食べて走って歩いて倒れて、また歩いて話して……なんてことをやっていて考える余裕などなかったが、2人とも容姿に関しては準のストライクゾーンのと真ん中をぶち抜いていた。

（あの子たちと連絡先交換しちまったんだよな……）

さっきの赤外線通信を思い出し、準は身をよじる。

緊急連絡用という名目上、電話が鳴らない方が状況的に好ましいのは百も承知だ。

しかし、自分の携帯に今日知り合ったばかりの女子の連絡先が登録されているという事実は、ごく普通の高校生（しかもなりたて）である準を悶えさせるのに、十分な威力を持っていた。

第一章　お願いは計画的に　#6

渡瀬家の夜は早い。

と言っても、この部屋には準しかおらず、しかも高校入学初日ということで早めに寝る支度をしているだけなのだが。

ゴールデンウィークを過ぎる頃には、また以前のように日付が変わってから布団に潜る生活に戻っていることだろう。

ちなみに朝のホームルーム開始は8時40分。8時に起きたとしても十分間に合う。

だが一人暮らしを始めた今は、朝食や弁当を作る時間も計算に入れて動かなければならない。制服も、ただ羽織るだけの学ランからネクタイ付きのブレザーに変わった。

学食や売店もあるにはある。が、入学早々お世話になっただけばかりでは、いずれメニューに飽きてしまうだろう。出費だってバカにならない。大学進学後もここで一人暮らしを続けることを考えると、食事を自分で作る習慣や技術くらい身に付けておいて損はないはずだ。

時刻は10時を少し回ったところだった。

炊飯器のタイマーをセットし、キッチンの照明を落とす。とりあえず梅干入りのおにぎりでも用意して、おかずは冷凍食品から適当に選ぶことにしよう。

これがアニメやライトノベルの世界なら、必ずと言っていいほど美少女（立ち位置はメイドだったり幼馴染みだったり様々だ）が同居あるいは近所に住んでいて、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれたりするのだが……。理想と現実のギャップはあまりにも大きかった。

（ま、初日からあの2人と仲良くなれただけで良しとするか）

唐突に降って湧いたような美少女とのキャッキャウフフ生活。簡単に諦めてしまうのはあまりにも惜しい。

誇張でも何でもなく、言うなれば男のロマン！

素晴らしいユートピア！

They said was in India！！

「はあ……」

準は妄想から覚めると、深いため息をついた。

誰もが思い描くような学園生活が仮に実現したとする。同じ通学路、同じ学年、同じクラス、同じ帰り道。共通項が増えれば接点も増えて、互いの姿を目にする時間は自ずと長くなる。そんな中で恋愛感情が芽生えるのは、相手に何かしら魅力があるからだ。

当然、自分にそんな魅力などあるはずもなく。クラス全員の前でしどろもどろになって幻滅されるか、物笑いの種にされる【B A D E N D】な結末しか見えてこない。

したがって、いかに現実とかけ離れた妄言であるかが分かるし、結果として『同じ悩みや話題を共有できる』知人・友人の存在——つまり未波や二三香の方が、精神面で大きなウェイトを占めるようになる。

もっとも、そんな悟りを開いたところで観衆恐怖症という根本的な問題が解決するわけではないし、分身が欲しいという考えも変わらないのだが……。

「ないものねだりも程々にしないとな」

半ば自嘲気味に呟く。

その時、ポケットの中で携帯が鳴った。

心配性の母親だろうか？ しかし、母親とは夕方電話で話しているし、明日に備えて早めに休むことも知らせている。

待ち受け画面（主にアニメやライトノベルなどの美少女キャラクター）は定期的に変えるが、着信音の個別設定などは一切しないので、ディスプレイを見ないと誰からの着信か分からない。その着信にしても大半がメールなので、たまに音声着信のメロディが鳴るたびに「誰だ？」と首をかしげるのが恒例の儀式になってしまっていた。

「はいはい、今出ますよ。どこのどなたかな」

独り言に変な節を付けながら携帯を取り出す。

電話の主は二三香だった。

さっそく何かあったんだろうか？

緊張気味に通話ボタンを押し、震えを押し殺しながら「もしも」と呼びかける。

「もしもし、渡瀬君？ ごめんね、こんな時間に」

「いや、まだこの時間なら起きてるから大丈夫だけど……それより何かあった？」

「うん。渡瀬君、今から秋津駅の南口改札前に来られる？ たぶんその方が、何があったか分かりやすいと思う」

よほどあわてているのか、肩で息をしているのが電話越しに伝わってきた。こういう時は電話口であれこれ質問しない方が得策だ。

「分かった。すぐ行くよ」

「改札前に着いたら連絡くれる？ メールでいいから」

「了解！」

流れで威勢のいい返事をしてしまったものの、正直何が何やらだ。しかし、二三香は秋津駅の南口改札前に来てくれと言っている。

状況を知る術が他にない以上、戸惑っている暇はない。

手早く着替えを済ませて部屋を飛び出し、秋津駅へと走る。

中学時代に陸上部で鍛えた足が功を奏し、電話を受けてから改札前に着くまで5分とかからなかった。

ポケットから携帯を取り出し『着きました』と手短にメールを送る。程なくして、二三香から返信が来た。

『そのまま改札の方から目を離さないでください』

二三香は電車通学だ。電車で来る以上、ここか北口改札を経由してくるはずなので、言われるまでもなく視線はそっちに向くのだが。

——明らかに何かがおかしい。

もしかしたら、二三香はすでに改札を抜けているのかも知れない。おおかた改札の方に意識を向かせておいて、突然後ろから現れて驚かすつもりなのだろう。

しかし、そんな下らないイタズラのために片道1時間半もかけて秋津まで来るだろうか？ 仮に思い付いたとしても、電話口で息を切らせるようなバレバレの演技をするだろうか？ 未波ならともかく、二三香がそんなことをするとは到底思えない。

未波本人が聞いたら頬を膨らませて憤慨しそうなことを考えていると、ようやく二三香が姿を現した。こちらの視線に気付くと、笑いながら手を振っている。

（考えすぎだったか……）

ほっと安堵のため息をつく。

しかし、何気なく瞬きをした直後、準は目を疑った。

ほんの一瞬前までこちらに向かって歩いていたはずの、二三香の姿がない。

「最後の最後で油断したわね」

背後から突然声をかけられ、準は反射的に振り向く。

視界に飛び込んだできたのは、背中にぴったりと寄り添うようなポジションで佇む二三香の姿だった。

「今、改札の向こうにいたよな？ いつの間に俺の後ろに回り込んだんだ？」

「答える前に、ひとつ問題。ほんの一瞬で別の場所に移動する能力のことを何て言うか知ってる？」

「瞬間移動？」

「正解。今、それを使ってここに来たの」

二三香が得意そうに指を立てた瞬間、その姿が再びかき消えた。そして、間髪入れず聞こえてくる声。

「こっちよ。券売機の前」

言われるままに券売機の方へ向き直ると、二三香が指を立てたまま微笑んでいた。

第一章　お願いは計画的に　#7

「びつくりしたでしょ？　ここへも電車じゃなくて、これで来たの。ちなみに、さつき電話した時はまだ家だったけど」

「夢、じゃないよな」

言いながら、準は自分の頬を思い切りつねる。――普通に痛い。

「ねえ大丈夫？　とりあえず落ち着いてよ、って無理もないか。私も正直びつくりしてるのよ。急にこんなことができるようになったちやって」

「急にできるようになっただって？」

さらに驚きながらも「いや待てよ？」と準は考える。

少なくともマジックの類ではなさそうだった。背景はどうあれ、単に準を驚かせるのが目的なら、結局イタズラと同じことだ。

二三香が緊急連絡用の電話をさっそく使うほどの用件となると、現状で思い当たるのはただひとつ。

「まさか、昼間の鳥居と何か関係でも……？」

「ええ、そのまさか。もつとも、私も確信があるわけじゃないんだけど。渡瀬君は私たちと別れてから何か変わったことはなかった？　たとえば昼間みたいな目眩とか」

「いや、あれから特に変わったことは……って、また倒れたのか？」

「倒れたりするほどではなかったけど、少しだけくらくたと、ね。たしか9時過ぎくらいだったかな、お父さんにコンビニでビール買ってきてくれて頼まれたの。一番近いコンビニでも歩いて10分くらいかかるし、正直面倒だなーとは思ってたんだけど、たかがビールくらいで口喧嘩になるのも馬鹿馬鹿しいから行くことにしたわけ。でも玄関を出た瞬間、急に目眩がして目の前が真っ白になって……。気が付いたら、今まさに行こうとしてたコンビニの駐車場に立ってたの」

「なるほど……自分の意志で好きな場所に瞬間移動できるようにな

ったってことか。目眩はその副作用的な何かで」

「ううん、目眩がしたのは最初の移動の時だけ。家に戻ってからも何度か試してみたんだけど、体は別に何ともなかったわ。しかも驚いたことに、私自身が見覚えのある場所なら精度も百発百中なのよね、ちよつと手出して」

「こう？」

言われるままに右手を差し出す。

「OK。ちよつと失礼するわね」

そう言つと、二三香は自分の左手をそこに重ねた。

電極を刺されたカエルのように、準の体は大きく痙攣する。

「動かないで！——大丈夫よ、怖がらなくても」

「わ、悪い。つい緊張して……」

二三香がゆつくりと目を閉じていく。

故意に間を持たせるような演技をしているわけではないと理屈では分かるのだが、視覚と意識を占有されてしまったが最後、あまりにも時間が長い。この分では、そのうち二三香の脈拍や息遣いまで聞こえてきそうだ。準はあわてて一昨日始まったばかりの深夜アニメのオープニングテーマを脳内BGMに流し始める。

そして、出だしのハイハットからイントロに移る、まさにその瞬間。

「！？」

視界が急に真っ暗になった。

別に二三香に合わせて目を閉じたりしたわけではない。むしろ、蛍光灯の点っていた部屋が急に停電になった時の変化に近い気がする。

あわてて顔を上げ、あたりを見回す。

最初に目に入ってきたのは、外灯の薄明かりに照らされたグラウンド。

続いて非常口を示す緑色の光が不気味に漏れている校舎。

どうやら、秋津駅の改札前から秋津学園の敷地内に瞬間移動した

ようだ。

「びつくりしたなー！ 移動するなら先に言ってくれよ」

「ごめんね。ちょっと試させてもらったわ」

「試すって何を？」

「2人いっぺんに移動できるかどうか、よ。今までは私だけの瞬間移動しかしてなかったし」

「ああ、なるほど」

「でも試せば試すほど分からなくなるのよね。どういう原理でこんなことができるようになったのか」

「たしかに謎だな。仮にあの鳥居が少しでも絡んできるとしたら、俺も含めて他のみんなにも何かしら影響が出てるはずだ」

「そうね。同じように瞬間移動できるようにするのか、これとはまた違う超能力が使えるようになるのか……」

「ところで、未波や先生たちはこのこと知ってるのか？」

「まだ知らせてないわ。未波に知らせたらパニックになって冷静に考えるどころじゃなくなるし、塩崎先生も初島先生もまだ連絡先知らないし」

「とりあえず明日にならないと駄目か」

「正直、渡瀬君にも知らせようかすごく迷ったんだけど……ごめん、迷惑だったよね」

二三香はそう言うと、申し訳なさそうに俯いた。

「何言ってるんだよ。元々そのために番号交換したんじゃないのか？ いきなり瞬間移動がどうのとか言われた時は正直びっくりしたけど……。ところで、みんなには明日話すんだろ？」

「一応そのつもり。事前に可能性を把握できてれば、オカルトパワーが急に発動してもパニックにならないで済むでしょ？ あの目眩だって心臓に悪いし」

「オカルトパワー、か……」

「だって科学的な根拠が何もないじゃない。あくまでも仮定してるだけよ。たとえば、そうね……。脳とか筋肉の働きを人工的に引き

上げて使えるようになった能力とかならず少しは格好が付くし、因果関係も分かっているから安心できるんだけど」

「難しいことはよく分からんけど、根拠とか原因とかは今考えても仕方ないんじゃないか？ 誰にどんな力が宿ったか、その力は当人の何に基づいて与えられたか、最初に能力が発動した時どんな条件下にあったか。最低限このあたりのデータが揃わないと、俺は原因どころか法則性すらつかめないと思う」

「となると、今はただ待つのみか……」

「ひととおり全員の能力が発動するまではな」

「もし、誰も発動しなかったら？」

「ついさっきまで得意げに能力を披露していたのが嘘のように、二三香の声が急に弱々しくなる。」

「あんまり無責任な言い方はしたくないけど……正直言つて、このままじゃ迷宮入りだ。でも、打つ手はまだいくらでもある。あの鳥居に的を絞って学園付近の歴史を洗ってみるとか、どっかでお祓いしてもらうとか」

『このままじゃ』の部分の特に強調する。もつといい解決策が塩崎や初島、あるいは未波から出てくるかも知れない。

「鳥居の素性さえ分かれば、問題は半分解決したようなもんだ。能力に関しては前向きに考えよう。使えるうちに使ったもん勝ちってことで」

「……ありがとう。やっぱり渡瀬君に相談してよかった」

二三香が準の胸元に額を押しつけるようにもたれかかってきた。部分的な体感温度とシンクロするように、脈拍数も急上昇していく。何とか話題を逸らさなければ、鼓動がダイレクトに伝わってしまいそうだ。

「ま、まあ俺も一応当事者だし。ところで、まだ帰らなくて大丈夫なのか？」

「今何時？」

二三香は額を押しつけたまま離さない。準は外灯に照らされた時

計に視線を移し、

「10時27分」と答える。

「そっか。もうそんな時間なんだ」

二三香はようやく額を離す。

「ほんとに大丈夫か？」

「ありがと。もう大丈夫だから。……そうだ、駅まで送るわね」

何とか元気を取り戻してくれたようだ。二三香が準の肩に手を乗せた次の瞬間には、再び秋津駅の改札前にワープしていた。

「それじゃ気を付けて。って、家まで瞬間移動だから関係ないか」

超能力にもマジックにも縁遠い環境で育ってきたせいだ、つい月並みな言葉を口走ってしまい、あわてて訂正する準。

「渡瀬君もね。すぐそこだからって油断しないように」

「はは、気を付けるよ。それじゃまた明日」

「うん、おやすみなさい」

昼間と同じように、お互いに手を振り、それぞれの家路を辿る。

「さて、帰ったら今度こそ寝るぞ！」

さっそく明日から授業が始まる。さっきまでのことも早いところ未波たちに報告しなければならぬ。今日以上に長い一日になりそうだ。

第一章　お願いは計画的に　#8

「厚焼き卵には大根おろしが一番だな」

焼き上がったばかりの厚焼き卵をフライパンの中で朝食用と弁当用に切り分けながら、準は舌鼓を打った。

一人暮らしを始めて3週間あまり。

なるべく栄養が偏らず、なおかつ自分でも作れるメニューを考えながら徐々にレパートリーを増やしてきたが、厚焼き卵だけは毎日欠かさず食べている。一口大に切り分けて大根おろしを乗せ、少し醤油をたらすのが準のお気に入りだ。もっとも、それは朝食用限定の話で、汁漏れのリスクを冒してまで弁当箱に入れたりはいしないが、4月とはいえ、早朝の台所は少し肌寒い。食べる前に制服に着替えた方がいいかも知れない。暖房をつけてもよいのだが、台所全体が温まるのを待つよりも遙かに手とり早いだろう。

寝室に使っている和室で着替えを済ませ、ようやく朝食にありつく。

それにしても静かだ。

ドアを開け放って洋室のテレビをつけているのに、まったく言うていいほど耳に入ってこない。自分だけ別の空間に隔離されているのではないかと錯覚してしまう。

「おいおい、今さらホームシックとか笑わせんなよ」

わざと声に出してみる。しかし、その自分の声も急にフェードアウトして聞こえなくなってしまった。

そして、準は気づく。

——これは錯覚ではない。

心当たりはないが、ストレスが何かで耳の聞こえが一時的に悪くなっているのだろうか？

（ひとまず横になって様子を見るか）

こんな状態では、とても落ち着いて食べていけない。一旦寝室

に戻ろうと席を立つ。

と、突然濃い霧がかかったように視界がボヤけ始めた。続いて、脳を揺さぶられるような浮遊感。準はあわてて椅子に座り込む。

二三香が昨夜言っていた目眩のことが、ふと脳裏をよぎる。

疑っていたわけではないが、二三香の言っていたことは本当だったようだ。となると、自分もどこか別の場所に移動してしまうのだろうか？

（だとしたら、先に着替えといてよかった）

ストップウォッチで正確に計っていたわけではないが、目眩は30秒ほどで徐々に治まってきた。聴覚も元に戻りつつある。

おそろおそろ目を開け、準は仰天した。

そこは台所だった。それも自分の部屋の。どこからどう見ても、寸分変わらず自分の部屋の台所の風景だ。たったひとつの間違いを除いて……。

「お、おい！　そこで何してるんだ。いつの間に忍び込んだ！？」

準は半分震えながら、その『間違い』に向かって怒鳴った。

椅子の足下に、1人の少女が横たわるように倒れていた。

「ん……」

怒鳴り声で目が覚めたのか、少女はゆっくりと体を起こす。

顔立ちや体つきから察するに、年は13〜14歳くらいだろうか。邪推すればどうにでも解釈できるが、まさか小学生ということはあるまい。

『かわいい』と『美少女』の中間に行くような、くつきりとした輪郭と人懐こそうな目鼻立ち、さらりと背中まで伸びた黒髪。周りに同年代の男子がいたら、確実にモテることだろう。

この肌寒い中、半袖の体操服にブルマ、さらに室内にも関わらずスニーカーという出で立ちが謎と言えば謎であるが。

しかし、問題はそこではない。

さっきよりも優しい口調で準は尋ねる。

「君はここで何してるの？　いったいどこから入ってきたんだ？」

質問したからと言って答えてくれる保証はどこにもないのだが、
かと言って高圧的に出るばかりでは何も解決しない。

少女は意外にもしっかりした口調で答えてくれた。

「初めからいました。その……正確には昨日の昼頃からですけど」

「昨日の昼からここに潜んでたのか!？」

「いえ、そうではありません。私は、その……あなたの分身なんです。今まで姿が見えなかったのは、あなたの体と同化してたからであつ、同化って言っても変な意味じゃありませんから、勘違いしないでくださいね?」

「ちょ、ちよつと待った。分身だつて?」

「はい。あなたは昨日鳥居の下を通りましたね?」

「あの部室棟裏の鳥居のことか? たしかに通った。目眩を起こして倒れるわ、制服が泥だらけになるわ、散々な目に遭ったよ。おまけに……」

「お連れの方が奇妙な能力に目覚めてしまった、と」

「……知ってるのか」

「ええ。あれにはちよつとしたカラクリがありまして」

「カラクリ?」

「長くなりますが、順を追つてご説明しますね」

そう前置きをすると、少女は淡々と語り始めた。

「あの鳥居は、昨日お連れの方が言っていたとおり、結構頻繁に現れたり消えたりするんです。それ以外は普通の鳥居なので別に近づいても安全なんですが、ある条件が揃った状態で来られると、必要に応じて特殊な能力が身に付くようになります」

「条件つて、たとえば人数とか時間帯とか?」

「ご名答! まず5人であることがひとつ。なおかつ、5人とも何かしら深い悩みを現在進行形で抱えていることが条件になります。

たとえば、昨夜のあの方は……」

「二三香のことか?」

「そう、二三香さんは自宅と学校が遠すぎることを悩んでいた。そ

の悩みを一気に解決する手段として瞬間移動能力が備まりました」
「……となると、俺を含む他の4人も遠からず超能力が発動するってことか」

「いいえ、残り3人です。二三香さんとあなたは発動済みですから俺も発動済みってどういうことだ？」

「とぼけないでください。あなた、昨日の昼前からずっと『分身欲しい分身欲しい』と考え通しだったでしょう。それで分身能力が備わり、その分身が私というわけです。私の存在そのものが、すでに能力が発動しているという動かぬ証拠です」

「いや……だからって、どうして——」

「どうしてこんな子供が分身なんだ。そう言いたいのでしょうか？」

あくまでも部分的にですが、能力者本人、つまりあなたの好みが反映された結果ですので私にはどうすることもできません」

「本人の好みってことは、男だったら女の分身、女だったら男の分身しか出てこないわけか」

「ホモやレズでもない限りはそうなりますね」

想像して準は青ざめた。ガチムチの筋肉野郎に『分身だから』と居座られても、それはそれで困る。野郎だらけの汗くさい部屋などまっぴらごめんだ。

その点ではこの体操服少女の方が遙かによかったが、だからと言って年がら年中そばをうるつかれてはかなわない。部屋に2人である時に親でも来ようものなら、言い訳のしようがないではないか。

「ひとつだけ確認したい。1度分身として現れたら、ずっとこのままなのか？」

「あなたが私に向かって『戻れ』と念じれば元のようにな体化します。召還したい時も同様に『いでよ！』とか『ババア、俺だ。結婚してくれ！』と念じればOKです」

後半があまりにも意味不明だった。

「とにかく自由に出し入れできると考えていいんだな？」

「そんな……『出し入れ』だなんて、見かけによらずエッチですね」

「ちよつ!？ いや、そつちの意味じゃなくてだな」

「うふふ、冗談ですよ。とにかく、マスターの生活の邪魔にはなりませんよ、ってことです」

(こいつ……口調は大人びてるが、言動や発想は未波そっくりだな)
準は心の中で毒づいた。

「ところで、お願いがあるんですが」

「変なことではなればいいぞ」

「お名前を教えてくださいませんか？ それと、私にも名前を付けていただけたら嬉しいなあ、なんて」

言われてみれば、お互いに名前を知らなかった。このまま話を進めるとややこしくなりそうだ。

「それもそうだな。俺の名前は渡瀬準。こんな字を書く」

言いながら、テーブルに指で書いて見せる。

「親が狙ったのか偶然そうなったのか知らないけど、3文字とも？ さんずい？ なんだ」

「あ、たしかに。すごいですね」

「だろ？ それで君の名前だけど、ちよつと時間もらえないかな。

せつかくだからきちんと考えて付けたいし、早いとこ食べて学校行かないと……」

いつの間にやら8時を回っていた。いくら何でも2日目で遅刻はまずい。

少女は「分かりました。楽しみにしてますからね」と、準の提案を快諾した。

すっかり冷めてしまった飯と厚焼き卵を一気に頬張り、味噌汁で流し込む。曲がりなりにも初対面の女の子の前で行儀悪い食べ方をするのは気が引けたが、今はそんなことに構ってられない。

そんな準の様子を体操服少女(現在名無し)も微笑ましそうに眺めていたが、ふと思いついたように口を開いた。

「食べながらいいので、ちよつと聞いていただけますか？」

「ん、どうした？」

「残りのお三方に能力のことをお話しするのは構わないんですが、どんな能力が発動するかは伏せておいて欲しいんです」

「伏せておくことは、君は未波や先生たちの能力を知ってるの？」

「ええ。あの鳥居のことも含めて、何らかの形で説明する役が5人の中から必ず1人選ばれるんです。今回は分身能力を持つ準さんが選ばれ、その分身たる私にすべての情報が与えられてまして……」

「分身能力を持つ人間がいなかった場合は？」

「全員の夢をジャックしてお伝えすることになります。少々乱暴ではありますが……」

「なるほどね。ちなみに、未波と先生たちの能力ってのは？」

「まずポニーテールの方は飛行能力、赤いメガネの方は透視能力、もう1人の女性の方は逆行能力、つまり対象物の状態を任意の時間軸まで戻す能力がそれぞれ発動することになってますね」

「どれも使えたら便利そうな能力ばかりだな。でも、それを当人に伏せておくのはどうしてなんだ？」

「能力の発動そのものは些細なことがきっかけで起こるケースが多いんですが、身に付けるためには、まず本人の強い欲求が必須条件になります。その前段階で能力云々の話をして、常識的に考えて信じる人はまずいませんよね？ 下手をすれば超能力全般に対する疑いが深まってしまふ可能性もありますし、逆に信じたら信じたで能力に頼ってしまい、目の前の問題に真剣に向き合わなくなります」

「たしかにそうだな」

「ですから、すでに発動しているお二人の能力に関しては話しても構いませんが、お三方の能力と発動までのプロセスは、くれぐれも内密にお願いしたいんです。私も皆さんの前では知らないふりをしていますから」

「分かった。ただ、学校にいる間はひとつに戻ってもらうぞ。いつ未波たちに説明することになるか分からないとはいえ、君をそのまま連れ回していると目立つからな」

「承知しました。必要なことは粗方お話ししましたし、いつでもOKです。と言うか、むしろ早く戻りたいです。この部屋、やけに寒くないですか？」

「まだ4月になったばかりだからな。朝晩は冷え込むし、第一そんな格好でいたら寒くて当たり前だ。そのうち風邪引くぞ」

横目で睨みながら、準はハツとした。今はテーブルを挟んで向かい合っているので見えないが、そんな格好。ブルマ姿だったことを今さらながら思い出す。

ブルマそのものはアニメや漫画などで知っている。しかし、実物を目の当たりにするのは初めてだし、体のラインその他がここまで露わになるなど想像すらしていなかった。

——エロい、とにかくエロい！

こんな少女とひとつ屋根の下で暮らしながら理性を保つなど、ほぼ不可能だ。遅かれ早かれ道を踏み外してしまうかも知れない。

いっそ封印したまま2度と呼び出さないようにしてしまおうか。そんなことを考えながら、準は少女に『戻れ！』と念じた。

第一章　お願いは計画的に　#9

何かしら秘密を抱えながら平静を装うのは、思いのほか骨が折れる仕事だ。人前に出なくとも脈は速くなり、声も小さくなる。呼吸するだけで体力ゲージが減っていく。その秘密を一貫して隠し通すつもりならまだいい。いずれ誰かに話さなければならず、そのタイミングもいつ巡ってくるか分からないとなると、精神的負担は計り知れない。

「ミスを上司に報告するタイミングを待ち続ける部下の気持ちって、きつとこんな感じなのかもね」

4時間目の授業が終わり、やっと訪れた昼休み。
消し終えた黒板を背に、二三香がぼつりと呟いた。

準は朝一番で二三香にすべてを話し、人気のない屋上を選んで体操服少女との顔合わせも済ませていた。もちろん、能力者たる準の好みが分身の外見に色濃く反映されていることは伏せて、だが。そんなことまで馬鹿正直に話せば変態扱いされるのは火を見るより明らかだし、あの服装では好みと言うより性癖に近いニュアンスでとられかねない。

準の返事にも自然とため息が混じる。

「俺たちは何も悪くないはずなのにな。それより、能力の扱いはもう万全なのか？」

「家と学校の往復にしか使ってないけど、今のところは特に問題ないわ。それよりも、渡瀬君の分身の女の子、結構かわいいわね。素直で礼儀正しいし、さっそく渡瀬君に懐いてるみたいだし」

「まあな。受け答えはしっかりしてるし、見た目もそこそこいいんだけど……」

「けど？　もしか、まだ何かご不満なの？」

「いや、あの格好だけはどうも……。2人で部屋にいる時なんかは目のやり場に困るだろうし、第一あれじゃ人前に出せないよ。ま

してや俺の身代わりなんて論外だ」

「それは言えてるわね。あんな格好で外を歩いてたら変質者に狙われるし、家の中でも朝晩はまだ冷え込んだりするから風邪引いちゃうかも。あ、それとも……ふふふ」

「な、何だよ？ 気持ち悪いな」

「目のやり場に困るってことは、多少は意識してる証拠よね。変質者は一番身近な所に潜んでたりして」

「おいおい、憶測だけで変質者呼ばわりは勘弁してくれよ。俺だって、自分なりにあいつのことを心配してるんだぞ」

「ちよつとした冗談よ。ところで、お昼ご飯はどうするの？」

「弁当作って持ってきたよ。朝の騒ぎのおかげで、だいぶ手抜きになっちまったけど」

「えらい！ ちゃんと自分で作るなんて。そう言えば未波の姿が見えないけど、どこに行つたのかしら？」

「さあ。俺は何も聞いてな……あれ？」

思わず言葉を切る準。

未波が青白い顔で机に突っ伏していた。

「どうしたの？」

「未波、戻ってきてたみたいだ。でも顔色がちよつとおかしいな」

「やけに青白いわね。まさか、これって……」

能力が発動するのかしら、と続けようとした瞬間。

未波の体が突如、宙に浮かび上がった。意識を失いかけているせいか、手足は力なく伸びたままだ。

一気に天井近くまで上昇すると、体の重心を少しずつ傾けながら、机のすぐ横の窓を抜け、さらに上昇していく。

この間、僅か5秒足らず。驚きの声を上げる間もなかった。

まるで、突如飛来したUFOにさらわれる、SF映画のヒロインでも見ているかのようだ。

準と二三香の他にも、何人かはこの超状態現象に気付いたらしい。だが、飛び去った物が何なのかまでは冷静に認識できなかったよう

で、みな一様に首をかしげたり目をこすったりしている。未波だと気付かれなかったのが不幸中の幸いだ。

「追いかけよう!」

「ええ」

電光石火の如く教室を飛び出し、廊下を全力疾走する。

追いかけると言っても、せいぜい屋上に上がることくらいしかできないのだが、このまま放っておくわけにも行かない。

階段を一段飛ばしに駆け上がり、ドアノブへ手を伸ばす。これで鍵がかかっていたら終わりだ。

しかし、準の指先が触れるより一瞬早くドアが開き――
隙間に体をねじ込むようにして未波が這い出てきた。

「二三香……? 準ちゃんも……どうしたの?」

「あんたが青白い顔でダウンしてると思いきや、急に浮かび上がったりするもんだから、びっくりして追いかけてきたのよ!」

「浮かび上がった、ってどういうこと?」

「今のを覚えてないのか?」

「うん。急に目の前が真っ白になって……そう、机に伏せてたはずなんだけど、気付いたら屋上で倒れてた」

階段の手すりにもたれながら未波が答える。準もそうだったが、完全回復までは少し時間がかかりそうだ。

（ビンゴだな）

（そうみたいね）

準の視線に、二三香が小さく頷いた。意を決して未波に問いかける。

「未波は元々屋上に行くつもりだったんだろ?」

「え? 何で分かるの?」

驚いたように顔を上げる未波。

「ちよつと屋上に出よう。ここじゃ説明しにくい」と、準は右手を差し出す。

「分かった。あ、もう自分で立てるから」

よろよろと未波が立ち上がった。

屋上に他に誰もいないことを確認するなり、二三香は開口一番、「いい？ 落ち着いて、よく見ててね」と未波に告げる。

「うん、何だかよく分かんないけど」

「見れば分かるわ。それじゃ始めるわよ」

二三香の姿がかき消えた。親友が相手でもまったく容赦する気はないようだ。

「あ、あれ？ 二三香？」

「後ろよ」

振り向くと、さっきまで前にいたはずの二三香が立っていた。昨夜見せてもらったのとまったく同じ動きだ。1度見ているとはいえ、姿が突然消えるというのは決して心臓に良いものではないが……。

「あ、あれ？ いつの間に回り込んだの？」

「ちゃんと後で説明するわ。次、渡瀬君」

「連続で驚かせるようで悪いけど、よく見ててくれよ」

準はそう言うと、心の中で『いでよ！』と念じる。……さすがに『ババア、俺だ。結婚してくれ！』はありえなかった。

と、準の真横からスライドされた紙芝居のように、もう一体別のシルエツトが現れた。

背丈が肩あたりまでしかなく、準に比べてだいぶ華奢な体つき。準の体と完全に分離する頃には、少女の姿となって未波の目にもはつきりと映った。

「準ちゃん、その子……」

啞然としながらも、何とか口を開く未波。

「ああ、この子は」

分身を終え、傍らに立っている少女を横目で見ながら答えようとした瞬間、

「どこから誘拐してきたの？」

予想だにしない未波の言葉に、準と二三香は同時に「はあ？」と間抜けな声を出してしまった。クラス委員の3人中2人が誘拐犯。

サスペンスドラマにしたら間違いなくコケそうな設定だ。いや、それ以前に誘拐した少女を自分の体内に取り込んでいる時点で人外モンスター決定ではないか。今ここにいるメンバーだけでホラーやスプラッタ映画のワンシーンが撮れてしまう。

「ご、誤解のないように言っとくけど、この子は誘拐してきたんじゃないからな。俺の体から分裂したのを今そこで見てただろ？」

「いきなりこんなことを言っても信じられないと思うけど、渡瀬君の分身なのよ」

必死に説明を試みるが、未波は銅像のように固まったまま動かない。おそらく理解してもらう以前に、耳に入ってすらいらないのだろう。

途方に暮れる準と二三香。

と、見かねた分身少女が未波に直接呼びかける。

「えーっと、未波さん、でしたっけ？ お二人の言うとおりで、私は準さんの分身なんですよ」

「ど、どういうこと……なの？」

「ちよつと長くなりますけど……まず未波さん。あなたは昨日鳥居の下を通りましたね？ そして、急に目眩を起こして倒れましたね？」

「鳥居って……部室棟の裏にあった、あの？」

「はい。結論から言うと、あの鳥居の下を通ると本人が現状で抱えている悩みや願い事に合わせて、特殊な能力を使えるようになるんです。まあ、ちよつとした条件が必要なんですが、詳しくは後でお二人から聞いてください」

「それじゃ、二三香の瞬間移動とか準ちゃんの分身……あと、私が空中に浮いたりしてたって言うのは、その能力のせいってこと？」

「そのとおりです。目眩は能力を授かる時と初めて使う時の副作用みたいなものでして、2度と起こりません。ために『飛べ』と念じてみてください」

「え？ や、やだよ。危ないし」

「飛ぶ時の高度やスピード、着地点なんかは自分の意思でコントロールできますから大丈夫ですよ」

「本当に？ それならやってみるけど……ちょっとだけだよ？」

「自分を信じてください。その能力で解決したい問題や悩みがあったはずですよ、未波さんにも。まあ、あとは楽しんだ者勝ちですけどね！」

「そんな簡単に言わないでよ」

ぶつぶつ言いながらも未波は静かに目を閉じる。少女の言葉で覚悟を決めたようだ。

未波が自由に飛び回れるようになるのに、さほど時間はかからなかった。

と言っても、トラブルがまったくなかったわけではない。飛び始めた当初は姿勢が今ひとつ安定せず、そうなるとスカートなども盛大にめくれ上がったたりするわけで……。

リボンが付いた逆三角形の白い布地は、しっかりと準の目に焼き付き、しばらく離れてくれそうになかった。

第二章 準ずる者と類する者と #1

「紙とペンを発明した人は偉大だよな」
放課後の教室。

突拍子もなく飛び出した未波の言葉に、メモ帳にペンを走らせる準の手が止まった。

所属する部活や同好会がまだ決まっていなかったか、クラスの連中はホームルームが終わるや否や早々と帰ってしまい、残るは準と未波と二三香の3人だけ。妙に閑散とした空間では、普段なら見逃してしまうような些細なこともやたらと耳や目に付くようになる。まして、会話の流れも文脈もなく放たれた言葉であれば尚のことだ。

「急にどうしたんだよ」

「いつぺんに覚えたり処理できる量ってたかが知れてるじゃない？でも、紙切れ1枚とペンさえあれば、1度忘れちゃってもサルベージできるし、効率も上がる。これってよく考えたらすごいことだよ！」

「ああ、言われてみればそうだな」

それなりに理論的で筋も通っていると準は思った。

しかし、子供のように目を輝かせた未波が言うと、信憑性は大幅ダウンだ。そのギャップがおかしくて、思わず吹き出してしまう。

「人が珍しく真面目に話してるのに失礼だなキミはー」

「悪い悪い」

「『珍しく』ってことは、普段真面目じゃないって自覚はあるわけね。ところで、さっきから一生懸命何を書いているの？……誰かの名前？」

傍らで静観していた二三香が、手元のメモ帳を覗き込みながら尋ねる。

「分身の名前だよ。なるべく早めに付けてやるって約束しちゃった

からな。しかも『俺の分身らしい名前』って条件付きで」

「分身って、あのブルマっ娘？ あの子かわいいよねー。また会いたいなあ。って言うか愛したいっ！ 主に目と手で」

未波の指が何かを驚掴みにするような、何とも気持ち悪い動きを始める。

「どこぞの工口親父か、あんたは！」

さらに怪しげな薄笑いまで浮かべる未波の額に、二三香の水平チヨップが入った。

「それで名前は決まりそうなの？」

「いや、もう決めたよ。凝りすぎて変な名前になつたら本末転倒だし、そもそもあいつの元になつて俺自身が凝った存在じゃないかな」

「じゃあ早く付けてあげた方がいいと思うよ」

「そう急かすなよ。言われなくても今呼び出すから」

「未波の場合、単にあの子に会いたいたけなのが丸分かりよ」

メモ帳を閉じて胸ポケットにしまい『いでよ！』と念じると、黒髪ロングのブルマ少女が準の真横に現れた。魔法のランプも真つ青の手っ取り早さだ。

「お呼びですか？」

「ああ。今朝家を出る前に約束した名前、ようやく決まったよ」

「ほ、ほんとですか？ やったあ！」

胸元でガッツポーズをして喜ぶブルマ少女。まだ教えていないのに……と準は呆れ顔になったが、無邪気な笑顔を見て悪い気はしない。

「ほらほら、静かに。誰かに見つかったら大変だぞ、ルイ」

「ルイ……渡瀬ルイ……どんな字を書くんですか？」

「カタカナで『ルイ』だ。まず俺の名前が準。よく『。』に準ずるって使い方をするだろ？」

「はい」

「それに近い表現で『。』に類する』ってのを思い付いたんだ。こ

れなら分身らしい名前って条件にも合う」

「カタカナにしたのはどうして？」

未波が首をかしげる。

「逆に、そのまま漢字を当てるとどうなる？」

「渡瀬類……動物の分類みたいで何か変」

「だろ？ カタカナにすれば名前の体裁も整うし、かわいらしさも3割増し（当社比）で一石二鳥だ」

「すごい……すごいよ。準ちゃん、あんた天才だよ！」

当社比のくだりをあっさりスルーして、未波が目を輝かせる。

しかし、二三香の反応は未波とは対照的だった。

「未波を喜ばせてどうすんのよ。ルイちゃん……ってまだ決まったわけじゃないわね。この子に気に入ってもらえなきゃ意味ないですよ。私もいい名前だとは思うけど……」

二三香の言うとおりだった。未波に褒められて有頂天になっている場合ではない。

準はおそろおそろ少女に向き直り「どう……かな？」と消え入るような声で問いかけた。

少女は考え込むように目を閉じたまま何も答えない。

そのまま流れる沈黙。

無理もないと準は思った。

ただ泣くことしかできない生まれたばかりの赤ん坊ならいざ知らず、目の前にいるのは十分に物心の付いた——さらに言えば年頃の女の子だ。『名は体を現す』という諺があるように、一生付き合う名前の選定となれば人一倍慎重にもなるだろう。

しかし、物事には限度というものがある。物思いに耽る少女を緊張の面持ちで見守る彫刻状態になって、数十秒が経とうとしていた。せめてイエスかノーかくらい答えてもらわないと、こちらの神経が持ちそうにない。

準が口を開きかけると少女が目を開けたのは、ほぼ同時だった。喉まで出かかっていた声をあわてて抑え、思わず息を飲む。

そして入れ替わるように少女の口が開き――

「ありがとうございます」

耳を澄ましてようやく聞き取れる程度の小声だったが、少女の口から発せられた言葉は準の耳に――もちろん未波と二三香の耳にも、はつきりと伝わってきた。

「よかった……。気に入ってくれたんだな」

「はい。うまく言えませんが……。割と普通の名前なのに、準さんなりの考えやお心遣いが詰まって……。すごく嬉しいです!」

はにかみながら答えるルイ。

「やったね、準ちゃん!」

「よかったじゃない。さっそく今日からルイちゃんって呼ばせてもらうわね」

未波と二三香も緊張の糸が切れたのか、さっきまでと打って変わって声に明るさが戻っている。ルイもお調子者ぶりを取り戻しつつあるようで、

「わたくし、渡瀬ルイをこれからもよろしくお願いします!」と、はいてもいないスカート裾をつまむような仕草をして見せた。

「ルイにゃんかわいいよルイにゃん……」

色っぽいのか気色悪いのか、よく分からない声で未波が悶え始める。

勝手に萌え死ぬのは構わないが、レズっ気全開でルイを襲ったりするのは勘弁して欲しいものだ。

ルイと未波の百合展開――正直、見てみたい気もしなくはないが、それは保護者的な立場の者として到底許されない。

「未波……どうでもいいけどあんた、ルイちゃんに手を出して渡瀬君に殺されても知らないからね?」

準の心中を代弁するかのように釘を刺す二三香。だが、二三香も未波とは違った意味で明らかに何か勘違いしている。勝手に人をヤンデレキャラに仕立て上げるとは何事か。

「殺されるとか物騒なこと言うなよ。あ、だからって手を出してい

いつてわけじゃないからな？」

「心配しないでよ。ルイちゃんに手を出していいのは準ちゃんだけってことくらい分かってるって」

「ちょっと待て！ どこをどう解釈すればそんな結論に辿り着くんのだ！ いいか？ いくら分身とはいえ、ルイにはルイの意志があつてだな」

未波のストッパー役であるはずの二三香にまで悪乗りされ、準も一気にヒートアップしていく。ルイはルイで顔を真っ赤にして俯いてしまうし、もう踏んだり蹴ったりだ。

未波と二三香もルイの様子に気付き、心配そうに声をかける。

「ごめんね、変な話して。今のはみんな冗談だから」

「あつ、いえ。私も取り乱してしまつてすみません」

ハツと顔を上げてルイは答えた。かと思いきや再び頬を赤らめ、「でも、準さんならいいかな、その……出されても……」と小声でぼそぼそと呟いたりして、どうも落ち着かない。堂々と逆セクハラ発言を連発していた今朝の態度はいったい何だったのかと小一時間ほど問い詰めたくなってくる。

「俺がどうしたつて？」

最後まで聞き取れずに聞き返す準。

「な、何でもありません、独り言ですっ！」

うまくはぐらかされてしまった。しかも、ルイにはルイの意志があると明言してしまった手前、しつこく追及できない。「そっか……」と引き下がるしかなかった。

「見せつけてくれちゃって、まー。でも、こうして見るとさ、兄と妹って感じたよね」

「まだちよつと他人行儀だけだね」

ルイの基本口調は敬語ないし丁寧語。至極当然の感想だ。かと言って、それを強引に改めさせるのも何というか、気が進まない。

とりあえず、ひとつ屋根の下に暮らす後輩くらいに考えておこう。準はそれで自分を納得させることにした。

第二章 準ずる者と類する者と #1（後書き）

ついに謎の体操服少女に名前が付きました。

そして、未波・二三香の百合属性が少しずつ、

しかし確実に開花していきます。

併行する形で、ルイの素性も徐々に明らかに……

次話以降も引き続きよろしく願います！

第二章 準ずる者と類する者と #2

ルイを一旦格納して教室を出ると、すでに7時を回っていた。日が長くなつてきているとはいえ、さすがにこの時間では真つ暗だ。

特に、準が中学を卒業するまで住んでいたあたりは、ここ30年ほどで整備された新興住宅地ということもあり、日没後は電柱の白色蛍光灯と民家から漏れてくる灯りを頼りに家路を辿るしかなかった。その点、秋津駅前には商店が建ち並び、夕方ともなれば帰宅途中の学生やサラリーマン、買い物中の主婦などでごった返している。都会過ぎず田舎過ぎず、雰囲気だけで安心できるロケーションは滅多にない。

ちなみに未波と二三香は「買ったばかりの定期を無駄にできない」と言つて、能力を使わずに電車で帰つていった。

ふと1組のカップルが目に入った。線路向こうにあるスーパーの袋を下げて仲良く歩いているので夫婦かも知れない。

あんな光景を見ると、時々無性に羨ましくなることがある。かなり下世話な見方だが、愛に飢えているからだろうか？ しかし、準も両親に愛され、兄弟にも恵まれながら何不自由なく育ってきた。現に今も十分な仕送りを受けながら一人暮らしを満喫させてもらっている。羨む理由など見当たらない。なのに……。

いずれにしても、あまりじろじろと凝視するものではない。早いところ通り過ぎてしまおうと、踏み出した右足に力を込める。

「渡瀬君」

突然背後から声をかけられ、準は心臓が止まりそうになった。ダツシユの構えで姿勢を低くしたまま一瞬固まってしまう。女の声だが、未波と二三香はもう電車に乗っているはずだ。

（あれ？ この声は……）

振り返ると、塩崎が鞆を提げて立っていた。ビンゴだ。初島を従えているのは予想外だったが、2人の関係を考えれば特に意外では

ない。

「今帰り？」と初島が尋ねる。相変わらず胡散臭いほどにポーカーフエイスな男だ。

「はい。あの2人と教室でダベってたら、いつの間にかこんな時間に……」

準はバツが悪そうに言葉を濁した。自習や部活をするわけでもなく学校に長居をするのは、意味もなく後ろめたいものがある。

「あら、さっそく仲がいいみたいね。そのままリア充街道まっしぐらかしら？ 羨ましいぞコノヤロー！」

突然、塩崎がヘッドロックをかけてきた。

昨日昼食を共にした限りでは分らなかったが、口より手が先に出るタイプなのだろうか？ 未波とは対照的に。

自分たちがくじで決めた組み合わせなのに理不尽極まりない仕打ちだ。

「ちょ、痛いです。離してください！」

痛みに耐えながら目を開けると、通行人の1人と目が合った。塾帰りだろうか、地元の中学校のものと思われる制服を着た女の子だが、露骨に目を逸らされてしまった。他の通行人の視線も総じて冷たく、準のガラスの心にざくざく突き刺さる。

（おい誰だ、今『いいな』。我々の業界ではご褒美です』とか言っただろ。お望みならば今すぐ代わってください！）

「なあ、そのへんにしとけよ。通り歩きの邪魔だ。それに教頭に見つかったら、またお説教1時間コースだぞ」

初島が助け船を出してくれる。効果は抜群で、日頃は初島の言葉に耳を貸さない塩崎の動きがピタリと止まった。準は心の中で「ナイス！」と喝采を送る。

「……お説教はイヤ！」

見るからに、教頭が怖いからと言うより、お説教が面倒だからとでも言いたげな表情になる塩崎。初島もそれをお見通しとばかりに、さらに冷たい言葉を浴びせる。

「お説教だけならまだいい。それでロスした時間の分まで残業代が出てると保護者が知ったら、多分みんなブチ切れるぞ。残業の中身が中身だけに」

「エ？ ナニソレコワイ」

どうやらこれが決定打になったようだ。

片言の言葉と共に、準は解放された。枕が変わって寝違えた時のように首筋が痛い。

「史郎ちゃんがいじめるんだけど……」

「いや、いじめられたのはむしろ俺なんですけど？」

準は半眼で反論する。もちろん2、3歩後ずさって距離を取るのも忘れない。塩崎の射程圏内にこれ以上いるのは自殺行為だ。

「それにしても、お説教から残業代って発想はなかったわ」

いつの間に立ち直ったのか、塩崎が半ば尊敬するような眼差しで初島を見る。

たしかに体罰は良くない。だが、状況や程度によるとはいえ、学校側としては——もちろん初島も含め、対外的に明るみになりさえしなければそれで問題ないはずだ。準自身、塩崎の行動から悪意は感じないし、強いて言うなら中学時代に所属していた陸上部の朝練や合宿の方が、ニュアンスとしてはよほど体罰に近かった。それだけに、初島の指摘は新鮮に感じられた。

「本来、生徒の前でするような話ではないんだろうけどな」

初島はいかにも「口が滑った」と言わんばかりの苦々しい顔で前置きをする。

「前の職場では、どちらかと言うと経営者寄りの視点で物を考えることが多かったんだ。新人もベテランも関係なく」

「たしか求人広告の会社ですよね」

「そう。広告の形に仕上げるためには、仕事の内容、給料、勤務時間や日数、必要な資格、それ以外の細かい条件なんかをまず取材しなきゃならない。求人広告を出すのは基本的に経営者、学校に置き換えて言うなら校長や理事長クラスの人間だ。そういう人たちと日

常的に関わっていると、労務管理なんかに自然と敏感になってくるんだよ」

「一種の職業病みたいなもんですか？」

「身も蓋もない言い方をするとね。俺自身も最後は経費削減のために会社をリストラされちまってるし、どうしても黙ってられなかったんだ。それに、学園が経営破綻したとかならまだしも、ただの悪ふざけを体罰と誤解されてクビになるなんてバカバカしいだろ？」

平たく言えば『自重しろ』ってこと」

なるほど……と準は納得した。初島とて、ただ塩崎をからかって遊んでいるわけではなかったのだ。しかし――

「何よ偉そうなこと言ってくれちゃって。一応私の方が先輩なんだからね！」

当の塩崎はご立腹だった。しかも、ご丁寧にアヒル口まで作っている。もし初島の立場だったら「せつかく心配してやってるのに、その言い草は何だ！」と啖呵を切ってしまいそうだ。

「まあ史郎ちゃんの言うとおりなんだけどね。私なんかより社会人経験長いし――いえ、私みたいに生徒しか相手にしない仕事では社会人経験なんて皆無に等しいわね。学生気分が未だに抜けてないのも自覚してるし……」

「サラリーマンと教師では、そもそも評価の基準が違うからな。悩んだところでどうしようもないだろ。それに、俺だって教師になった以上はそっちのルールに従わなきゃならないし、世間一般で言う社会人経験とやらも前の会社をリストラされた時点で打ち止めさ」

「そう言ってもらえると気が楽だけど、でも……史郎ちゃんは本当にそれでいいの？ 私には学園に誘った責任だってあるし……」

「別にいいと思ってる。経験は積みなくても、心掛けや自覚だけなら自分の意志ひとつでどうにでもなるからな。学校つてのは『正しい答え』を教えてくれても『適切な答え』や考え方までは教えてくれない。親切なように見えて、実際はかなり無責任な組織なんだ」

初島は特に腹を立てる様子もなく、塩崎への返事も実に淡々とし

たものだった。元々はオフ会で知り合ったと言っていたが、当時からこんな感じだったのだろうか。

ふと、さっきのカップルを思い出す。シチュエーションこそ違うが、第三者的に見て感じ取れる雰囲気は、塩崎・初島コンビのそれとよく似ている。

続いて未波と二三香、そしてルイの顔が脳裏に浮かんだ。塩崎と初島の見かけ上の関係と同様に、恋人同士というわけではないが、紛れもなく準自身が見つけた仲間だ。それは何をするにも1人の今、両親の愛情などのように『与えられるタイプの絆』とは明らかに違った意味合いを帯びてくる。目下の最重要課題は、如何にしてそれを深めていくかだ。

「悪いな、これから晩飯って時に長々と足止めして」

「大丈夫ですよ。今日はもう有り合わせの冷凍食品で済ませますから」

初島に頭を下げられ、準はあわてて答える。特に堅苦しさは感じないものの、律儀な人柄が言葉の端々に垣間見えた。

「最近では冷凍食品も色々出てるからねー。ちゃんと使いこなしてて偉いぞ！」

「先生たちもこれから帰って晩飯ですか？」

「ああ。俺と塩崎先生は駅から自転車だけど、君はたしか歩きだったよな？」

「ええ、歩いて5分もかかりません」

「そう。じゃあ気を付けてね。家が近いからって寄り道しちゃ駄目よ？」

「お疲れー。また明日な」

2人が駅前の駐輪場に向かうのを見届け、準も家路を急ぐ。

さつきは冷凍食品で済ませるなどと適当なことを言ってしまったが、今日はルイとの記念すべき1日目だ。少し贅沢にファミレスで食事をして罰は当たるまい。席に着いてから呼び出し、通路側でガードするような位置に自分が座れば、相変わらずのブルマ姿でも

おそらく大丈夫だろう。

第二章 準ずる者と類する者と #3

10分後。

一旦部屋に戻って着替えを済ませた準は、椅子の背もたれに体を預けて伸びをしながらため息をついていた。目の前に鎮座するは低い唸りを上げる型落ちのノートパソコン。

秋津駅周辺のファミレスをネットで検索してみたはよかったが、いずれも歩いて行くには少し遠い場所にあった。

こうなったら手段はひとつしかない。

手早くノートパソコンの電源と台所の照明を落として、再び部屋を出る。転がるように階段を駆け下り、準はポケットから銀色——だったが、2年ほど使い込まれて暗い灰色に変色した小さな鍵を取り出した。自転車を使えば、信号待ちを含めても片道10分ほどで行けるはずだ。

カラカラと軽快な金属音を響かせながら、乗り換え客でこった返す商店街を進む。

自転車を押しながら商店街を抜けると、準はサドルにまたがり力一杯ペダルを踏みしめた。勾配のない平坦な道なので、自転車はどんどん加速していく。

地下に潜っているJR武蔵野線と並走するように移動し、やや広い市道との交差点を曲がればファミレスまで一直線だ。まだ着慣れていない制服からの開放感と相まって、頬に当たる夜風が心地よい。休日の散歩コースにちょうど良さそうだな、と準は思った。

部屋を出て10分ほどでファミレスの黄色い看板が見えてきた。目算どおりだ。駐輪場に自転車を停めて店に入る。

ざっと見渡す限り、客は準の他に3〜4組ほど。時間帯から推測すると、これから混み始めるのかも知れない。ルイを呼び出すにはちょうど良さそうだ。

程なくしてカウンターの奥から店員が現れる。

「いらつしゃいませ。1名様ですか？」

「はい。ただ、後からもう1人来るんで2人になります」

「かしこまりました。では席へご案内しますね」

準が通されたのは一番奥のテーブルだった。店員は慣れた手つきでお冷やとメニューを並べ、足早に去って行った。

改めて店内を見回す。

他の客はみな家族連れかカップルで、食事や談笑に夢中になっている。さらに、オーダーは各テーブルに設置されたボタンで店員を呼ぶシステムになっているので、こちらが押さない限り店員がやってくることもない。ルイを呼び出すには絶好のチャンスだ。

準は客席とカウンターに視線を向けたまま『いでよ!』と念じた。

「はい、何かご用でしょうか？」

ルイの脳天気な声が響く。場所が場所だけに、よそ見などしていいようなものなら店員と間違えてしまいそうな営業スマイルならぬ営業ボイス。

「しっ! とりあえずそこに座って」

唇に人差し指を当ててルイを制し、もう片方の手で向かいの席を指差す。

「え? あ、はい。分かりました」

言われるままに席に着くと、ルイは再び準に尋ねる。

「ここは……ファミレスですよ。今日はここで食事ですか？」

「ああ。ルイと出会った記念日って言うか、その……」

「あつ! そう言えば私たち、今朝初めて会ったんでしたっけ。すみません、顕現したり戻ったりを繰り返したせいか、すっかり忘れてました……。わざわざ呼んでいただいてありがとうございます!」

「いや、謝ることはないよ。何回も呼び出してるのは俺だし。ところで、ルイは食事とかできるんだっけ? 注文する前に確認しておこうと思ってさ」

「はい。一応食べられますけど、同化していれば準さん1人分で私も食事をしたのと同じ状態になるんです。その方が出費も少なくて

済むと思うんですが……」

「出費のことは気にしないでいいよ。こういうのは雰囲気が一番なんだ。それに、俺も一人で細々と食べるより、ルイと一緒にの方が……って、俺は何を言ってるんだ！ と、とにかく、食べるなら早く決めよう。はい、これメニユー」

「そうですか……？ それじゃお言葉に甘えてご馳走になります。えーっと、何にしようかな」

食い入るようにメニユーを見始めるルイ。よほど嬉しいのか、鼻歌交じりに見せる笑顔は年齢相応と言うか、とても無邪気だ。見かけより大人びた口調や態度ばかり目にしてきたせいかな、なおさらそれが際立って見える。準もつい笑みがこぼれそうになり、あわてて顔をメニユーで隠した。

秋津に引越した初日以来ファミレスとご無沙汰だったせいだろうか、和食も洋食も中華も全部が美味そうに見えてくる。真剣な表情で吟味するルイの気持ちは何となく分かる気がした。それこそ視線でメニユーに穴が空くのではないかと心配になるほどに。

しかし……と準は思い直す。

ここで肉の味を覚えて舌が肥えてしまうと、明日以降の自炊に対するモチベーション低下を招くおそれがある。ルイはともかく、曲がりなりにも家計を切り盛りする者として、それだけは何としても避けなければならぬ。

「どう？ 決まりそう？」

「はい、色々悩みましたけど決まりました」

「よし。それじゃそのボタンを押して」

「ラジャー！」

ルイがボタンを押すと、どこからともなく『ピーポーン』という音が鳴り響き、さつきとは別の店員が早歩きで現れた。

「お決まりでしょうか？」

「はい。俺はシーフードパスタのサラダセット、飲み物は烏龍茶で。ルイは？」

「私はドライカレーピラフのサラダセットで、飲み物はアイスレモンティーをお願いします」

「デザートは？」

「うーん、どれも美味しそうなんですけど、食べ過ぎにならないか心配で……。今回はパスしておきます」

「そっか。じゃ、また今度だな。すみません、以上です」

「かしこまりました。お飲み物はお食事と一緒に持ちしますね」

店員は注文用の端末をポケットにしまいながら一礼すると、小走りで厨房へと消えて行った。

「ふう…… やつと落ち着いて話せる」

「そうですね。二三香さんの話だと、今どきこんな格好の人はいないそうで……。準さん以外の人の前に出るのが恥ずかしくなってきました」

「時代はともかく、たしかに外を歩けるような格好じゃないな。それは体育の授業とかがある時に学校の中で着るもんだ。と言っても、もう10年以上前の話だけだ」

かく言う準もルイに出会うまで——ほんの半日前まではブルマの実物など見たことがなかったので、曖昧な返事しかできないのだが、「そっか。ルイの服のこと考えないとな……。いずれ先生たちにも紹介することになるだろうし。とりあえず明日にでも未波たちに相談してみるか」

「助かります」

「ところで、物が食べられるってことは、顕現してるうちは普通の人間と同じ体質なのか？」

「そうですね。違いを強いて挙げるとしたら、身体能力が普通の人間より高めなことと年を取らないことくらいですね」

「さらっととんでもないことを言うんだな。だとすると、俺がしくちゃのジジイになっても、ルイは今の姿のまま……？」

「はい」

「それじゃ俺が死んだ時はどうなる？」

「その同時刻をもって消滅することになります。あの世でも一緒になれるかは神のみぞ知る——ってところですけど。そういうわけですので準さん！」

ルイが急に真剣な表情で身を乗り出してきた。

「ど、どうしたんだよ急に」

「できるだけ長生きしてくださいね！ 私はできるだけ長く準さんと一緒にいたいです」

「いくつまで生きられるかは正直分からないけど、できるだけ頑張ってみるよ」

「約束ですよ？」

延々と他愛のない話をしているうちに、2人分の料理が同時に運ばれてきた。

「美味しそうですね」

「ほんと美味そうだな。冷めないうちに食べよう」

「いただきまーすっ！ ……んー、やっぱり美味しいですー！」

カレーピラフを一口食べて、ルイが歓喜の声を上げる。

「そっか、よかったな。よーし、それじゃ俺もいただくと思いますかね」

たらこソースとイカをパスタに絡めてシソの葉を添えた普通のシーフードスパゲッティだが、一口食べると濃厚なたらこの風味と、シソの程良い苦味と香りが全体に広がって予想以上に美味い。さらに空腹がフォークの動きを加速させ、10分とたたないうちに完食してしまう。

まだ3分の1ほど残っているカレーピラフを頼張るルイを横目に、準はカバンからメモ帳を取り出した。

今日はルイの名前を考える時にしか出番はなかったが、普段は主に予定を書き込む手帳代わりに使っている。

おもむろに明日の日付けが入ったページを開く。

続いてペンケースからペンを取り出すと、準は比較的きれいに整

つた字でこう書いた。

『ルイの服の件で未波・二三香に相談。超重要案件！』

第三章 セーラー服と守り神 #1

「だったらメイド服に決まりだね！ 王道とお約束の違いも分からないド素人なんてお呼びじゃないのさベイベー」

「いいえ、ナース服以外ありえないわ。ルイちゃんの知的な雰囲気をも100パーセント生かすなら、ここはナース服一択よ！」

燦々と降り注ぐ陽光が眩しい昼休みの屋上。

ゆづベルイと交わした約束どおり、未波と二三香に服のことで相談を持ちかけた準は、その答えに愕然とした。

ちなみにメイド服を推したのは未波、ナース服を推したのは二三香である。

準は全身の力が抜けていくのをこらえながら、さらに説明を試みる。

「重ね重ね言うけど、必要なのはあくまでも『服を買いに出かけるための服』なんだ。コスプレ大会に行くんじゃないし、そもそも2人はメイド服とかナース服なんて持つてるのか？」

「持つてるわよ。元演劇部員だし、ある意味当然よね。ちなみに私の自作だったり」

「あたしも持つてるよー。中学の文化祭の仮装コンテストで着たやつ」

「冗談だろ……？」

平然と答える2人に、準は開いた口が塞がらない。

どんな演目でナース服が出てくるのか、また、どんな経路でメイド服を調達したのか気になるところだが、そこにあっさり食いついては話が大きく脱線してしまう。それに、アニメや漫画は大好きだが、コスプレは準の守備範囲外だ。

ふつつつと沸き上がる疑問を抑えながら、なおも粘る。

「普通の服なら何でもいいんだ。たとえば中学の時に着てた制服とか」

それを聞いて、二三香がポンと手を打つ。

「なるほど、そういう手もあるわね。私ので良ければ押入に眠ってるけど、サイズは未波の方が近いかもね。未波はまだ持ってる？」

「私も持つてるよ」

卒業から1ヶ月しかたっていないとはいえ、お下がりで譲ってしまっている可能性も考えられる。未波の言葉に、準は胸をなで下ろした。

「いやー助かった。さっそく今度の週末にでも借りていいかな？」

「うん、いいよ！……って言うか明日だよな？今日は金曜だし」

「早くも交渉成立ね。あとは私がルイちゃんを瞬間移動で連れて行けばOKと。さすがに渡瀬君が女子中学生の制服持ったまま街を歩くわけに行かないものね」

「そうだな。変な噂が立ったら終わりだ」

「そうそう、ひとつ聞きたいんだけど」

やや真剣な表情で、二三香が準に尋ねる。

「どこで買つか、ある程度目星はついてるの？」

痛い所……と言うか、まったく予想外の所を突かれ、準は返事に詰まった。そんな様子を見て、二三香は嘆息する。

「はあ……思ってたとおりだね。未波、明日は一日空いてる？」

「ばっちり空いてるよ」

「じゃあ決まりね」

「決まりって何がだ？」

二三香の言わんとしていることがよく分からず、準は即座に聞き返す。

「私たちも買い物に付き添うわ。ルイちゃんは服のことしか言わなかったと思うけど、替えが必要な物は服以外にもあるでしょ？」

「なるほど、そういうことか。……となると、たしかに一から十まで俺が付いてるわけには行かないな」

ようやく二三香の真意が読めた準は、顔を赤くしながら頷いた。ルイに金だけ渡して買いに行かせ、準は別の場所で待つという手

もある。だが、ルイは見てのとおり推定年齢13歳の外見だ。さすがに迷子になることはないだろうが、たとえばすり寄ってきた店員に、訳も分からぬまま高い服を売りつけられる可能性は十分考えられる。

それに、普通の服ならまだしも下着売場にまで付き添う度胸はない。ルイだってあまりいい顔はしないだろう。

しかし、目の前の女子2人組が付き添ってくれば問題はすべて解決する。そして何よりも、服を見る目は間違いなく準より確かなので、安心して任せられる。

「ありがとう。恩に着るよ」

「いいっていいって。あたしはルイにゃん七変化を見るためなら何だってするよ！」

自信満々に言い放つ未波。

「変態は置いてくから、そのつもりでね？」

間髪を入れず、二三番の冷静なツツコミが入った。

「ルイにナース服を着せようとした人間が言う台詞じゃないだろ。メイド服より遥かに変態じみてるぞ」

改めて釘を刺す準。

ただの服選びがマニアックな衣装合わせと化してはたまらない。

たしかに、ルイの外見に似合わぬ大人びた言動を考えればメイド服よりナース服が似合うのは明白だし、デフォルトの体操服ブルマよりマシと言えなくもないが、目立つ格好であることには変わりない。

「でもさあ……」

納得が行かないといった表情で未波が口を開く。

「どうしたんだ？」

「新しい服を買ったら、あの体操服とブルマはどうなるの？ ルイにゃんが気にしてるなら仕方ないけどさ、あたしは正直あれが一番似合ってると思うんだよね」

「気にしてるかどうかは分からない。俺はただ『人前に出ても平気

な服が欲しい』としか言われてないからな。ってか、そんなに気に入ってるなら直接ルイに掛け合ってみればいいだろ。あいつにも明日の買い物の件は話さなきゃならんから、その時にでも」

「たしかに、あれはあれで他に代え難い魅力があるわね」

意外なことに、二三香も未波と同意見のようだ。

「2人の意見が合うって珍しいな」

「誤解してるみたいだけど、私と未波は年中言い争ってるわけじゃないのよ？ それに、今のルイちゃんに一番魅力を感じてるのは渡瀬君なんじゃない？」

「はあ！？ 何バカなこと言ってるんだよ！ 頭の中が昭和で止まってるおっさんじゃあるまいし」

「おやおやー？ 準ちゃんのお顔が真っ赤ですぜ、二三香の旦那。こりゃあれですな、ムツリスケベってやつ？」

未波が絡んできた。しかも、新しいおもちゃを見つけた子猫のような目つきで。

これはまずい。

二三香の言うことは図星だが、素直に「はい、そうです」と認めるわけには行かない。

ルイは自分の姿が準の潜在的な好みに基づいた結果であることを知っている。にも関わらず、ルイは未波と二三香に対し、それを伏せる形で己の顕現した理由を説明した。

自分の個人的なプライドはどうでもいいとしても、ルイの配慮を無駄にするのはいかがなものだろう？ かと言って、ムキになって否定すれば自ら墓穴を掘るようなものだ。

準は事実と創作を半々にして誤魔化す作戦に出た。

「魅力を感じてる余裕なんかないよ。ひとつ屋根の下に住んでると尚更な。俺が男だからかも知れないけど、とにかくにも目のやり場に困る」

「そっか……。私たちは学校でしかルイちゃんに会わないから忘れがちだけど、呼び出してるうちは同棲してるのと同じなのよね」

「ネガティブな言い方をすると、一部始終を監視されてるようなもんだ」

二三香の口から飛び出した『同棲』という単語にドキツとしつつ、準はため息をつく。

「ルイにゃん持て余してるならあたしが喜んで引き取るんだけどない。うへへへ」

未波がよだれを拭う仕草をする。普段の流れなら「そんなこと誰も言ってねえよ」と横目で睨んでいるところだ。しかし、それをやってしまったと、うまく変わりつつある話の流れが台無しになりかない。準はそ知らぬ顔でスルーした。

二三香も「やれやれ」とばかりに苦笑いしていたが、急に真顔になり、

「でも服とかに限らず、困ったことがあったら相談に乗るから遠慮しないでね」

話題を変えようと張りつめていた神経が途切れ、二三香と入れ替わるように、今度は準の表情が緩む。作戦成功だ。

「そう言ってもらえると少し気が楽になるよ。俺には話せなくても、女同士なら気兼ねなく話せることだってあるだろうしな、あいつも……」

「ところで、お二人さん。もうすぐお昼休み終わるよ？ 早く教室に戻らないと」

未波の声が割り込んだ。

携帯の時刻表示を見ると1時25分。5時間目の授業開始5分前になっていた。

「あ、もうこんな時間か。休み時間に限って流れが速いんだよね……」

教室まではゆっくり歩いてても1分とかからないが、教科書にざっと目を通すくらいはしておきたかった。何事も最初が肝心だ。「ところで次は何だっけ？」

意気込んだはよかったが、次が何の授業だったかどうしても思い

出せず、準は未波にたねる。

「準ちゃん……」

突然、未波の声が暗くなった。

「ど、どうしたんだよ。変な声出して」

「いくら何でも次の授業の科目忘れるなんて……。同じクラス委員として、あたしは悲しいよ！」

「へえー。あんたが真面目に委員長やるなんてね。こりゃ今晚あたり槍か1万円札が降るかも」

拳を握りしめて涙を流す未波に、二三香は心底意外そうな反応を示した。しかし、次の瞬間には未波もけろつとした表情に戻り、

「真面目について言っても、とりあえず最初だけだよ。手を抜いても平気なところが見つかるまでのガ・マ・ン。てへっ」と舌を出して笑い始める。

「……前言撤回。やっぱり未波は未波だったわ」

「手抜きは未波さんは高校でも健在なのでしたー」

特に反論するでもなく、ひたすら笑い続ける未波。

「まあ、俺も気が緩んでたつて言うか、自覚が足りなかったつて言うか……。やつと思ひ出したよ。次は数学Aだろ？ 早いとこ戻ろう。俺、数学苦手なんだよ」

「あ、2人は先に教室戻つて。あたしトイレ寄つてくから」

一足先に階段を駆け降りる未波。

その背中に、二三香が声をかける。

「晩御飯までには戻つてくるのよ？」

ピタリ。

そんな擬音が聞こえてきそうなほど静かに、未波の足が止まった。そして猛然と振り向き……

「いくら大きい方だからつて、そんなにしかかつてたまるかー！」

階段の前を通りかかった男子生徒が、水飲み場で手を洗っていた女子生徒が、声の主に注目した。

「何だつたんだ、今の……」

「大きい方がどうのこうのって聞こえたな」

「……胸の話かな」

「あんたって胸のことしか頭にないわけ？　さいつつつてーね。」

私はその前にトイレがどうこうって話し声が聞こえたんだけど……」

「ってことは、まさか」

「何を想像してんのよ。さいつつつてーね！」

ざわめきの中から漏れ聞こえる会話が、徐々に真相に近づきつつある。

が、未波はそんなことお構いなし。再び猛ダッシュで走り去ってしまった。いや、気づいていない可能性もある。

「未波……。さりげなく墓穴掘ったな」

「ええ。5分で戻って来られるかしら。何にせよ、学食でカレー食べた後じゃなくてよかったわ」

「……勘弁してくれよ」

お前もさいつつつてーだな！　と罵倒してやりたい衝動に駆られるが、気まずい空気を共に分かち合える仲間を、みすみすドブに捨てるわけにはいかない。ここはひたすら我慢の人だ。

——とは所詮ただの綺麗事で。

カレーは渡瀬家主催の夕食メニュー選考会場から退場を余儀なくされたのだった。

第三章 セーラー服と守り神 #2

乾いた足音と共に、4人分のコーヒーが運ばれてくる。

足音に混じって聞こえるカチャカチャという音は、グラスに氷がぶつかる音だろうか？

不規則ながら、どこか事務的な響きだと準は思った。
学校帰り。

時間帯で言えば午後4時過ぎという、昼食にも夕食にも半端な夕イミングで寄った喫茶店。

客は他になく、照明も有線の音量も控えめに抑えられて異様な静けさを放っている。

準は落ち着かない様子で天井を見上げた。

いや、実際居心地の悪さを感じているのだが——原因は店内の雰囲気より、主に同席しているメンバー構成にあった。

準の傍らにはルイ、向かいの椅子には未波と二三香。4人掛けの席を、額面どおり4人で囲む構図となる。

パーテーションで区切られたボックス席は、程良い狭さといい薄暗さといい、居酒屋でよく見かける個室さながらだ。

そんな密室同然の状況下で、準の心臓はと言うと——地下の活断層や海底プレートと共鳴して大地震でも引き起こしそうなほどに高鳴っていた。

男1人に女3人。

「リア充爆発しろ！」

そんな罵声が飛んできそうな超黄金比率だが、独特の薄暗さと閉塞感準の交感神経をこれでもかと刺激した。

「お待たせ致しました」

店員の抑揚のない声が響く。穏やかで、静かで、どこまでも透明な水面を思わせる声。準は神妙な面持ちで耳を傾ける。

コーヒー・ストロー・ミルク・スティックシュガーの順番でテ-

ブルに並べていく一連の慣れた手つきも、この張り詰めた状況（主に準にとってだが）にあつては、事務的な冷たさより絶対不変の安心感を与えてくれる。そんな気がした。

「準さん。さつきからどうも落ち着かないみたいですけど、もしや喫茶店初めてだったりします？　ゲスな言い方をすると『喫茶店童貞』ってとこですかね」

ハッと顔を上げると、声の主——ルイが訝しげに準の顔を横から覗き込んでいた。

「どどどど童貞ちゃうわ！」

条件反射的に叫んでから、はたと気づく。

ここにはルイの他に、未波と二三香もいるわけで——案の定、向かいの席からは好奇に満ちた視線が投げかけられていた。

「ルイにゃん……。『童貞』なんて言葉、どこで覚えてきたの？　あたしは、そんな……。そんな破廉恥な子に育てた覚えはないよっ！」

芝居がかった口調で、テーブルを拳で叩く真似をする未波。

いったいどの口が、そのような厚かましい物言いをするのか？

そう問い詰めたい衝動に駆られる。

「うちの近く——あ、ここじゃなくて地元の方だけど、田舎だから喫茶店そのものがなかったんだよ。そりやまあ何度か出入りしたことはある。ただ、それはみんな野郎同士での話だ。正直言つて慣れてないんだよ、こういうメンバー構成つて言うか男女比率は」

未波のボケはルイが責任持つて拾えとばかりに、準は言葉を区切った。

しかし、ルイは未波のボケを徹底的に無視して、なおも食い下がる。二三香もアイスコーヒーをすすりながらだんまりを決め込んでしまい、未波の涙目が芝居ではなく本物になるのに大して時間はかからなかった。

「準さん。念のため言っておきますけど、ハンバーガーショップは喫茶店の力テゴリには入りませんか？　こんなこと、60年以上閉じ込められてた私でも知ってますよ」

「はいはい、すごいですね……」って、閉じ込められてただって！？
「どういうことだ、そりゃ？」

投げやりな返事から一転して、あわてて聞き返す準。

ルイが自身の過去について触れるのは、おそらくこれが初めてだ。他愛のない会話の応酬に紛れて、危うくスルーしてしまうところだった。未波と二三香も緊張の面持ちでルイを見つめる。

「閉じ込められてたって、まさか……あの鳥居に？」

目を丸くした未波の素っ頓狂な声が、静かな店内に響く。

「そう言えば、まだお話ししてませんでしたね。未波さんの言うとおり、私は閉じ込められてたんです。あの鳥居に」

ルイは淡々と落ち着き払った口調で答える。準たちのそれとは対照的だ。

「……迂闊だったわ」

今度は二三香が静かに口を開いた。

「どうしたの？」

未波が不安げな声で尋ねる。

「私たちに不思議な能力が宿りました。やがて、私たちの前に女の子が現れます。彼女は『例の鳥居が原因だ』と言いました。しかも、能力が宿るための条件など、鳥居についてやたら詳しく知っています。2人ならそこで何を考える？」

「うーん……『ルイにゃん、キミは何者だ！』とか？」

「俺も未波とだいたい同じかな。もう少し具体的に言っと、ルイは例の鳥居とどんな関係なのか、とか」

二三香の質問に若干惑いつつ、それぞれの見解を述べる2人。

「でしょ？ 超能力に振り回されて忘れちゃってたけど、それを真っ先にルイちゃんに聞くのが自然じゃない？ まあ直接聞かないにしても、少しくらい疑問には思うはずよ」

「あ、たしかに……」

「話の辻褄が合ってる割に、俺たちはルイに関する根本的なことを何ひとつ知らないもんな。たしかに二三香の言うとおりだ」

「ルイちゃん。差し支えなければ、あの鳥居がルイちゃんとう関係してるのか教えてもらえないかしら？　あと、もし分かれれば鳥居の素性も」

二三香は半ば懇願するように、真剣な眼差しをルイに向けながら言った。

「分かりました。まず私の自己紹介から行きましょうか。申し遅れましたが、私はあの鳥居の守り神……でした」

——沈黙が訪れた。

『守り神』という単語が頭の中で高速回転を始める。

複雑怪奇の一言では済まされない現象が立て続けに起こっているのだ。ルイの話そのものは眉唾もいいところだが、そういった背景を考えれば信じるに十分値する。いや、平常心を保つために信じざるを得ないと言い換えてもいい。

それだけに、ルイから発せられる一言一言が準たちに与えるショックはあまりにも大きすぎた。

いち早く思考を整理し終えた二三香が、おそろおそろ口を開く。

「守り神って、要するに『神様』ってこと？」

いやな汗が背中を伝っていくのを準は感じた。

不法侵入者と勘違いして怒鳴りつけてしまった相手が、

ドヤ顔で俗世まみれな名前を付けてしまった相手が、

ファミレスで気軽に食事を共にした相手が、

——神様？

喉がカラカラに渴いて、それなのに目の前のアイスコーヒーに手を伸ばすこともできない。ルイの言葉があたかも呪文だったかのように準の身動きを封じていた。向かいの席で未波と二三香も固まっていることだろう。

「準さん？」

ルイに呼びかけられ、ぎこちない動作で顔を上げる準。

（チャンスだ。今までの非礼を詫びるなら今しかない！）

直感的に悟り、必死に唇を動かす。

だが。

「……………て……………失礼を……………た……………」

——声が出ない。

言いたいことは頭の中でまとまっているのに。

それをありのまま口にすればいいだけなのに。

焦りがいよいよ頂点に達する。

「準さん、しっかりしてください。念のため言っておきますけど、守り神と言っても皆さんが考えてるような大それたものじゃありませんからね？ それに、変に畏まられると私も何だか話しづらいですし……。ほら、こんな時は深呼吸です。はい吸ってー」

焦点の定まらない目で必死に何かを話そうとする準に、改めて呼びかけるルイ。

気管に餅を詰まらせた老人の苦しみが何となく分かる気がした。思考回路の維持に脳機能の大半を奪われ、呼吸の優先順位が極限まで下がっているような——それどころか、呼吸の仕方すら忘れてしまったような感覚に陥る。

不意に背中に衝撃を感じ、準は現実に取り戻された。

背中に目を向けると、手のひらが当たっていた。

腕から肩へと視線を移し、最後にルイの顔が視覚情報として入ってくる。

そして、双方の目が合った瞬間。

「おかえりなさいませ」とルイ。

「ああ……た、ただいま」

——声が、戻っていた。思わず力の抜けた笑いが漏れる。それを見て、ルイも満足そうに微笑んだ。

第三章 セーラー服と守り神 #3

「それでは続けますね。えーっと、どこまでお話ししましたっけ？」
「鳥居の守り神ってどこ……だったかな」と未波。

「あのお化け鳥居ですが、元々は実在の神社でした。まあ、神社と言っても建ったのは都が東京に移ってすぐ後なので、大した歴史はありませんけどね。日本中の数ある寺社仏閣の中では新参中の新参、青二才もいいところです」

「ってことは明治の初め頃ね。でも実際にあつたはずの神社が、どうして……？」

二三香が質問を挟む。

「そもそもの発端は戦時中の空襲です。たまたま鳥居に憑依している最中に社が焼失してしまい、私は自力で外に出ることができなくなりまして」

「ちよつと待つて。神社ってことは神主さんがいたはずだよね？
焼けたまま再建されなかったってこと？」

信じられないといった顔の未波に、ルイは淡々と答える。

「再建されれば話は早かったんですけどね。結局、神主一族は終戦後も消息不明。残る手段はただひとつ、訪れた人の願いを叶えるために『強制的に引きずり出されること』だけになってしまいました。とはいえ、昔から人通りの少ない場所でしたから、40年ほど前に鳥居を覆い隠すような格好で学園ができると、チャンスはますます遠のきました」

神社が焼失しても、願いを叶えるだけの力は残っていたらしい。
「しかも、5人組の訪問者なり参拝者でないと駄目だって話だったもんな」

一昨日の朝、顕現したばかりのルイと交わした会話を思い出しながら準は呟く。

「そうなんです。人が来たかと思えば、みんな揃いも揃って少人数。

鳥居の幻影を作り出して存在をアピールしても、誰も気づいてくれない。しかも、そこに来る学生の目的ときたら、ほとんどが告白か逢引きか果たし合いか隠れタバコのどれかでしたからね。古くさい学園ドラマを延々見せられてるようで正直うんざりでしたよ」

堂々と自分の年齢を棚に上げ憤慨するルイ。神様にも年齢という概念があるのかどうかは分からないが、明治初期の生まれでは140歳くらいになっているはずだ。

「ちなみに、それで能力を授かった人は私たち以外に誰かいたの？」

二三香から投げかけられた質問に、ルイは無言で首を横に振った。「昨日もお話したように、5人組であることに加えて、全員が強い願いや深刻な悩みを抱えていることが必須条件です。空襲で焼ける前は5人組で訪れる人もちらほらいましたけど、みんな2つ目の条件でアウトでした。昔の人はリア充が多かったんですね」

悩みがないのはリア充と言うより、ただの脳天気ではないのか？

そんな思いが準の脳裏をよぎる。

その一方で、ある疑問が浮かんでくる。

「ところで、リア充だの学園ドラマだの、そんな言葉どう覚えたんだ？ 60年以上も前から鳥居に閉じ込められてたつてのに」

「外界の情報だけは閉じ込められてても何とかキャッチできてたんです。今思えば、内容的にちよつと偏ってたみたいですけど」

ブルマを何の疑問も違和感もなく穿きこなして登場するあたり、ちよつとどころではないような気もするが、いずれにせよ世間一般の常識はきちんと把握しているようだ。

「おかげで思ってたより退屈せずに済みましたけど、やっぱり外に出ないと体がなまってしまいました……。若く見目麗しい体で顕現させてくださった準さんには、ひたすら感謝感謝ですよ」

ルイはそう言うのと、ただでさえ密着気味な体をさらに密着させてきた。狭いボックス席では逃げ場もなく、かと言って邪険に扱うチャレンジ精神は持ち合わせていない。準はされるがまま、ルイの発展途上な胸の感触を味わうことになった。

と、二三香が新たに質問を投げかける。

「もし、神主一族の子孫が何かが今ひょっこり現れて『神社を再建する』とか言い出したら、やっぱり……その……戻らなきゃいけないわけ？」

ルイの表情が一瞬曇る。

「今さら戻るつもりはありません。もっとも、私がいることで皆さん、特に準さんのお邪魔になるようでしたら考えます。それでなくても、私は準さんの希望と若干ズレた存在のようですし……」

低く、感情を押し殺したような声に、準は胸が締め付けられるような痛みを覚えた。

おちゃらけた物言いの陰で、こんなにも傷つき悩んでいたことを、欠片も察してやれなかった自分が途端に腹立たしくなってくる。

「本気で邪魔だと思うなら、おとといの朝、うちの台所に転がった時点で警察に突き出してよ。自分勝手なことばかり考えて現実逃避してた俺が悪いんだ。少なくともルイのせいじゃない」

「ひとつ気になってただけど」

会話に聞き入っていた未波が、準とルイを交互に見つめながら切り出した。

「何でしょうか？」

「能力が備わるためには強い願望とか悩みが必要だって言うけどさ、ほとんど無関係なことがきっかけで発動してるよね？たとえば、私は家と学校の長時間移動が退屈で『空を飛んで移動できたらいいな！』って思ってたんだけど、実際に発動したのは昼休みに屋上へ行こうとした時だったし。たしかに階段を昇る手間が省けるのは便利だよ？でも、いくら無意識とはいえ、こんな下らないことに能力使っちゃっていいのかなーって思うんだよね」

「言われてみればそうね。私も未波と同じで、特に朝の移動時間をどうにかしたいと思ってた。もっとも私の場合、その解決手段が瞬間移動だったわけだけど、最初に発動したのはお父さんに買い物頼まれてコンビニに行こうとした時だったわ。渡瀬君は？」

「俺が大人数の前でうまくしゃべれないのは、もう話したよな？

クラス委員になった時、俺はたしかに『分身が欲しい』と思った。

もっと具体的に言えば、人前に出る時だけバトンタッチしてくれる？身代わり？が欲しかったんだ。でも、渡瀬準として人前出る以上、姿形は俺の完璧なコピーでなければならぬ。——もちろん細かい注文だつてことは自覚してる。そして、実際に現れたのは……」

ルイに配慮して、準は言葉を濁す。

「うーん、外枠の部分だけを拾って叶えられちゃったってことかな？用途とかは一切関係なく、でもどうせならかわいい女の子で……とか」

のんびりした口調とは裏腹に、変な所を鋭く指摘する未波。

とりあえず？かわいい女の子？に？準好みの？という修飾語が付かなかったのが不幸中の幸いか。

「それに関してですが、私は準さんにお詫びしなければならないことがあります。未波さんの言うとおり、私は準さんの願ひ事の細かい部分を見落として……いえ、正直に言うとお握りきれてませんでした。しかも、その願ひ事を成就させるのかこつけて、自分自身が外に脱出するための口実として利用しました」

「ちょ、ちよつと待ってくれ。逆に把握できてた部分つてのは、具体的にどんなことなんだ？」

「願ひ事に直結する要素に限つて言えば『分身が欲しい』という願望そのものだけです」

「その？願望？にはルイちゃんの外見とかも含まれてるの？」

「際どい質問を二三番に投げかけられ、準は心臓が止まりそうになった。」

「先程も言いましたように、準さんの願ひ事は私の外見に直接関係ありません。顔立ちや髪型は準さんの潜在思念を参考に、顕現時の服装や年齢設定は私の独断で決めてしまいました。ちなみに性格は素の私そのものです」

準は「なるほどな……」と呟くと、アイスコーヒーを一口啜つた。

自分の意思で外見を選べないというルイの言葉は、ある意味真実だったようだ。当の準自身、分身の存在を望んでいながら「自分のコピーで本当にいいのか」と自問自答するだけで、具体的かつ綿密なイメージはまったく言っていないほど固まっていなかった。まさに己の詰めのがさが招いた結果とも言える。

もっとも、設定を勝手に脳内補完して強引に転がり込んでくるあたり、分身ではなく押しかけ女房と言う方が表現的には正しいような気もするが……。

しかし、準は不思議とルイを責める気にはなれなかった。

よくできたコピーも、クラス委員の任期を全うすれば無用の長物と化してしまう。それならば1年間耐えてルイと末永く過ごす方が得られるメリットとしては遙かに大きいのではないだろうか？

そこまで考えて、準は諭すようにルイに語りかける。

「たしかにコピー人間は便利だけど、用が済めば目障りになるのがオチだからな。自分の銅像でも作って悦に入ってるようなナルシストならいざ知らず。そんな無駄なことをするくらいなら、俺はルイと一緒にいる方が断然楽しいよ。それに、クラス委員の仕事がなければ、未波や二三香とは同じクラスってだけで知り合うこともなかっただろうし、結果オーライでいいんじゃないか？」

「……！」

突如、ルイの顔がくしゃくしゃに歪んだ。

「ルイ？」

「準さん、私……準さんの分身になれて……よかった……」

瞳から大粒の涙が溢れ、頬を伝う。

あてたのは準の方だ。

嬉し涙であることは承知している。しかし、経緯はどうあれ年端も行かない女の子を泣かせてしまったという事実、これでもかと罪悪感に拍車をかけた。

「な、泣くなよ。『分身になれてよかった』って自分で今言っただけだよな？ だったらここは喜ぶ場面だろ」

言いようのない焦燥感と理不尽さを感じながらも、精一杯のやさしさを込めてルイを宥めにかかる準。

しかし、ルイは泣きやむどころか、ついには両手で顔を覆ってしまった。

……もはや手詰まりのようだ。我ながら情けないとは思いつつも、準は向かいの2人に視線で助けを求める。

「60年以上も同じ場所に缶詰め状態じゃ仕方ないわよ。それに……怖かったのよね？ 嘘がバレて渡瀬君に嫌われるんじゃないか、って」

二三香がやさしく問いかけると、ルイは小刻みに肩を震わせながら頷いた。

「変に混乱させた俺が悪かったよ。だから、いい加減泣きやんでくれ！」

頭を抱えてテーブルに突っ伏し、準は許しを乞う。

不意に、誰かの手が準の手にやさしく重ねられた。反射的に顔を上げると――

「未波……？」

「泣かせてあげようよ。気が済むまで……ね？」

「未波の言うとおりよ。ほんのちよつとだけ我慢しましょ？ 私たちは別に渡瀬君を責めたりしないから安心して」

そう言って、二三香はいたずらっぽい笑みを浮かべる。

準は返事の代わりに安堵のため息をついた。今まで生きてきた中で――二を争うほど深く長いため息を……。

正直なところ、準は2人から叱責されるのを半分覚悟していた。

こういう時の女の団結力は驚くほど固い。これは男側の思い込みでも勘違いでもない。実際、小中学校の9年間で嫌と言うほど思い知らされ、いつしか経験則として刷り込まれてしまった。男に生まれた者の宿命とも言える。

準も身に覚えがある。

たしか小学校5年の時だ。ある日、準はふとした出来心で、同じ

班の男子数名と共に掃除当番をサボった。それで何をしていたのかは覚えていないが、たぶん校庭でサッカーでもやっていたのだろう。何食わぬ顔で教室に戻った準たちは、すぐさま『クラスの女子全員に』身柄を拘束され、待ち伏せていた担任（これまた中年の女性教師だった）から鉄拳制裁をありがたく頂戴したのだった。

そんな過去の話はともかくとして。

「気が済むまで泣けばいい」などと気前のいいことを言ってしまったものの、ルイはすぐに泣きやんでくれるだろうか？ どれだけの涙を流せば気持ちにケリを付けられるのだろうか？

ふと考えてはみるものの、何と言っても60年以上だ。それなりに起伏のある人生を歩んできたつもり準だが、ルイの場合は閉じ込められていた期間だけでも、その4倍に相当する。あまりにもスケールが違いすぎて、もはや想像がつかない。

ところが、そんな懸念は結果的に杞憂に終わった。

準はルイの震える肩に釘付けになり。

未波はアイスコーヒをすすっては戻しを繰り返し（案の定、二三香に「汚いからやめなさい！」と止められた）。

二三香は氷を口に含んだまま物思いに耽り。

そんなことをしているうちにルイはようやく顔を上げたのだった。1ヶ月遅れの花粉症でも発症したかと思紛うほどに目を腫らして。ちなみに準も花粉症持ちだが、ここまで目を腫らしたことはいまだかつてない。

「……落ち着いた？」

グラスに残った氷の最後の1粒を豪快に噛み砕きながら、二三香が声をかけた。

「すみません、もう大丈夫です。60年——正確には65年のツケがこんな形で出るなんて思ってもみなくて……」

ルイは照れくさそうに答える。

それでも5分やそこから立ち直ってしまう図太さは大したものだ。普通の人間ならツケを払う前に精神を病んでいるに違いない。

と、その時。

「よし、今なら言ってもいいよね？」

突然、謎の前フリを始める未波。

このタイミングで何を言い出すつもりなのだろう？

ルイと二三香も同じことを思っただろう、

「何ですか？」

「何よ、いきなり」

「やだなあ、ルイにやんの服のことだよ。明日は土曜日で学校休みだから、みんなで買いに行こうって昼休みに話したじゃん」

「あ、そうだった！ 危うく忘れるところだったわ」

「え、私の服……？ 準さん、さっそく相談してくださったんですか？」

未波たちのやり取りを聞いて、ルイが目を輝かせる。

と、二三香が準に代わって明日の段取りを話し始めた。

「そうよ。まず、私が秋津駅で渡瀬君と待ち合わせて、未波の家に移動するでしょ？」

「はい」

「そこで渡瀬君はルイちゃんを呼び出して、一旦ベランダに出る。その間にルイちゃんは未波の中学時代の制服に着替えて、いざ出陣って流れよ。せっかくの能力だし、こういう時にこそ有効活用、もとい恩返ししないかね！」

「すごい……すごいです！ ありがとうございます！ 痛っ！」

勢いよく頭を下げすぎて、テールに額を強打するルイ。ゴン！と生々しい重低音が響いた。聞いている準の頭まで痛くなる。

「ルイ、とりあえず落ち着こうか。今ここで怪我でもしたら買い物どころじゃなくなるぞ」

「これが落ち着いていられますか！ それに私なら平気ですよ。ほら、このとおり」

前髪をかき上げ、得意そうに鼻を鳴らすルイ。

あれだけ盛大な衝撃音を立てておきながら、その額には傷どころ

かアザひとつ作っていない。とんでもない石頭だ。

「……むしろテーブルの心配した方が良さそうだな」
「準さん、さりげなくひどいです」

第三章 セーラー服と守り神 #4

暗闇の中、準は膝を抱えて座り込んでいた。

（何だつてこんな所に押し込められなきゃならないんだ！）

学校帰り、未波・二三香と共に寄った喫茶店でルイを呼び出し、さつそく明日服を買いに行くと言えた直後。

「もしよかったら、制服だけでもどんなのか見てみたいです」

ルイが突拍子もなく、そんなことを言い出した。

制服とは、昼休みに話し合ったように未波の中学時代の制服だ。

この申し出に未波が食いつかないはずがない。

「お？　じゃあさつそく試着してみる？」

案の定、ノリノリで快諾されてしまった。「急に押し掛けても迷惑だから」と遠慮する間もなく。

さらには、二三香まで「そうと決まれば、善は急げよ」などと、ドヤ顔でルイを焚き付ける始末。

先ほど決めた段取りの第一段階が早くも前倒しされようとしていた。かと言って、未波の都合さえ問題なければ、特に反対する理由もない。

結局、3人に引つ張られるような形で未波の家を訪問する運びとなってしまった。

未波は準たちを部屋に通すとクローゼットの扉を開け、ハンガーに掛けられたセーラー服を取り出した。

「それじゃ準ちゃんはこっちな」

「？」

準は思わず耳を疑った。

なぜなら、未波の手が指し示す先は――

（クローゼットの中……だと？）

これからルイが着替えようとしている。それが済むのをクローゼットの中で待てと言っのだろう。

中は上下二段構造になっていた。仕切り板を挟んで、上段にはハンガーに掛けられた服がずらりと並んでいる。下段は夏物でもしまっているであろう衣装ケースと、大手家電メーカーのロゴ入り段ボールがいくつか鎮座しており、膝を抱えてぎりぎり入れるくらいのスペースしかない。

ふと視線を感じ、準はそちらを向いた。

視線の主――未波のセーラー服を抱えたルイと目が合う。ぺこり。

唐突に、ルイは懇願するような目で頭を下げた。

「ごめんなさい。さすがにちょっと恥ずかしいので、着替えてる間だけあの中に入れてもらえませんか？」

実際に口に出して言われたわけではない。しかし、ルイの目は明らかにそう語っている。

もはや異論も疑問も差し挟める余地は残されていなかった。かくして、悟りとも諦めともつかぬ境地に達した準は、肅々と暗闇へその身を投じたのである。

そして――。

「よし、サイズはぴったりだね！」

「学校の制服って、着てるだけで何だか心が引き締まりますね。胸が高鳴ってきます」

「最初のうちだけよ。そのうち慣れてくるわ」

「やはり、キミも感じるかね？ 青春の鼓動ってやつを！」

「はいっ！」

「いつからこの部屋は新興宗教の道場になったのかしら？」

理解に苦しむ会話がクローゼットの外から聞こえてきた。

（あいつら何やってんだよ！）

未波を起点に脈絡不明の会話が始まるのは、今や規定路線となりつつある。それ自体に異論を唱える気はない。

しかし、ここは狭い（単に空きスペースに余裕がないだけだが）クローゼットの中。いかんせん体勢に無理がある。

膝を抱えて背中を丸めれば肺や腹部を強く圧迫することになるわけ、正直言つて息苦しい。

とはいえ、スライド式の扉の向こうではルイが着替えの真っ最中。いくら息苦しくても乱れた呼吸音を発するわけには行かない。何やら取り返しのつかない誤解を招き、社会的な意味で死亡フラグを立ててしまう可能性大だ。

（さっさと着替えてくれ……）

限界が刻一刻と近づいていた。

1度でいい。氣道を確保して新鮮な空気を吸い込まなければ。意を決し、膝に密着させていた顎を離す。

と、その瞬間。

「着替え終わったよん」

ガラガラと扉が開かれ、未波が顔を出した。

間一髪セーフ！

開いた扉から外に向かって手足を伸ばし、深呼吸を2〜3度繰り返す。

そして、冬眠から覚めた蛇のようにクローゼットから這い出し――

「あ……」

準は驚きの声と共に、視線を奪われた。

セーラー服を身にまとったルイが、はにかんだ笑顔を浮かべて目の前に立っていた。

ほんの3日間とはいえ、ブルマ姿がルイのイメージとして定着しつつあっただけに、それは一際新鮮な輝きを放って準の目に映る。サイズもぴったりで違和感がない。

立ち上がるのも忘れて、準は嘆息した。

「すごいな……」

「それは制服に対しての感想？ ルイにゃんに対しての感想？」

「そりゃもちろんルイに対してだよ。ってか未波、足を開いたまま俺の目の前でしゃがむんじゃない」

光の速さで体を起こし、未波に抗議する。瞬時に視線を逸らした

ものの、白と水色のストライプはすっかり目に入ってしまった。

「ふえっ！？ み、見えた？」

「見えな——って、おい！」

見えなかったから安心しろよ。

そう言いかけた瞬間。

焦って重心がずれたのか、体が後ろに傾いたかと思うと、未波は派手に尻餅をついた。再び、しかもさっきより露わになるストライプ。

「いったあゝい！」

もはや誤魔化しようがなくなってしまった。せつかくの嘘も台無しである。

「大丈夫かー？」

「何やってんのよ。床抜けても知らないわよ」

半分投げやりな準の問いかけに、二三番の冷たい声が重なる。

「それはさておき、よく似合っててびっくりしたでしょ？」

「ああ。まさか、ここまで似合うとは思ってなかった。これで学生鞆でも持つてれば普通の中学生と変わらないな。ルイ、着心地はどうだ？」

「すつつつごくいいです！ 初めてなのでちよつと緊張してますけど、ずっと前から憧れだったんですよ」

「そっか、よかったな。これで明日は堂々と外を歩ける」

「そうと決まったら、時間どうしようか？ じっくり見て回るなら、混まないうちに……できれば開店と同時に突入しちゃった方がいいと思うんだけど」

「店が開くのは何時だっけ？」

「だいたい9時開店だから、その5分くらい前に秋津駅に集まればいいんじゃないかしら」

「分かった。俺とルイもその頃に行くよ。何かあったら携帯に連絡する」

「うん、よろしくね」

制服の試着を終え、明日の段取りも決まった。あとは言い出しつ
pegが寝坊しなければ万事OKだ。

「未波、制服ありがとう。本当に助かったよ」

「どういたしまして。そのままお払い箱になるよりも、誰かに着て
もらった方が制服も喜ぶしさ。それに、これで制服プレイへのフラ
グが立ったと思うと、むしろこっちがお礼言いたいくらいだよ」

「お断りします！」

——未波、撃沈。

あまりのあっけなさに、準も開いた口が塞がらない。

「ルイも見かけによらず容赦ないな。何も笑顔でフラグへし折るこ
とないだろ」

「準さん、それは違いますよ。自分の何らかのアクションに対し、
相手が少しでも受け入れるような拳動を示して初めて『フラグ』と
呼べるんです。未波さんのそれは単なる世迷い言です！」

「そ、そんなあ……」

ついに未波はぺたんと座り込み、涙とエクトプラズムを垂れ流し
ながら放心状態になってしまった。これはしばらく立ち直れないだ
ろう。準は心の中で合掌する。

「え、えーつと……それじゃ私、そろそろ帰ろうかしら」

何ともわざとらしいタイミングで話を切り出す二三香。

「お、おい！ 1人だけ逃げようったってそうは行かないぞ。俺た
ちも晩飯の支度しないとな」

「あら偶然ね。それじゃ駅まで送ってあげるわ」

「よろしく頼む。あ、ところでルイ、さっきまで着てた体操服一式
はどうしたんだ？ ここに置き忘れると未波が何をしでかすか分か
らないぞ」

「ご安心を。ちゃんと中に着てますから」

「ならいいけど……って、ちょっと待てよ？」

——中に、着てる？ それは、つまり……

「まさか、制服は単に重ね着したただけなのか？」

「はい。それが何か？」

今度は準が生ける屍と化す番となった。支柱を爆破されたビルのようにへなへなと崩れ落ち、そして叫ぶ。

「俺、クローゼットに押し込まれた意味ねーじゃん！」

第四章 監視員、現る #1

喫茶店、そして未波の家。

学校帰りに2ヶ所も寄り道したにも関わらず、太陽は完全に沈みきっていなかった。

考えてみれば、それぞれの滞在時間が30分前後、しかも移動時間は二三香の能力で0に抑えているので、学校を出てから1時間くらいしか経っていない計算になる。

それでも正確な時間を一旦把握しておこうと、準はポケットから携帯を取り出してディスプレイを開いた。

5時40分。帰宅するにはまだ早い。

食材を買い揃えて食事の支度に取りかかるという選択肢もある。

しかし、渡瀬家の夕食は基本的に7時から7時半の間にスタートするという伝統があった。1人になった今、律儀にそれを守り続ける必要がないことは準も承知している。長らく親しんできた生活のリズムに手を加えるのが単に面倒なだけだった。

「さて……」

改めて秋津駅前商店街を見回す。いつもどおりの風景だ。たった1ヶ所——と言うより、当事者たる準にしか分からない唯一の例外を除いて。

準はその例外——隣にぴったりと付き従うセーラー服の少女・ルイに話しかける。

「今日は何だか疲れたな」

「すみません。色々私のわがままに付き合わせてしまっ……」

「ごめん、言葉が悪かったな。別にルイを責めてるわけじゃないんだ。内心はしゃぎすぎて、それが態度に出ないように必死に抑えて……。普通のバカ騒ぎの倍疲れたような感じだよ」

最初から最後まで文字どおりハイテンションだったわけではない。しかし、ほんの数時間の間に精神状態がここまで激しく、なおかつ

繰り返し上下したのは、準自身が思い当たる限り今日が初めてだった。

「ふふ、見かけによらず感受性豊かなんですね」

「これ以上俺をからかっても何も出ないぞ」

「そんなんじや駄目ですよ、まだ若いのに。そうだ、亜鉛とたんぱく質を多めに摂取しましょう！ きつと昔のように、本能の赴くまま出しまくれるようになりますよ」

「ルイ…… また何かロクでもないこと考えてるだろ」

亜鉛やたんぱく質で出が良くなるのは別の何かだ。あの手のサプリメントをコンビ二で買い漁るほど枯れちゃいないはずだし、量さえ多ければいいというものでもないだろう。その証拠に、日本の少子高齢化は年々進む一方ではないか。

「冗談はさておき、これからどうする？ 部屋に戻っても特にやることないし。どこか行ってみたい所があれば付き合うぞ」

「本当ですかっ？」

常人離れた握力で準の肩を鷲掴みにするルイ。その目は爛々と輝き、心なしか血走っている。

「どこでもいいんですね？」

「あ、ああ……」

無駄に鬼気迫る表情に圧され、ロボットのようにかくかくと首を縦に振る。

（いや、ちょっと待てよ？）

どこでもいいのか、とルイは念押しするように聞いてきた。別にルイは耳が遠いわけではない……はずだ。

では、どういう時に改めて聞き返したりするのか。

穿った見方をすれば、常識的に考えて無理難題とされる要望を通すチャンスを得た時、相手の意志を再確認するために使うことが多い。初めに言質を取っておけば、そうやすやすと拒否権を発動される心配もない。となると――

準はおそろおそろ顔を上げ、ルイを盗み見る。

彼女は顔をほんのり上気させながら、ぶつぶつと何か呟いていた。
……とてつもなくイヤな予感がした。準はなけなしの勇気を振り絞って耳を澄ます。

「……準さんと憧れの制服デート……女は黙ってホテルにゴー、そしてベッドイン……まだ夜には早いし、見た目も18歳未満だけど、私は合法ロリだから大丈夫だ問題ない……問題ない………うへへへへへへへへ」

想像を絶するルイの変態妄想に、準は本気で引いた。同時に、たった今振り絞ったばかりの勇気が後悔へと姿を変える。

ルイの瞳は噴出したアドレナリンが欲望の渦を巻き、焦点と正気と理性をいつぱんに失っていた。

しかも、あるうことか呟きの途中から涎を垂らし始める始末。その涎には、どれほどの煩惱が溶け込んでいるのだろうか。ふとそんなことを考えてしまう自分にもドン引きだ。

ともあれ、これ以上放置しておくのは得策ではない。

肩を揺すってみようと、小刻みに震える手を伸ばす。

「らっ、らめええええええええっつっ!!」

「ふおっ!？」

ルイの突然の絶叫に、準は驚いて手を引いた。ついでに間抜けな声が漏れる。

そして、準は感じた。

自分に向けられる、いくつもの冷たい視線。

無理もない。手を伸ばしたまま固まっている準、その手の先で頬を紅潮させながら絶叫するセーラー服の少女。どこからどう見ても痴漢の現行犯だ。

その瞬間、準の恐怖中枢に繋がる何かがプツリと切れた。

「ルイ、行くぞ!」

「えっ? あ、ちよつと!」

強引にルイの手首を掴んで走り出す。傍から見れば、もはや痴漢を通り越して誘拐犯レベルの所行だ。しかし、あのようなシチュエ

ーションを1度作り出してしまった以上、その場に留まったところで事態は悪化こそすれ好転するとは思えない。

「話は後だ！」

ひたすら前だけを見て怒鳴る準。ルイも負けじと叫ぶ。

「何だかよく分かりませんが、私は準さんについて行きます！」

隣の芝生は青い、とはよく言ったもので、二三香の瞬間移動能力が死ぬほど羨ましく思えてくる準だった。

第四章 監視員、現る #2

「すみません。ご迷惑をおかけして……」

駅前での一部始終を準から聞かされたルイは、真っ赤だった顔を今度は真っ青にして俯いた。

準としては一時的にルイを格納してしまう手もあったのだが、それを思い付いたのは苦肉の策で選んだ避難場所——学園に着いてからだった。

「追っ手が来ないから大丈夫だとは思っけど……。それにしても、いったい何を考えてたんだ？」

「そ、それは……乙女の秘密ですっ！」

「答えたくないなら無理に答えなくてもいい。とりあえず、さっき呟いてた内容を聞く限り、口クでもないことを想像してるのだけは理解できた」

「……今……何と……？」

「ばっちり聞かせてもらったと言っるとるんだ！ あれだけ18禁スレスレなことを想像しといて『乙女の秘密』が聞いて呆れるよ。ルイはあれか？ 20歳を過ぎても自分のことを『。。。系女子』とか平気で言っちゃうタイプか？」

「しっ、失礼な！ そこまで厚顔無恥じゃありませんよ」

「いずれにせよ、人通りの多い駅前であんなことを呟いてたら、少なくとも職務質問は確実だぞ。身分証明書の提示とか求められたらどうするつもりだ？」

「むー……………」

「まあ反省してるなら、俺もこれ以上うるさいことは言わないよ。それで、行きたい場所は決まったのか？ あ、駅前は駄目だぞ。さっきのほとぼりが冷めてるかどうか、まだ分らないからな」

「そうですねー……。2人とも制服ですし、せつかなので校内を少し歩きますか？」

制服と言ってもルイが身に付けているのは他校の、しかも中学校のものではないか。準は反射的にツツコもうとして「待てよ?」と思いとどまった。

まだ灯りが漏れている体育館と職員室、そしてグラウンドの時計台へと視線を移す。

あと数分で6時になるうとしていた。

幸い部室棟は全室照明が落ちているし、美術室や音楽室などの特殊教室が集まっている区画も真っ暗だ。『人目を避けながら』という条件付きになるが、これなら2人で歩いていても誰かに見つからずに済むかも知れない。

「そうするか」

準はふたつ返事で告げる。

「やった! 第1段階クリア!」

「第1段階?」

唐突に飛び出した意図不明の単語に、準は眉を顰めた。

「制服デートです!」

言うが早いか、ルイは準の右腕にしがみつく。

制服デート。

準にとっても、中学時代から密かに憧れていたイベントのひとつだ。

微妙に幼い雰囲気が残る少女が相手とはいえ、それが予期せず叶おうとしている。少々照れくさいが、嬉しくないと言えばこれ以上の嘘はない。箇条書きのように個々に切り離して考えれば、ゴールまでの最短ルートが突然目の前に現れたようなものだ。

しかし、素直に喜ぶにはまだ早い。

その直前にルイから発せられた『第1段階』という言葉が、どうにも引つかかる。まるで、制服デートは通過点に過ぎず、さらに第2第3の目標があるとも言わんばかりではないか。

準は湧き上がるイヤな予感を抑えながらルイに尋ねる。

「えーっと……第1段階ってことは、第2段階以降もあると考えて

いいのかな？」

「大当たりです。ちなみに第2段階ではホテルで一夜を共にして、第3段階では準さんのご両親——にんじんばりばりぱらだいすっ！？」

両親という単語が出た瞬間、準はルイの手首を取って軽く捻った。たまらず話の途中で絶叫するルイ。

「お仕置が必要みたいだな？」

「い、痛いっ！ 準さん、痛いです！ 裂けちゃいますううう！！」
隙あらば下ネタ・エロネタを差し挟んでくる徹底ぶりには、怒りを通り越して微笑ましさをすら感じる。

が、このような言動を家族の前でされてはたまったものではない。両者の間に立つ準が気まずい思いをすることになるし、まして半同棲状態であることを口外するなど言語道断だ。

ここは心を鬼にして、ルイにも分かってもらう必要がある。

「俺は別にエロ禁止とか野暮なことを言うつもりはない。口に出すことも、この際だから目を瞑ろう。でもそれは俺とルイの間で完結する場合に限った話だ。万が一ルイの存在が親に知れたら、俺はここにいらなくなるかも知れない。それだけはくれぐれも忘れないでくれよ？」

「分かりました、分かりましたからっ！ 手を放してください！」

涙目で懇願するルイ。

準とて今回ばかりは自分の主張を譲歩する気はさらさらない。が、やはり女の子（しかも年下）を傷めつけるのは良心が痛んだ。

「分かればよし」

精一杯の威厳を装って手を放す。と、次の瞬間。

準は脇腹に強い衝撃を感じた。

ルイの手元から日没間近の空、そして地面へと流れるように、しかし猛烈なスピードを伴って視界がシフトする。

そして再び強い衝撃が襲った。しかも今度は脇腹ではなく体全体に。

時間にしてコンマ数秒ほどの出来事だが――遅れて機能し始めた痛覚が、何者かに強い力で吹っ飛ばされ、地面に叩き付けられたことを教えてくれた。

「女性を一方的に痛めつけるとは感心できないな」

聞き覚えのない声が耳朵を打つ。しかし、その言葉は明らかに準に向けて発せられたものと分かった。

「あなたこそ、いきなり何するんですか！」

ルイの戸惑いと怒気の籠もった声が続いて耳に入ってきた。

「何なんだ、いったい……？」

体を起こし、準はようやく立ち上がる。体全体が軋むような悲鳴を上げ、痛みを訴えかけてくる。

顔に付いた土を払いのけて目を開けると、秋津学園の制服を着た見知らぬ男女2人組の姿が視界に映った。

さっきのキザったらしい台詞から察するに、自分を吹っ飛ばしたのは男の方だろう。そう目星を付け、準は両方を睨みながらも一応の弁解を試みる。

「それは誤解だ！ 今のはこいつが……」

「理由はどうあれ、君はその女性に暴力行為を働いた。違つかね？」

「それは……」

準は思わず言いよどむ。

と、そこに。

「私を助けようというお心遣いには感謝します。しかし、無実の人を不意打ちした上に弁解も完全無視とは、少々乱暴が過ぎると思いませんか？ 謝ってください」

ルイの淡々とした口調が重なった。

準を傷つけられたことに対する怒りが心の奥底で煮えたぎっているのだろう、声のトーンも自然と低くなる。

「謝る？ あなたに、何を……？」

男はわざとらしく首をかしげ、ルイに尋ねる。

「私にはありません。この方に謝れと言っているんです」
さらに低い声で告げる。

しかし、男は挑戦的な姿勢を崩さない。

「これはまた面白いご冗談を」

涼しい顔で肩をすくめる態度に、準の怒りは一気に頂点へと近づいた。

第四章 監視員、現る #3

「いったい何のつもりなんだ、あんたは。ナンパだったら他を当たれよ」

漫画によくあるパターンだ。冴えない男と歩いている女を見つめるや否や、あらぬ因縁を吹っかけ力づくで奪い取る。

キザっぽい言動でキメているが『女』腕力面で勝る男に惹かれるもの』と信じて疑わない、いわゆる猪突猛進タイプなのだろう。

少なくとも、部外者を校内に連れ込んだことを咎めに来た生徒会や風紀委員の類でないことは分かった。

しかし、一緒にいる女が存在が妙に引つかる。

表面上とはいえ紳士的な態度を崩さない人間が、同行している女の前で——たとえ恋仲ではないにせよ、何の臆面もなくナンパなどに走ったりするだろうか？

それに、これだけの騒ぎを目の当たりにしながら身じろぎひとつしない女の方も不気味だ。やや赤みがかったツインテールを風に預け、事態を見守るでもなく無表情のまま黙り込んでいる。

とにかくまともな連中ではなさそうだ、と準は直感的に思った。

「ルイ、もういい。お前らも俺たちに絡んだところで何の得にもならんぞ？」

スルーしておくのが得策と判断し、準はルイの手を引く。

それでなくても、ずっと1ヶ所に留まっていたは、さらに他の誰かに見つかってしまうおそれがある。

自分のプライドのために1発殴り返してやりたい衝動にも駆られたが、準はぐつとこらえた。いたずらに暴力沙汰に発展させて停学を食らうようなことになつては本末転倒だ。

「言うに事欠いて『俺たち』と来たか」

ため息混じりにキザ男は目を閉じる。

「一介の学生風情が守り神様と同列を名乗るとは片腹痛い」

「!!」

準は耳は疑った。

このキザ男は今、たしかに『守り神』という単語を口にした。

(こいつ……ルイの正体を知ってるのか?)

背中に冷たい汗が滲む。しかし、ここで動揺しては向こうの思うツボだ。

次を取るべき行動のヒントを見出すべく、準はそつとルイの顔を盗み見る。彼女もまた驚愕に目を見開いたまま固まっていたが、何か思い直したように口を開いた。

「私は『マモリガミ』なんて変な名前ではありません。失礼ですが、人違いでは?」

いいぞ、と準は心の中で拍手を送った。適当に誤魔化して逃げ切れるのなら、それに越したことはない。

男の返答を待つ準とルイ。

と、今までギャラリーに徹していた女が、男の耳元で何やら話し始めた。

こいつらが話し込んでいるうちに今度こそルイを格納してしまおうか。そんな考えが頭をよぎる。

しかし、それでは準やルイが『普通の人間ではないこと』を大々的にアピールすることになってしまう。言い逃れはますます難しくなるだろう。

「いったいどうなってるんだ……」

「分かりません。ただ、ひとつだけ確実に言えるのは、向こうは私の正体を完全に見抜いている、ということですよ。もっとも彼らが何者なのか、私には皆目見当も付きませんが」

「今のうちに逃げるか」

「おそらく無駄でしょう。あの男ですが、さつき準さんを横から吹っ飛ばした時、3メートル以上離れた場所にいました」

「え? 俺は殴られたんじゃないのか!？」

とりたてて格闘技に詳しいわけではないが、あの脇腹を抉られる

ような感触は間違いなくボディブローのそれだった。しかも、痩せ型とはいえ50キロを超える準の体を石ころ同然に弾き飛ばしたのだ。手足を使った打撃でないとすれば、いったい何だったと言うのか。

「直接手を触れることなく対象物を吹っ飛ばしたり、場合によっては破壊する……おそらく気功波か何かの使い手と見て間違いありません。向こうの射程距離にもよりますが、気功波同士で相殺できるような超人でもない限り、完璧に防ぐのは不可能でしょうね。単に避けるだけでも、物理的に実行可能なのは二三番さんくらいです」

「そんな……」

ルイの話を聞く限り、キザ男の打ち出す気功波は移動速度も桁違いスピードを持っているに違いない。

気功波の軌道やキザ男の動きを目視しながら、適切な瞬間移動先を探す。体力と集中力の切れ目が勝負の分かれ目と言ってもいい、あまりにも分の悪い勝負だ。

と、ようやく話が終わったのか、男がこちらを見て優雅に一礼した。

「おつと失礼、自己紹介がまだだったね。私は半藤^{はんとう}達^{たつ}尚^{しやう}。2年1組に籍を置き、史跡研究会の会長を務めている者だ。こちらは……」

キザ男——半藤（自称）が女にも自己紹介するよう促す。

「神沢^{かんざわ}アサミ。同じく史跡研究会所属……予定。あと、あまり関係ないけど1年10組の学級委員長。以上」

無駄に大仰な半藤とは対照的に、こちらはあまりにも淡々としていた。事務的を通り越して、機械的ですからある。

しかし、今さら自分たちの身元を明かしたところで何をしようと言っただろう。そんな準の疑念を代弁するように、ルイが毅然と言い放つ。

「半藤さん、と言いましたね。それがどうしたと言うのです？ 予め言っておきますが、情報は等価交換などと御託を並べられても応じられませんからね」

「やれやれ。あくまでもシラを切るおつもりですか……。いいですよ」

半藤はそう言うと、ポケットから定期入れを取り出し、二つ折りの内側をルイに突きつけた。

中には古びた和紙が1枚。定期やカードと言うよりは、古くからの民家や旅館によくあるお札のような風体だ。敢えて違いを挙げるとしたら、この和紙は何も書かれていないただの紙切れだった。

「この野郎、いい加減に……っ!？」

突如、定期入れの中で紙切れが赤く発光を始めた。思わず言葉が途切れる。

裏に小型LEDでも仕込んであるのだろうか？　しかし、その推測は見当外れもいいところだった。

光はどんどん強さを増し、やがて謎の模様が現れた。地図記号と象形文字を掛け合わせたような、強いて言えば大名や武家の家紋に近い。

と、今まで強硬な姿勢を貫いていたルイが、その模様を目にした途端、小刻みに震え始めた。

半藤はその様子を見て満足そうに頷く。

「ようやくお分かりになれましたか？　たしかに半藤と聞いただけでは分からなくて当然です。私の説明不足でした。しかし、武者むしゃ小路俊山のうじゅんざんのひ孫と言えは分かっていただけはずだ」

「武者小路……俊山……」

「ルイ、知ってるのか？」

「……はい。私を祀っていた社の神主です」

「何だっ!?」

準は思わず目を見開いた。

今、半藤はたしかに武者小路俊山のひ孫だと名乗った。それはつまり、神社が焼失することなく残っていれば次期神主となっていたかも知れない、ということになる。

噂をすれば何とやらで片付けるには、あまりにも不気味すぎる巡

り合わせだ。

と、ルイが半藤に向き直った。

「戦災で死んだものと思っていきましたが、どうやら私の思い過ごしだったようですな」

「私の曾祖父——俊山は5年前に他界しました」

「それで、60年以上も梨の礫だった武者小路家の者が何の用です？ もっとも、初対面のあなたに聞くのもお門違いというものでしょうが」

「今すぐ武者小路家にお戻りください……などとは申しません。ただ、ひとつだけお聞かせ願えませんか？ なぜそのような俗世にまみれたお姿で、しかも下賤な常人風情と戯れておいでなのですか？」
「俊山に聞けと言いたいところですが、鬼籍に入った今となってはそれも叶わないですね」

あきらめとも達観ともつかぬ、どこか生気を失った声でルイは答える。

「分かりました、特別に教えましょう。私を祀った社が空襲で焼失しているのは知ってますね？」

「はい。幼少の頃に俊山から聞いております」

「話が早そうで何よりです。私は社が焼失する際に憑依していた場所——鳥居に封印されたまま、自力で外に出られなくなりました。再び自由の身となる方法はふたつ。ひとつは鳥居だけでも再建されること。もうひとつは参拝者——と言うと語弊がありますが、その願いに憑依する形で外に出ること。私は社の再建を60年以上、ほんの数日前まで待ち続けました。しかし、ついに再建されることはなかった」

「では、参拝者の……その男の願いに憑依して顕現された」と

「端的に言えばそういうことになります。この姿になったのも顕現した時です。プライベートに関わることなので詳細は伏せますが」

「だからと言って、なぜよりによってそのような低俗な格好を……。おおかた、この男が不埒な妄想をしていたからなのでしょう！」

「念のため言っておきますが、私は結構気に入ってますよ、この制服。社の再建をこれ以上待ち続けるより、この方と一緒に過ごす方を私は選んだ。ただそれだけのことです」

戸惑いを隠せない様子の半藤に対し、ルイはこともなげに言い放った。

「一緒に暮らす？ まさか、この男とひとつ屋根の下に……それだけはいけません！」

「なぜです？」

「守り神様の今のお姿を見れば猿でも分かることです。無礼を承知で申し上げれば、今の守り神様は、その男の薄汚い欲望や性癖を具現化して歩いているようなもの。守り神様が変態の毒牙にかからんとしているのを黙って見過ごすわけには行きません！」

（おいおいおい。そりゃないよ）

実際はルイがセクハラまがいの言動で準を振り回しているのだが――準は反論せず耐えることにした。言ったところで半藤は聞く耳を持たないだろうし、まして自分が崇め奉る守り神様を侮辱されたとあっては、逆上してさらに凶悪な攻撃を仕掛けてくるおそれもある。

無論、準としては侮辱する意図など欠片もない。だが、相手は言葉より先に手が出るならまだしも、気功波が出てしまうような特異体質の持ち主（？）だ。言語を交えてのまともなコミュニケーションは、予め絶望視しておく方が賢明だと言わざるを得ない。

そんな準の思いをよそに、ルイの言いたい放題はさらに続く。

第四章 監視員、現る #4

「それなら余計なお世話というものです。だいたい、そのような紙切れで人の居所を嗅ぎ回るストーカーに、この方を変態呼ばわりする資格はありません！」

準自ら反論するまでもなく、ルイが一刀両断してしまった。身の潔白を証明するには至らなかったが、こんな歴史オタクもどきにとっと思われようと痛くも痒くもない。

それよりも、準としては赤く発光した紙切れの正体の方が気になる。

「ところで、あの古びた和紙みたいなのは何なんだ？」

小声でルイに尋ねる。

「あれは武者小路家の初代神主が作った守り神センサーみたいなものです。元々は鳥居に貼られていた札のようですが、俊山がいつの間にか持ち去っていたみたいですな」

どんな因果関係で紙切れが半藤の手に渡ったのかまでは、さすがのルイでも分からないらしい。

ただ『センサーみたいなもの』と言うからには、ある程度の距離まで近付くと反応する仕組みのようだ。GPSのように居所を特定するタイプではないので、継続的に追い回される心配はおそらくないと思われる。

しかし、厄介な代物であることに変わりはない。

準は学園から数百メートルと離れていない超至近距離に住んでいる。センサーの有効範囲次第では、見つかる確率は自ずと高くなるだろう。格納することでルイの存在を物理的に消すという自衛手段もあるが、それで紙切れが反応しなくなる保証はどこにもない。

自分の部屋に半藤が踏み込んでくる様子を想像して、準は青くなつた。

（学園の中で出くわす分には、まだ対処のしようもあるんだけどな

……)

と、先ほど神沢アサミと名乗ったツインテールが、半藤にまた何やら耳打ちを始めた。

無駄だと知りつつ、とりあえず準は耳を澄ましてみる。――やはり何も聞き取れない。普通の話し声からして小さかったので、ある意味当然と言えば当然だった。

あのようなしゃべり方で学級委員長が務まるのだろうか？ 他人事ながら心配になってくる。もっとも、自分だって偉そうなことを言える立場ではないのだが。

「――何だって!？」

半藤が急に顔色を変えて叫んだ。そして、猛然と後ろを振り返る。いったい何があったと言うのだろうか？

「場所を変えましょう。このままここにおいては先生たちに見つかってしまふ」

半藤が忌々しげに告げた。

準とルイもあわてて同じ方向に視線を移す。数学教師の小村こむらと化学教師の乃木のぎが揃ってこちらに向かってきていた。が、2人とも話に夢中なのか、まだこちらには気付いていないようだ。

「こっちへ」

ツインテールが半藤の手を引いて走り出す。

「あ、ああ……。守り神様も我々の後についてきてください！ この凡人も遅れを取らないよう気を付けてくれたまえ！」

後ろを向いて叫ぶ半藤。

「私たちも行きましょう！」

ルイも準の手を取って駆け出す。

「へいへい。分かりましたよ」

「とりあえず今は機嫌直してください。彼の無礼は後で必ず償わせますから……。ね？」

「そうだな。……。頼むから、ぐずってる子供を宥める母親みたいな目で見ないでくれ」

色々とな得できないことはあるが、今最も優先すべきことが何であるかくらいは自分なりに心得ているつもりだ。

と、再び半藤が振り向いた。

「何が気に入らないのか知らないが、くれぐれも守り神様に迷惑をかけるようなことだけは慎んでくれたまえ」

「すべての元凶はお前だろうが！ 無駄口叩いてる暇があったら足動かせ！ ちんたら走ってんじゃねえぞ！」

「き、君い！ 先に走り出した私を追い抜くとはどういう了見かね！ 慎みたまえ！！」

「うるせえ！」

無意識に元陸上部の本領を発揮してしまう準だった。

第四章 監視員、現る #5

アサミに先導されて辿り着いたのは、いつぞやの部室棟裏だった。塩崎に半ば引きずられるような形で訪れて以来、ここには足を踏み入れてない。相変わらず鬱蒼としたロケーションだな、と準は思った。

たった2日前のことなのに、入学式のすぐ後というタイムテーブルに則って振り返ると随分と昔のことのように感じられる。かと言って、早くも学園生活に馴染んでしまったわけでは決していないのだが――なまじ一緒にいる時間が長いせいだろう。こと未波たちとは完全に打ち解けつつあった。ルイに関しても同じことが言える。

そのルイは呼吸を整えながら辺りを見回していたが、やがて半藤に向き直ると、嫌味たつぷりに言い放った。

「ここが秘密の隠れ家ですか？ センスの欠片もありませんね」
が、半藤は動じない。

「身を隠すには打ってつけの場所です」

特に悪びれた様子もなく淡々と答える。

しかし、ルイの嫌味は執拗に続いた。

「そして俊山にとっては、私を60年以上も封印したまま放置しておくのに打ってつけの場所だった……。理由こそ違いますが、血は争えないみたいです」

「その件につきましては、俊山に代わってお詫び申し上げます」

「今さらそんな神妙な顔をしなくても結構です。それより、俊山の子や孫――あなたの両親や祖父母は何をしているんです？ この件、ひ孫のあなたが単独で動いているとも思えません」

俊山亡き後の武者小路一族の内情を探るかのように、ルイはなおも挑戦的な視線を向ける。

しかし、半藤はゆつくりと首を横に振った。

「これは私の単独行動です」

そして、視線を神沢アサミ——1年10組のクラス委員長を務める少女に移し、

「もっとも、こちらの神沢君に助手を依頼している時点で、すでに単独行動ではないのかも知れませんが」

「それで、あなたが私を付け回す目的は？ その札を持ち歩いているところを見る限り、かなり前から私に目を付けていたようですが」
「この札を私が見つけたのは5年前、祖母の命で俊山の遺品整理に駆り出された時のことです。彼には子供が3人いましたが、その全員が女だったのに加え養子を迎えることもしなかったため、すでに武者小路の家系は途絶えていました」

「俊山の兄弟はどうしたんです？ たしか俊山のすぐ下に妹が1人、さらに弟が2人いたはずですが」

「弟2人は社が焼けた数日後に出征先で戦死。妹も今から10年ほど前に他界していたそうで、最後は俊山だけになっていました。そこで、俊山の長女である私の祖母が最期を看取り、遺品整理や遺産分与を主導的に行うことになった次第です。もちろん見つけたのは札だけではありません。社の見取り図や歴代神主が遺した文書、当時の小銭や切手なども出てきました。そして、その中には守り神様に関する記述や札の効能書きも……」

「なるほど……。だいたい読めてきました。あなたが札の使い方を知っているのも、これで納得が行きます。しかし5年も前となると、あなたはまだ小学生だったはず」

「『どうやって内容を把握したのか』と仰りたいのでしょうか？ 私は幼少の頃から毛筆を習ってましてね、大抵の旧字体なら小4くらいで普通に読みこなしていました。肝心の中身にしても、特別に難しいことが書いてあるわけではない。両親や祖父母に頼らずとも分かりましたよ。今ひとつピンと来ない部分もいくつかありましたが、そこは一緒に見つけた見取り図や写真が参考書代わりになってくれましたし。もっとも、解読できるようになったからと言って部外者が学園の中をうろつくわけにはいきません。実際に札を持ち歩くよ

うになったのは、ここに入学してからですよ」

こちらが聞いてもいないことを、半藤は実に得意そうに語りまくった。学校の授業で習う日本史は準も得意だが、向こうは筋金入りだ。自分で立ち上げたのか先輩から引き継いだのかは分からないが、史跡研究会の会長を務め上げるだけのことはある。

「鳥居に封じ込められてる間、札の反応はどうだったんだろうな？」
ふと小声でルイに尋ねる準。

「凡人にしては、いい所に目を付けたものだな。特別に教えよう」
耳ざとく聞きつけた半藤が大仰に語り始めた。

「もちろん反応はあったよ。この札は守り神様から50メートルくらいの地点で存在を感知する。だから単に見張るだけなら、こんな場所まで来なくても部室棟1階のトイレからで十分事足りた。しかし、一昨日の夕方4時頃だったかな？　いつものように巡回に行ったら、札が反応しなくなっていた。私は真っ先に疑ったよ。守り神様が何らかの形で外に出たのではないか、とね」

つまり、ルイは自分の預かり知らぬ所で1年も監視されていたばかりか、ようやく自由の身になれても実質2日で見つかってしまったことになる。もはや同情するなどというレベルではない。このような事態にあっても毅然とした態度を崩さないルイの健気さに、準は胸が痛んだ。

「ところで話は変わるが」

不意に半藤が準を見据えながら切り出した。

「さつき君を吹っ飛ばした技……あれは守り神様由来の力ではないとだけ言っておこう。独自の流派なんだが、祖父が空手の道場をやっている。そこで鍛えられて身に付いた技なんだ。したがって、間違っても守り神様を逆恨みすることのないように」

「お前に言われるまでもないよ。俺のそばで一部始終を見ていた守り神様とやらも、その力の出所が分からないみたいだったからな」
「そうかね。ならいいが」

ルイという名前で呼ばないよう注意しながら反論する準。半藤も

納得したのか、それ以上は追及してこなかった。心の中で安堵のため息をつく。

しかし、そんな平穩も束の間だった。

「守り神様なんてよそよそしい呼び方しないでくださいよ。せっかくルイって名前付けてくれたのに」

曲がりなりにも神の口から発せられたとは思えないような子供っぽく間延びした声に、準は思わず額に手を当てる。

「……ルイ？ 名前を……付けてくれた……だと？」

途端に眉根を寄せて、ぶつぶつと何かを呟き始める半藤。

まずい。非常にまずい。さすがにこれは説明のしようがない。

悪寒とブレッシャーで全身に鳥肌が立ち始める。

「いかがわしいコスプレをさせただけでなく、変な名前まで付けて……もう一度その体に教えてやらなければならないようだな！」

「ま、待て。早とちりするな！ この名前はルイに頼まれて付けただけで……そうだ、ルイからも何か言ってやってくれよ！」

「守り神様をその名前で呼ぶなど言っている……」

半藤の右手が青白い光を纏い始めた。光は輝きを増し、やがて掌で野球ボールくらいの大きさの球面体になる。

どこからどう見ても気功波だった。

昼間でも薄暗いはずの場所が、まるで業務用ライトで照らされているかのような明るさに包まれる。

「ま、まさか……やめろ！ 落ち着いて話を聞け！」

「……問答無用」

完全に据わった目で準に狙いを定め、ピッチャーの投球フォームのような構えをとる半藤。

しかし、その気功波が準に向けて放たれることはなかった。

光が一瞬で消え、元の薄暗さに戻る。

そして――

どさつ。

半藤が足下から崩れ落ちた。仁王立ちで塞がれていた部分の視界

が急に開ける。

背後から現れたのは、半藤の後頭部に手刀を叩き込んだ姿勢のまま、彫像のように固まっているアサミの姿だった。彼女は半藤が地面に伸びたまま動かないのを確認すると、構えを解いた。

「危なかった……怪我はない？」

無表情のまま唐突に問いかけられ、準はびくつと身を震わせる。

「あ、ありがとう。それより、こいつの方がヤバいんじゃない？」

倒れたままぴくりとも動かない半藤を見下ろしながら、とりあえず礼を言う。

「彼なら大丈夫。ほんの数分で目を覚ますはずだから。退散するなら今のうち」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。君は半藤の仲間……なんだよな？」

勝手に俺たちを逃がしていいのか？」

準は思わず尋ね返す。

しかし、返ってきたアサミの答えは意外なものだった。

「私は史跡研究会への入部希望者として彼についているだけ。守り神などに興味はない」

「どういうことだ？ 半藤と同じ目的で動いてるんじゃないとしたら……？」

「彼が守り神にこだわるのは、史跡研究会を史跡研究部に昇格させることが目的。正式な部として認められれば、部室や活動費が割り当てられる。でも、それには5人以上の部員と一定レベルの成果が必要」

「でも、半藤は神社絡みの古文書を粗方読みこなしてるんだろ？ 成果としてはそれで十分はずだ」

「彼は完璧主義者。守り神が実在すること、札の効能、神社の正確な位置、すべてを実証すると言って聞かない」

「とんだ頑固者だな。それじゃ反発する部員もいるんじゃないのか？」

「正式な部員は彼だけ。『実績を出せば有志はいくらでも集まる』」

と言いつ張って、勧誘活動は一切していない」

「やれやれ」

半藤の人となりについてアサミの話を聞けば聞くほど、半藤自身のプライドの高さだけが浮き彫りになってくる。もはや呆れるしかない。

と、黙って会話を聞いていたルイが口を開いた。

「その計画、おそらく失敗に終わるでしょうね」

「どういうことだ？」

「仮に研究の成果が認められて、部員の頭数も揃ったとします。でも、それまでの研究の題材が題材だけに、単なるオカルトマニアの集まりにならないとも限りません。半藤もそれをよしとはしないでしょう」

「要するに、半藤が扱ってるテーマそのものがプロモーション向きじゃないってことか」

「一言で言うとそのようになります」

「私もそれが心配。研究そのものには協力するけど、それをいたずらにアピールするのは正直言って賛成できない」

「おおかた名声に目が眩んだんでしょね。ところで、余計なことかも知れませんが」

「？」

「あなたが半藤と知り合ったきっかけは？」

「同じ中学で同じ部活に入ってたから」

「となると、やはり歴史関係ですか？」

「テニス部。そもそもうちには文化系の部活がなくて、帰宅部も認められていなかった」

スポーツ方面に特化した私立校だったのだろうか？ もっとも吹奏楽部や美術部ならいざ知らず、中学生の部活に歴史研究のようなマニアックなことをやらせる学校も、ある意味珍しいが。そんなことを考えながら、準も言葉を挟む。

「いずれにしても、本人に無断で事を進めようって考えは感心しな

いな。研究成果をどう発表するにせよ、平たく言えばルイを晒し者にするってことだろ？ 神様相手におこがましいかも知れないけど、保護者的な立場として見逃すわけには行かない」

「私もあなたと同じ考え。だから早くここを離れるべき」

「君はどうするんだ？ こいつのことだ、君が俺たちを逃がしたと知ったら怒り狂うんじゃないのか？」

「私なら心配ない」

「でも……」

「準さん、ここは彼女に……アサミさんに任せましょう」

ルイが腕をつかんで訴えかけてくる。

「守り神の言うとおり」

「ルイと呼んでください。それと、半藤にこう伝えておいてくれませんか？ 『準さんを傷つけて死なせると、私も一緒に消えてしまふ』と」

「どういうこと？」

「今の私は準さんの願い事に基づき、分身として顕現しています。

その宿主——つまりコピー元であるである準さんが死ぬとどうなるか。ここまで言えばお分かりですね？ さっき準さんが受けたダメージですが、現に何割か私にフィードバックしてますし」

そう言いながら、ルイは制服の上着とブラウスを一気にまくり上げた。透き通るように白く、引き締まった脇腹が露わになる。

そこには、まるでルイが半藤の気功波を受けたかのように、うっすらとアザができていた。

「……！！ ルイ、どうして今まで言わなかったんだ！」

準は思わず激昂した。

自分だってアザくらいできているかも知れないし、痛みもまだ残っているが、動き回るのに何ら支障はない。しかし、何事もなかったような顔で「何割か私にフィードバックしてますし」などと言われても、こんな姿を見せられると「実は自分と同じくらいのダメージを受けたのではないか」と勘繰ってしまう。自分で感じる身体的

ダメージに対し、ルイのそれは見るからに重傷だ。

しかし、ルイは準の心配などどこ吹く風で答える。

「私の体は準さんみたいに鍛え抜かれてるわけではありませんからね。たとえば準さんのダメージの30パーセントが私にフィードバックするでしょう。しかし、その計算式は準さんと私の防御力に少しでもズレがあると、誤差が生じて成立しません。仮に私の防御力が準さんの半分なら、体感的なダメージは60パーセント相当にまで跳ね上がる計算になります。自分で受け切れるダメージかどうかくらい、私にだって判断できますよ」

「そういう問題じゃないだろっ！」

「誤解のないように、ひとつだけ言わせてください。この体は外見や性格を除く大部分が準さんを基準に設定されています。それでもダメージは最小限に近いレベルに抑えられてるんですよ？ いずれにしても、このことを話せば効果は絶大なはずです。半藤のように脳味噌が筋肉でできた単細胞生物でも、小学生レベルの計算式くらいは理解できるでしょう」

ルイはそう言いながら、ちらりとアサミに視線を走らせた。

「……分かった。それなら彼も手荒な真似はできなくなると思う」

「くれぐれもお願いします」

ルイにつられるように、準も軽く頭を下げる。表情から何を考えているのか読み取れない不安はあるが、こちらの話を冷静に聞いている人間をむざむざ敵に回すような真似はしたくない。

「それじゃ準さん、行きましようか」

「ああ」

他の生徒や教師たちに見つからずに出るには、どこを通ればいいのだろう。そんなことを考えながら足を踏み出した瞬間。

「待ちたまえ……話は……聞かせてもらったよ……途中からだ
が……」

「！？」

驚いて振り返ると、半藤が地面に手を付いて立ち上がろうとして

いた。薄暗くてよく見えないが、アサミに後頭部を強打されたショックが抜け切っていないのか、まだ少し顔色が悪いようだ。

しかし、途中からとはいえ話を聞かれていたとなると、また厄介なことになる。アサミも同じことを考えたようで、いつでも半藤を昏倒させられるよう再び臨戦態勢に入った。

「守り神様にまでダメージが及んでいるとは知りませんでした。申し訳ありません」

よろよと立ち上がり、深々と頭を下げる半藤。

準は「まず俺に詫びるのが筋だろうが！」と怒鳴りつけてやりたい衝動を必死にこらえた。今それを口に出しては、半藤の怒りに再び火がついてしまう。自分の一挙手一投足がゲームで言う自爆ENDに繋がっていると思うと、何ともやりきれない思いがした。

「彼にも謝るべき」

準の思いを代弁するかのように、アサミが口を開いた。抑揚のない声が薄暗い部屋棟裏に響く。

今までの第三者的な表情とは打って変わって、正面から射抜くような視線が半藤に向けられていた。

「わ、私は……ただ……守り神様が……」

途端に口ごもり始める半藤。

今まで黙々と付き従っただった後輩から厳しい視線と言葉を投げかけられ、明らかに戸惑っているのが分かる。

と、ルイが手招きしているのが目に入った。

「どうした？」

「ちよつとお耳を……。準さん、チャンスですよ！」

「何が？」

「あれだけ強気だった半藤が顔ひとつ上げられないでいます。今こそ言いたいことを言うんですよ！」

「ちよつと待てよ。そんなことして大丈夫なのか？」『窮鼠猫を噛む』じゃないけど、何をしでかすか分からないぞ？」

まして半藤は、平常時でも何食わぬ顔で気功波を使いこなす男だ。

ネズミと同列に扱うには基本戦闘能力が高すぎる。

しかし、ルイは首を縦に振らない。不敵な笑みまで浮かべ、さらに続ける。

「心配いりませんよ。ネズミ捕りを仕掛けますから」

「ネズミ捕り？」

「アサミさん、ちょっと……」

「……何？」

「万が一に備えて、半藤の背後で待機しててください。大丈夫だとは思いますが、逆上して再び準さんに襲いかからないとも限りませんので」

「お安い御用」

ぐつと親指を立てて、アサミは戦闘配置（？）につく。

「さあ、準備OKです」

「いや、しかしなあ……」

「準さんも男でしょう？」

「！」

ルイの一言に、準の心の中で何かが弾け飛んだ。

男のくせに。

男らしく。

男だろう。

男だったら。

男に生まれた以上。

性別だけを理由に個人の勝手なイメージを押しつけるのは心底バカバカしい。

くだらない。

昭和脳ここに極まれり。

しかし、いざ自分が言われると話は別だ。

「……言ってやろうじゃないか」

何も半藤に素手で勝負を挑むわけではない。

思うままを、思うままに、ぶちまけるだけだ。

——ただし、あくまでも紳士的に。

そう自分に言い聞かせながら、準はできるだけ穏やかに半藤に語りかける。

「形だけの謝罪なら、する方にとってもされる方にとっても無駄なだけだと思うぞ？ 自分の助手——神沢さんにはつきりと反論できないのは、自分に非があることを少なからず認めてるからだろ？

あんたにそれだけの良心があると見込んで、ひとつ頼みたいことがある。今後一切、俺やルイに手を出さないで約束してくれ！ 俺もルイに変なことはしないと約束する」

とうとう言ってしまった。

自分の言葉を心の中でもう1度反芻する。

（別に変なことは言わなかったし、大丈夫だよな……？）

半藤はしばらく俯いたまま黙っていたが、やがて静かに口を開くと、

「……分かった。潔く手を引こう」

とだけ言って、再び膝をついた。

（どうだ！ 俺だって言う時は言うんだ）

「してやったり！」と言わんばかりに、自信満々でルイとアサミの方を見やる。

しかし、2人は顔を歪めて苦笑いを浮かべていた。ルイに至っては、両目にうつすらと涙まで滲ませている。

「……あ、あれ？ 俺、何かまずいことでも言ったか？」

準は大いに困惑した。

成り行き上仕方なくとはいえ、一世一代の大演説にも近い台詞を吐いた直後にそのような顔をされて平然としていられるほど大物ではない。

ルイ、アサミ、生ける瓦礫と化した半藤。

準の視線は、その3点を目まぐるしく移動する。そうすることで、

ほんの少しでも事態を把握しようと試みたのだが――

そんな中、最初に口を開いたのはルイだった。

「私という分身のあり方について、近々真剣に話し合う必要がありそうですね」

最後の1球をライトスタンドに叩き込まれたピッチャーばりに熱い涙を流しながら滔々と言葉を継ぐ姿に、準は圧倒される。

しかし、いかんせん言葉の意味が分からない。分からないがゆえの意思表示として、反射的に首をかしげてしまう。

それがルイの言動にさらなる異変をもたらした。

「準さん、あなたは人間が有性生殖であることを忘れすぎです！

どこまで乙女チックなんですか！」

「は？　ますます意味が分からん。有性生殖？　乙女チック？　たしかに俺は乙女座だけど、それがどうしたってんだよ」

暗にバカにされているのではないかという疑念と、ルイの言わんとすることがまったく読めない苛立ちで、準は徐々に頭に血が昇ってくるのを感じた。しかし、ここでキレてしまっただけは何とも大人げないし、自分から半藤に持ちかけた約束を光の速さで反故にすることになる。とりあえず冷静にならなければ。

準は深呼吸をすると、涙目で低い唸り声を上げるルイに再び向き直った。

「話は後でゆっくり聞かせてもらおうよ。それより、俺が何か変なことを言っただのなら、はっきり教えてくれ！」

と、アサミが「耳を貸して」というジェスチャー付きで準に手招きをした。

いったいどうしたのだろう。はっきりと口に出して言いにくいことなのだろうか？

準は言われるままに耳を貸す。

「ヒント。彼は拡大解釈の名人」

「彼って半藤のことか？」

「そう」

それだけ言うと、アサミは「もう話すことはない」とばかりに、準の耳元から顔を離してしまった。

「どうということなんだよ！」

単体では意味を理解できない言い回しをするのが流行っているのだろうか？ 間接的にしか正解に結びつかないからこそそのヒントであることは準にだって分かる。しかし、ルイにしろアサミにしろ彼女たちの口から発せられるのは、言葉や言い回しと言うよりも、ほとんど単語に近い。

準は底意地の悪い大学教授に『タイトルから内容を想像せよ』という問題を出された学生のような暗澹たる気分になった。

第四章 監視員、現る #5（後書き）

ひととおり出来上がってるものをコピーしているので、投稿頻度が駆け足気味になってしまい、申し訳ありません。今後は週1〜2ペースに抑えていく予定です。で、よかったです引き続きお付き合いいただけると幸いです。

第四章 監視員、現る #6

来週の授業の段取りを考えながら、初島史郎はぬるくなった緑茶の入った湯呑みを片手に黄昏れていた。

午後6時。

世間一般のサラリーマンにとっては、いわゆる『残業』と呼ばれる時間帯に突入するタイミングだ。

終わりがある程度見えている状態ならラストスパートに踏み切る頃合いでもあり、まして今日は花の金曜日。自然と浮かれ気分になる。

しかし、である。世の勤め人全員が、そのように気楽な人生を歩めているわけでは決してなく。

初島も会社勤めをしていた頃は、毎日ではないにせよ机に山積みになった原稿の校正と電話対応に追われ、このような風情に浸る余裕など皆無に等しかった。なまじ景気が良かっただけに、特に締切前の水曜・木曜はどうしても基本労働時間より残業時間の方が長くなる。労働基準監督署から営業所に改善命令が入ったことも1度や2度ではない。

それにしても――。

こうして夕焼けを眺めるのは何年ぶりだろうか？

たかが夕焼けごときに懐かしさを覚えるほどロマンチストではないが、サラリーマン時代との決定的な違いに、自然とため息が漏れてしまう。

「お疲れみたいね。まあ何もかも初めて尽くしじゃ無理もないか」

向かいの席で日直の生徒から提出された学級日誌に目を通していた塩崎が、半分独り言のように声をかけてきた。

「……聞こえてたのか」

「ばつちり聞こえたわよ。1年の担任は私たちしか残ってないし、2年と3年の担任は職員会議だし」

「職員会議だつて？」

ゆつくりと椅子から立ち上がり、職員室を見渡す。塩崎の言うとおり、2人の他にはクラスを受け持っていない非常勤講師とカウンセラーがいるだけだった。席が離れている上に、デスクトップPCのディスプレイが防音壁の役割を果たしてくれているせいか、2人とも初島たちの会話に気付いていない様子だ。

「そうよ。2年の先生はゴールデンウィーク明けの修学旅行、3年の先生は進路希望調査と三者面談について話し合ってるみたい」

「修学旅行か……。中学の時はそうでもなかったけど、高校の時は楽しかったな」

「他人事みたいに言ってるけど、私たちも2年のクラスを受け持ったら引率する側になるのよ？それに、1年だつて修学旅行とまでは言わないにしても、夏休みに林間学校があるし」

「そう言えば行事予定表に書いてあったな。うちは4組と合同で8月21日から3泊4日だったつけ。7月中にやればいいものを、どうしてお盆明けにやるんだ？みんな宿題の追い込みで忙しいだろうに、嫌がらせとしか思えんぞ？」

「分かってないなあ、史郎ちゃんは」

塩崎は「やれやれ」とばかりに肩をすくめた。

「8月の、しかも20日過ぎともなると、夏休みに入って丸1ヶ月よ？宿題だつて、できる所はやり尽くして煮詰まっちゃってる時期なの。そんな迷える子羊たちへの救済措置なのに、嫌がらせだなんて心外だわ」

「……本気で言つてるとしたら正気の沙汰じゃないな」

「あつそ。じゃあ週明けにでも教頭に伝えとくわ」

「ちょ、ちよつと待てよ。俺はてつきり奈津の個人的な意見だとばかり……」

「ふふ、冗談よ。私も最初は史郎ちゃんと同じ考えだったわ。でも、これには教頭なりの思惑があったみたいなのよ」

「他にも何か言つてたのか？」

「うん。ちょっと想像してみて？ たとえば夏休みの残りが1週間しかなくて、自由研究だけが手付かずで終わってないとしたら、史郎ちゃんはどうする？」

「そうだな……。高校の頃の俺なら、まず友達に相談してただろうな」

「でしょ？ でも、中には友達がない子だっている。そこで一旦全員を集めて、終わってない課題ごとに振り分けた後、共同作業で進めさせるって寸法よ。これなら自然な成り行きで友達ができるし、体育祭とか合唱コンクールみたいなゴリ押しじゃない方法でチームワークを発揮させる訓練にもなる。一石二鳥だと思わない？」

「なるほど、よく考えたな……。たしかに、高校生にもなって夏休みの宿題に親が介入してくるのも考え物だしな」

子供の独断で手を抜いたり、さぼったりするならマシな方だ。いつだったか「『子供に出す課題が多すぎる！』と学校に怒鳴り込んだ親がいる。しかも、その子供というのが、20歳にもなるうかという大学生だった」という話を聞いて辟易としたのを思い出す。

「でもね、肝心なのはここからなの」

「まだ何かあるのか？」

「実はこれ、教師のちよつとしたウォーミングアップも兼ねてるのよ」

「俺たちも何か手伝われるのか？」

「まさか。私たちはあくまでも引率だけよ」

「それじゃ何がウォーミングアップなんだ？」

何もしないとなると、ただの貧乏旅行だ。もつとも、教師が生徒の宿題を手伝っては本末転倒なのだが、それでは引率以外の目的が見い出せない。

「史郎ちゃんも経験あると思うけど、お盆休みとか年末年始休暇の最終日って何となく憂鬱になるでしょ？ 出てきたら出てきたで、体も心もなまってるから普段よりしんどく感じるし。それを少しでも和らげるために、教師たちも1度学校以外の場所で顔を合わせる

ことで徐々に体を慣らして行こうってわけ」

「杓子定規で頭の固そうなおっさんだと思ってたけど、教頭もなかなかやるな」

「そうでなきゃ、ここまでのマンモス校になんかならないわよ」

言われてみればそうだ。3学年合わせた生徒数は秋津学園だけで1000人を越えているし、教職員も非常勤や図書館司書などを含めると50人くらいになる。

これもひとえに多大なる支持があつてこそものだろう。

「それにしても不思議よね。これだけの人間が毎日動き回ってるのに、あんな人気のない一角ができるなんて」

人気のない一角。

その言葉が具体的にどこを指しているのか、初島は瞬時に理解した。うつすらと忘れかけていた、2日前の記憶が蘇る。

「変なこと思い出させるなよ。雑用で部室棟の前を通るだけでも気が滅入りそうだったのに」

「思い出しついでに言わせてもらうけど、あの場所、学園ができる前は本物の神社があつたそうよ」

「……調べたのか？」

「図書館で地元史を当たれば何か分かるんじゃないかと思ってね。ドンピシャだったわ」

「それにしても、よく見つけたな。結構昔からあつた神社なのか？」

「そう思うでしょ？ でも意外に歴史は浅いのよね。建立されたのは明治3年の暮れ、初代神主の名は武者小路俊蘭^{むしゃのりこうしゅんらん}」

「ご丁寧に神主までいたのか。それなのに荒れ放題になってるのは、やっぱり神主一族の血統が途絶えたから……？」

「その可能性は高いわね。実際、戦時中の空襲で神社が焼けてから神主一族は忽然と姿を消してちゃってるし。この時は武者小路俊山^{むしゃのりこうしゅんざん}って人の代だったらしいんだけど、とうとう再建されずじまいだったそうよ」

「神社もろとも焼け死んだんじゃないのか？ もっとも、そうじゃ

なくて戦後も生き延びてたとしたら罰当たりな話だが」

「その線は薄いわね。こういう話は史郎ちゃんの方が詳しいと思うけど、本土空襲に使われたのは単に家屋を焼き払っただけの焼夷弾でしょ？ このあたり一帯を核ミサイルで吹き飛ばされたとかならまだしも、そう簡単に焼け死んだりすると思う？ 仮に死んだとしても焼死体くらいは見つかるはずよ」

たしかに塩崎の説の方が可能性としては濃厚だと初島は思った。映画やアニメでしか見たことはないが、爆撃機が本土上空に接近すれば大抵の場合、空襲警報が発令される。まして、当時はこの家庭でも防空壕のひとつやふたつは掘っていただろうし、防空演習も3度の飯と同じくらい生活に浸透していたはずだ。そう簡単に逃げ遅れるとは考えにくい。

「……いや、待てよ？ 違う死に方をした可能性も考えられるな」
「どういうこと？」

「空襲で焼け死んだ人はたしかに多かった。しかし、病気や飢えで死んだ人も同じくらいいたと何かで読んだことがあるんだ。仮に防空壕に避難したまま一族全員が死んでしまったとすれば……」

「遺体は地中に埋まって誰にも見つからない……ってこと？」

「ああ。もつとも、今となつては調べようがないけどな」

「学園の敷地を掘り返すわけにも行かないものね」

「そういうことだ。とにかく、これ以上何も起こらなければ」

「それに越したことはない！ でしょ？」

塩崎はイタズラっぽい笑みを浮かべながら、初島の台詞に先回りする。

「……ご名答。俺はこのあたりの出身じゃないから詳しいことは分からんが、不用意に首を突っ込まない方が良さそうな気がする」

「でも、歴史的な興味とか湧いてこない？ 史学科出身として」

「さあな。若い頃ならいざ知らず、今はそんな気力も体力もないよ。だから俺は基本的に手を出さん」

「えー？ そんなのつまんなーい」

「ただでさえ慣れない仕事に四苦八苦してるのに、新しい研究材料なんか抱え込んでられるか！ もっとも、鳥居絡みで何かあれば嫌でも調べることになるだろうけどな。あの場に居合わせてた以上、ある意味5人とも運命共同体なわけだし、俺だって自分だけ知らん顔を決め込むほど薄情者じゃない」

初島はすっかり冷めてしまった緑茶を一気に飲み干すと、再び机に向かった。

第五章 作戦会議は下ネタがいっぱい！ #1

「疲れた……」

さんざん走り回り棒のようになった足を引きずりながら、準は深いため息をついた。

駅前で痴漢疑惑をかけられそうになり、逃げ込んだ先の学園では見ず知らずの歴史オタクに変態疑惑をかけられ、その度に走り回るはめになり、拳句には気功波で豪快に吹っ飛ばされ……それでもなお自力で歩けるのは、もはや奇跡に近い。

しかし、これから新たに何かを始めるような気力が残っているかと問われれば、それはまた別問題だ。

半ば開き直るように、高らかに宣言する。

「決めた！ 今日晩飯作らない！」

「となると、2日連続で外食ですか？」

「そんな無駄なことできるか！ 帰ったらすぐに風呂入って寝るんだよ」

「ちゃんと食べないと体に毒ですよ？ 育ちざかりなのに。それに

……」

ちらりと目だけで後ろを見ながら言葉を区切るルイに、準は問い返す。

「それに？」

「このまま部屋に帰るのは危険です。あの男が……半藤が私たちの後ろをずっと尾けてきてるんです」

「何だつて!？」

「しっ、静かに！ どうやら半藤は気づかれていないいつものようです。私たちも気づいていないふりをしましょう」

「でも、どうすりゃいいんだ？ このまま適当に歩き回ってるだけじゃ、そのうち怪しまれるぞ」

「そうですね……ひとまず駅前の本屋に入って様子を見ましょうか」

「分かった」

そうと決まれば、身を隠す場所はただひとつ、漫画やライトノベルを陳列している棚に限られる。ルイの背丈くらいのラックしかない、通路も立ち読み客で塞がれがちな雑誌コーナーよりは適切な選択だろう。大抵どの書店でも棚は2メートル近くあるし、次の作戦――主に逃げ場所について小声で話し合う程度の機密性は保てるはずだ。

思いつきで決めた行き先にも関わらず、書店までは5分とかからなかった。昔ながらの商店街ならではの距離感と言ったところだろうか。

果たして準の予想どおり、雑誌コーナーには直立不動の立ち読み客がボーリングのピンよろしく並んでいた。準は車・バイクやカメラといった、自分にはおよそ無縁の雑誌には目もくれず、ライトノベルコーナーに直行する。

と、少し遅れて再び自動ドアが開く音が聞こえた。

「……半藤が入ってきたみたいです」

「本屋であいつの行きそうな所は大体想像がつくけどな。ま、俺たちは予定どおりの配置に着こう」

秋津への転入手続きや引越しに追われて忙しかったこともあり、ライトノベルコーナーに足を運ぶのは実に1ヶ月ぶりだ。

元々小さい書店だけに、雑誌以外はメジャーどころの漫画やエッセイ本優先で、ライトノベルの扱いは申し訳程度。しかし、1ヶ月ともなると新刊・新作が所狭しと顔を並べていて、つい立ち読みしたくなる。

その上で、ストーリーにしるイラストにしる琴線に触れるものがあれば、日々の食費を少しくらい犠牲にしてもお買い上げしたいところなのだが……。

「へえー、これが噂のライトノベル、略してラノベってやつですか？」

たまたま目の前にあった1冊を手に取り、感嘆の声を上げるルイ。

「まあ、そうだけど…… つくづく偏ってるよな、ルイの感性って言うか現代認識は。閉じ込められてても情報が入って来るって言うんだけど、それはどんな原理なんだ？」

「準さんだったら、どう想像します？」

レッツ・シンキング・タイム！

——とでも言わんばかりの笑顔で返されてしまった。準は仕方なく、自分なりに思いを巡らせる。

まず注目すべきは、ルイの類稀なる現代文化への順応性だ。鉄砲を初めて目にした種子島の領民ならいざ知らず、この守り神少女は物としての名称も概要も、ある程度は心得ている。初めて目にする本が『ライトノベル』というジャンルに属するものと即座に判断できてしまうあたり、60年以上も人間世界と隔絶された身だったとは、にわかには信じられない。

ライトノベルの存在を知らない者、パソコンや携帯をはじめ電子機器類を全く使えない者は腐るほどいる。いくらでも接点があるはずの人間でさえこうなのだから、ルイがその知識なり情報なりを得るのは、常識的に考えて限りなく不可能に近い。

しかし、それが噂という形に化ければ話は別だ。ただの『物』でしかなかった情報が、それこそ手足が生えた生き物になるのだから。そいつはネズミ講ばりのスピードで人の口を渡り歩き、やがてはルイのもとにも姿を現すだろう。

そのようなプロセスの一端を担い、なおかつルイの存在を認識できる者となれば、答えは自ずと絞られてくる。

「他の守り神……ルイの仲間か」

「はい、正解です。って、そんな歯の隙間にニラが挟まったような顔しないでくださいよー。脳の血糖値は温存しておかないと、いざという時に半藤から逃げられませんかよ？」

「自分の好きなものを卑下するのは正直気が引けるんだけどさ」

「けど？」

「こんな小説になり損ねた漫画もどきが話題になるって、ルイたち

の業界も意外に俗っぽいんだな」

神様というものに対して漠然と抱いていたイメージとのギャップに、準は心底打ちのめされたような声で答える。当の神様にしてみれば、勝手に想像して勝手に幻滅する無礼なヤツにしか見えないのだからうが。

しかし、ルイが準の言葉を真つ向から否定することはなかった。それどころか、

「うーん……俗っぽいと言えば、まあ俗っぽいのかも知れませんが、でも私たちから見れば人間——特に宗教家と一部の政治家がカタすぎるんですよ。真面目くさった顔で延々と同じ話をループさせて言い争ったり、しまいには宗教弾圧とか戦争まで起こしたり。これが本人たちの素の性格なら仕方ありませんが、カッコいいと思ってやってるんだとしたら救いようのない大馬鹿ですよ」

『私たち』と言うからには、守り神は基本的にルイのような考え方なんだろうか？　あまり深く追求するつもりはないが、何となくルイの言い分も分かる気がする。そもそも方法や課程はどうあれ、真面目な顔で他力本願を成し遂げようなど正気の沙汰ではない。

「ああいう連中は『常に真面目であれ、敬虔であれ』みたいな強迫観念に囚われてるし、周りもそれを求めるからな。何となくそれっぽい態度だけとって澄ました顔してるヤツも大勢いると思う。腹の中で考えてることなんか本人にしか分からないけど」

「でもカタすぎるのは生理的に受け付けません。そういう意味では『家』って漢字が付く職業はダメですね。一部の例外を除いて」

「一部の例外？」

準は訝しげな視線をルイに向けた。

「ええ。漫画家とライトノベル作家と大家さんと林家三平と吉野家です」

「は、林家三平って！？　そこは落語家って言うべきだろ。それに吉野家は店の名前で、職業じゃないぞ」

「あ、失礼しました。すき家と明石家さんまも入れるべきでしたね」

「そういう問題じゃない！」

「準さん、声が大きいです」

急に半眼になり、人差し指を唇の前で立てるルイ。

奇妙なボケをかましたかと思いきや真顔で正論を言ったり、何かと忙しい守り神だ。真夏のゲリラ豪雨の方がまだ節操があるんじゃないだろうか？ ふとそんなことを考え、準はげんなりした表情になる。

「店員にマークされても知りませんよ？」

「もうマークされてるだろ」

「え？」

「店員じゃなくて半藤にだけどな。話を戻すけど、不真面目すぎるのも考え物だぞ。現にルイは生臭坊主の気まぐれで60年以上も閉じ込められてたわけだし……」

「あの一族は不真面目と言うより自由奔放なところが魅力だったんですけどね。少なくとも初代から3代目の頃は」

「ルイには酷かも知れないけど、今それを悩んだところでどうしようもないだろうな。それより早く次の手を考えないと」

「え、何も買わないんですか？」

「買いたいラノベもなくはないけど」

「だったら買つときましようよ。こういう小さい店はただでさえラノベの扱いがお粗末なんですから『後で』なんて悠長なこと言つてると、あつと言う間に新刊に置き換えられてしまいますよ？」

……よもや、書店の売場面積別のラノベ事情にまで精通していたとは。ここまで来ると感心せずにはいられない。

実際、ラノベはよほどの売れ筋でもない限り、最新刊しか店頭に並ぶことはない。まして、発売からある程度の年数が経つと今度は古本屋やネットオークションでしかお目にかかれなくなってしまう、普通に新品を買うより高く付く可能性も往々にして考えられる。

元々買う予定だった作品であることだし、ここはルイの言うとおりにしておこう。

「分かった。でも、会計の前に行き先だけ決めるぞ」

受験勉強中から続きを心待ちにしていた新刊と、しばらく音沙汰のなかったお気に入り作家の新シリーズ第1巻、計2冊を手にとってルイに告げる。

「そうですねー。とりあえず放課後に寄った喫茶店とかどうでしょう？ あそこなら席も区切られてますし、万が一半藤が店の中まで尾けて来たとしても、筆談でやりとりすれば盗み聞きされる心配もありません」

「なるほど……よし、そうしよう！」

準は思いがけぬ名案に、半ば脊髄反射的に同意した。

何と言っても、あの店には1度全員で入っている。ということは、二三香を助っ人に呼ぶことが可能なわけで、準とルイだけで立ち向かうのとは比べ物にならないほど作戦の幅が広がる。

面倒ごとに巻き込んでしまっただけで申し訳ないという思いはあるが、問題はどのようなプロセスを経て切り札を行使するかだ。

（……これ、行けるんじゃないか？）

準は無意識にニヤリと笑い、ついでに小さくガッツポーズを決めた。

「何を1人で納得してるんですか？」

ルイが爪先立ちで顔を覗き込むように近づけてくる。いつもなら「うおっ!？」とよろたえる流れだが、今は作戦の糸口を掴めたことへの喜びの方が圧倒的に大きい。

「行こう。ゴングはもう鳴ってるぞ」

慣れない爪先立ちで小刻みに震えているルイの肩に手を乗せると、準は一直線にレジに向かって歩き出す。

一方、1人取り残されたルイは宿主の背中を見つめながら、ぽつりと呟いた。

「いつもの準さんじゃない……」

第五章 作戦会議は下ネタがいっぱい！ #2

会計を済ませて店を出ると、ちょうど電車が来た直後だったらしく、目の前の狭い商店街通りは乗り換え客でごった返していた。この通りに沿って歩いて行かないことには、例の喫茶店にたどり着けない。

「あちゃー、これじゃしばらく身動きとれませんか」

「すぐ落ち着くだろ。それより、あいつの動きに注意しないと」
「探ってみましょう」

ルイはそう言つと、目の動きだけで周囲を探り始めた。

こういつた索敵任務は体の小さいルイの方が適任と言える。こちらの警戒態勢を悟られにくい上に、小回りも利くからだ。皮肉なことに、その警戒対象たる半藤がご執心の相手もまたルイだったりするのだが……。

「準さん、見つけましたよ！」

「ずいぶん早いな。どこにいる？」

「たい焼き屋の看板の影からこつちを見てますね」

「つたく、しつこいヤツだな」

「まったくですよ。私をほったらかして逃げた俊山とは正反対です」

「つくづくバランス悪い一族だよな」

他愛のない愚痴をこぼしていると、ようやく人通りがまばらになってきた。

「そろそろ行くか」

「はい」

スムーズに喫茶店に入るには、予め反対側を歩くようにしておいた方が良さそうだ。

赤提灯を下げた立ち飲み屋は仕事帰りの誘惑に脆くも敗れたサラリーマンで賑わい、となりのつけ麺屋からは濃厚なスープの匂いが漂い、その上の学習塾からは白色蛍光灯の無機質な灯りが漏れてい

る。

いつもどおりの光景だ。そんな中、背後を気にしながらコソコソ歩かなければならないのが腹立たしくもあり、おかしくもあった。

喫茶店までは1分とかからなかった。

「10時までなら大丈夫だな」

念のため営業時間を調べてから扉を開ける。

未波たちと入った時はさして気にも留めなかったが、店の名前は『ジユラ紀』というらしい。いかにも獰猛そうな肉食恐竜が大口を開けて店名を叫んでいる（咆えている？）、妙にアメコミくさいプレートがドアにかかっているので、嫌でも目に入る。

「いらつしやいませー」

「……」

店員の声が出た方に目を向け、準とルイは思わず絶句した。

ヤクザが、コーヒー豆を挽きながら、カウンターに、立っていたドアにかかっていたプレートと同じロゴ入りのエプロンをしているので、この店の従業員あるいはオーナーであることは間違いないさそうなのだが……。

（いや、待てよ？ 店員に変装した強盗が何かで、本物の店員は奥で縛られてるなんてことも……）

最悪の可能性を想定して、準は右手でルイをガードしながら半歩後ずさる。

初島以上に細い体、不気味に光るスキンヘッドとサングラス。「いらつしやいませー」などと、ごくありふれた接客用語とは相容れぬ——むしろ正反対の存在と言っても過言ではない。

「昼は喫茶店、しかし夜の顔こそ真の姿——ってどこですかね」「ルイが耳元でささやきかけてくる。こんな状況で軽口を叩けるとは大した度胸だ。

と、スキンヘッドの男が奥に向かって声をかけた。

「2名様ご来店です。2階にご案内して」

「はい」

明るい声と共に現れたのは、夕方準たちのもとへアイスコーヒーを運んできた店員だった。向こうもこちらの顔を覚えていたらしく、「あら、夕方のお客様」

「深歩ちゃんの知り合いかい？」

スキンヘッドが店員にたずねた。

「いえ、夕方にも来ていただいていたお客様ですよ。あれ？ あとのお二人は……？」

「今は俺たちだけです」

ふと我に返り、あわてて答える準。

こちらの顔だけでなく人数まで覚えていたとは。接客業ではごく当たり前のことなのだろうか？ ある程度時間的な余裕ができればバイトでも始めようと目論んでいた準は、自分にも勤まるかどうか急に不安になってくる。

「それじゃご案内しますね」

「またのご来店ありがとうございます」

2階へと促す店員の声に、スキンヘッドのにこやかな声が重なる。準とルイは「どうも」と軽く頭を下げると、そそくさと階段を上り始めた。

「驚いたでしょう。あの頭とサングラス」

階段の踊り場に差しかかったところで、不意に店員がこちらを振り返った。

「ええ。ここの店長さん……ですか？」

上目遣いに答えるルイ。

「大当たり。でも、ああ見えて普通の人ですから、怖がらなくて大丈夫ですよ」

「だそうですよ、準さん」

「何でその話をこっちに振るんだよ」

「だって引け腰になってるの丸分かりでしたよ」

「ヘタレを承知で言わせてもらっけどな、あの顔を見れば誰だって

ビビるわ！ 何とも思わない方がどうかしてるんだよ」

ニヤニヤと薄笑いを浮かべるルイに、準はきっぱりと断言する。

「まあまあ、お二人とも。初めてのお客様はもちろんですけど、私も2年前にバイトの面接に来た時そんな感じでしたから。普段は私や他のバイトの子がカウンターに立つようにしてるんですけど、ちやうど洗い物がたまつてて……って、ごめんなさい。変な言い訳して」

いかにも「やってしまった」とばかりに、店員の顔が真っ赤になる。夕方コーヒーを運んできた時の事務的な雰囲気はすっかり鳴りを潜めていた。

第五章 作戦会議は下ネタがいっぱい！ #3

「ご注文は後の方がよろしいですか？」

店員は2人を席に通すと、メニューを手渡しながたずねた。

ファミレスならいざ知らず、喫茶店に来て注文する物と言えば、だいたい相場は決まっている。とはいえ、空腹時のコーヒーは何かと胃に負担がかかるので、たんぱく質も同時に摂取できる物がいい。「ロイヤルミルクティー、アイスをお願いします。ルイは決まった？」

「私はレモンスカッシュ、アイスをお願いします」

ドヤ顔のアイス指定に、準は思わず噴き出しそうになった。ホットのレモンスカッシュなど見たことも聞いたこともない。そもそも熱を加えた時点で、せつかくの炭酸が抜けてしまうではないか。

「かしこまりました。すぐお持ちしますね」

準は店員が階下へ消えたのを確認すると、鞆からメモ帳を取り出した。今は普通に会話していても問題ないが、半藤が現れたら即座に筆談に切り換えなければならない。

「考えてみたんですが、私たちに見つからずに尾行するのが目的だとすれば、店の中まで踏み込んで来る可能性は低いかも知れませんが、提案しといて何ですが」

「そりゃ来ないに越したことはないよ。一応念のためだ」

「承知しました。それでは作戦会議スタートですね」

周りを確認して高らかに宣言するルイ。曲がりなりにも追われる身の上だと言うのに、どうしてこうもハイテンションなのか。

準は半分なだめるように口を開く。

「とりあえず落ち着けよ。最初に現時点で把握できてることを整理しよう」

「そうですね……半藤の気功波は封じたも同然ですが、あの探知機まがいの札がありますから、中途半端な逃げ方ではすぐ見つかつ

てしまう。逆に言えば、一刻も早くあの札の有効範囲外に身を移すことが大前提になる。……今言えるのはこれくらいでしょうか」

「あいつの札を奪い取っちまえば一気に解決なんだけどな」

「さすがにそれは無理でしょう。透明人間になる能力でもあれば別ですが……」

「結局逃げるしかないってことか。そうなると二三香の出番だな」

準はついに逃亡作戦の鍵となる人物の名前を口にした。今はまだ外枠中の外枠、大雑把もいいところだが。

「二三香さん、ですか？」

ルイは一瞬首をかしげたが、すぐにピンと来たのか、

「あ、なるほど。瞬間移動ですね？」と目を輝かせた。

「そう。問題は、半藤の目に触れることなく使うにはどうするかだ」
「たしかに。そこが一番のネックですね。二三香さんに迷惑はかけられませんし……」

準は無言で頷いた。

二三香を覆面レスラーとして扱わなければならない理由。要約すると、今まさにルイが口にした言葉そのものになる。

半藤との鬼ごっこに一気にカタを付ける上で、二三香の瞬間移動ほど打ってつけの能力はない。しかし、3人が一斉に――いや、たとえ1人ずつでも一瞬で姿を消すような超常現象を、ただのマジックや幻覚として見逃すほど半藤の目も節穴ではないはずだ。

それに、半藤は消失前の神社の位置ばかりか、守り神が宿っていることまで完璧に把握していた。人としての姿形を持たないはずの存在を知っているということは、半藤の曾祖父に当たる武者小路俊山までの歴代神主のうち誰かが何らかの形でルイに接触し、その時のことを記録に残していた可能性もある。念のため確認しておく必要がありそうだ。

「ところルイ、今までに半藤以外の武者小路一族と接触したことは？ たとえば、話をしたとか、顔を合わせたとか」

「初代神主の俊蘭となら1度だけありますよ。社が完成して何日か

たった頃に『それじゃよろしく』みたいな軽い挨拶を交わした程度ですけどね」

「やけにフランクだな」

「だから言ってるじゃありませんか。堅苦しいだけの宗教家気取りは嫌いだって。信仰対象が基本的に1人だけの海外ならいざ知らず、私は日本全土に800万いる神の1人に過ぎないんですから、馬鹿のひとつ覚えみたいに畏まる必要なんてないですよ」

「——マジっすか？」

新事実が発覚した瞬間だった。

たしかに、たくさんいることの例えで『やおよろず』と表現することはある。だが、それは人間側の勝手な解釈に過ぎず、その代表格たる日本人でさえ、神様が1人の狂いもなくちょうど800万人いると考える人は皆無に等しい。

常識が覆されることは往々にしてあるが、欠片も想像できない——定説も逆説も存在しない事象を真実として提示されると、驚きの言葉すら口にできないほど呆然としてしまうものらしい。ルイの言葉に疑問を抱きながらも額面どおり受け止めつつある自分に、準は一瞬戦慄を覚えた。

「いるんですよー、これが。さりげなく埼玉県の総人口より多かったです。さすがに東京・神奈川には負けますけど」

「変な比べ方するなよ。県庁所在地とか覚えてたての小学生じゃあるまいし」

神様の威厳やありがたみが隕石並みのスピードで地に落ちるような錯覚を覚え、準は半笑いで苦言を呈する。

「でも実際問題として、私たちの仲間は息苦しさをを感じるあまり、神社みたいな場所に寄り付かないケースが圧倒的に多いんですよ。もつとも寄り付いたら寄り付いたで、日本中がパワースポットで溢れ返ってしまいますけど」

「それじゃルイの仲間は普段どうしてるんだ？」

「9割がヒッピーかヒッキーですね。青木ヶ原樹海や出雲大社に引

きこもってネトゲに明け暮れてたり、横浜の中華街や秋葉原の電気街を徘徊してたり、代々木公園で踊ってたり。みんな好き勝手やってますよ。もちろんこの秋津近辺にも何人かいますし、私が外の情報をキヤッチできてたのは彼らのおかげです」

たしか、代々木公園の歩行者天国は10年以上前に廃止されているはずだが……。ルイとは対照的に、自由の身でありながら、しつかり時代に取り残された神様も中にはいるらしい。

「ルイの話を聞く限りだと、大半は駄目人間と世捨て人——もとい駄目神様と世捨て神ってことになるぞ。ってか、他に神様がいるなら助けてもらえばよかったのに」

「それが、そうも行かないですよ。いくら好き勝手やっているとは言っても、私たちの中には長老神という800万の最高位に君臨する神様がいます。その長老神が決めた、少々厄介な掟があります……」

「掟？」

「はい。『800万の中の誰かが何らかの事故で封印されても、他の神は許可なくこれを助けてはならない』という、何とも理不尽な内容の」

「それで何十年も出られなかったって言うのか？」

「恥ずかしながら、そうなんです。もちろん、他の神を通じて許可を得ようとはしたんですが、いかんせん長老神も石頭ですからね。」

「ただで出してやるわけには行かん。その代わり、5人の願いを同時に叶えるか、1人の願いでもうまく利用することができたら自動的に出られるようにしてやろう」なんて言ってきやがりました。まじファックですよ！」

ここぞとばかりに長老神とやらの悪口を言いまくるルイ。聞いているうちに、思わず苦笑いが漏れる。

準として「石頭って言うよりはDSの領域だよな……？」と軽く引いたりはしたものの、相手は曲がりなりにも800万の頂点に立つ神様だ。敬意どころか礼儀の欠片もない台詞を堂々と吐くのはいか

がものだろうか。

「ところで、どうしてそれを二三香たちがいる時に言わなかったんだ？」

「私も話すべきかどうか悩んだんですよ。二三香さんも未波さんも、心がきれいでやさしい方です。古くさい言い方をすれば、情にも厚い。それだけに、お二人が真実を知ったら、怒りの矛先が長老神様に向いてしまいかねません。長老神様はいい加減なように見えて、意外とプライドの高いお方ですので……」

「ルイみたいな神様ならまだしも、人間ごときに文句を言われたとあつては怒り狂って何をしでかすか分からない、ってか？ まあ何はともあれ、これでひとつはつきりしたな」

「何がですか？」

「半藤の前で二三香の能力を使うべきじゃないってことだよ。ルイに関してどんな記述が残ってるのかは分からないけど、おそらく半藤は俺たちが考えてる以上にこっちの内情を知り尽くしてる。俺たちのそばをうろついてるだけでも『私は関係者です』と触れ回ってるようなもんなのに、まして能力なんか使ったら、二三香まで監視の標的にされちまう」

「能力発動の現場はおろか、姿を見られるのもNGと。困りましたね」

準は左手でネクタイを緩めながら、

「ここで焦っても仕方ない。もう少しじっくり考えよう」と答える。ろく考えもせず泣き言を言いたくはない。しかし、早くも制約が加わってしまったのは事実だ。

どちらともなく、ため息が漏れる。

と、その時。

「お待たせしましたー。ロイヤルミル……あ、あの、お客様……？」
顔を上げると、先ほどの店員がトレイを抱えたまま棒立ちになっていた。

「はい？」

「……っ!!」

「？」

どうも様子がおかしい。

店員は頬をトマトのように赤くして、1ヶ所をひたすら凝視している。その視線を何となくたどり、準はハツとした。

ネクタイを緩め、第1ボタンだけを外すつもりが、いつの間にか一番下のボタンまで外してしまっていた。これでは、どこをどう見ても見紛うことなきス・ト・リ・ッ・パ・ー。

青ざめたのと赤面したのが入り混じり、準の頬は一瞬にして紫色に染まる。

「すみませんっ！ 第1ボタンだけ外すつもりだったんですけど……いや、本当ですって!」

「で、ですよね。あは、あははは……」

「ほんと、何やってるんでしょうね、俺。はははは……」

沈黙が続くのも耐え難いが、互いに向き合ったまま誤魔化し笑いを続けるのも、気まずさの点では同格だ。かと言って、即興でうまい切り返しが思い浮かぶはずもなく。

「いつまで笑ってるんですか？」

30秒は笑い続けただろうか。ルイの冷ややかな声で、準と店員は我に返った。「故障したサンプリングマシンじゃあるまいし」
とでも言いたげな呆れ顔が目に入る。

「そ、それではごゆっくり……」

ルイから立ち上る不吉なオーラを察知したのか、店員は空いたトレイで顔を半分隠しながら、そそくさと立ち去ってしまった。

第五章 作戦会議は下ネタがいっぱい！ #4

準はロイヤルミルクティーを半分近くまで飲み干すと、おもむろにガムシロップの封を開け、中身を1滴残らずグラスに注いだ。ちなみにガムシロップを入れるのは、これがひとつ目だ。

「変わった飲み方ですね」

「敢えてそうしてるんだよ。ほら、よく言うだろ。疲れた時は甘い物、って」

「それじゃ私のガムシロップも使います？」

「……何だって？」

レモンスカッシュにガムシロップ。

この店の味覚センスは大丈夫だろうか？

「いや、遠慮しとく。栄養のバランスが崩れるし、単に摂取量だけ増やせばいいってもんでもないだろ。ガムシロップひとつでも、予めミルクティーの量を減らしておけば相対的に甘くなる」

「なるほど。プラシーボ効果ってやつですね？」

「まあ、そんなとこかな。それより、飲みながらでいいから続きを考えよう」

「そうですね。じゃ、さっそく私からひとつよろしいですか？」

「どうぞ」

準は答えると同時に、素早くシャーペンを構えた。

「二三香さんにご協力をお願いする時の注意点ですが、会計を済ませて外に出てからの方がいいかも知れません。ただ半藤の目に付かないことだけを優先するんですしたら、今すぐに二三香さんを呼んで高飛びすれば解決ですけど、お代がまだですし……」

「……さすがに無銭飲食はまずいもんな。でもそうになると、二三香と合流できそうな場所はコンビ二のトイレくらいだぞ。たとえば、そうだな……時間を予め決めておいて、二三香は中で待機。ルイがノックしてきたらドアを開けて、そのままどこかへさようなら」

「準さん、それ使えるんじゃないですか？ さっそく二三香さんに電話して——」

「待て待て、早まるな。その作戦はルイにしか使えない」

「え、どういことですか？」

「どうもこうもあるか。俺まで女子トイレに入ろうとするのはどう考えてもアウトだろ。それに、俺は半藤に何が目的でルイを尾け回すのか吐かせる役目もある。ヤツの返答次第では最悪の場合……」

「そ、そんな……だったら私が半藤と話を付けます。準さんはちゃんとアパートに戻ってください！」

すべてを言い切らないうちに、ルイが椅子から立ち上がった。その表情は青ざめ、目にはうっすらと涙が浮かんでいる。

準は口に含んだミルクティーを危うく嘔き出しそうになった。直後、余計なことを言うんじゃないかという後悔の念が頭の中を埋め尽くす。

「『半藤と話を付ける』って、何するつもりだ！？」

「私が責任を持って半藤の暴走を止めます。また、あの社に戻ることになるかも知れませんが……」

あわてて問いたただす準に、覚悟半分あきらめ半分の、感情がこっそり抜け落ちたような言葉が返される。

「こんな時に変な冗談はやめろよ」

「冗談なんかじゃありません。迷惑をかけられないのは準さんも二三香さんも同じです。だから、行かせてください！ お願い……します……」

と、目で辛うじて止まっていた涙が、大粒の雫となってグラスにテーブルに落ちた。握りしめた拳は小刻みに震え、青ざめていた頬は寿命を迎える瞬間の小惑星のように紅潮している。「行くな！」
「止めないでください！」の押し問答になるのは火を見るより明らかだった。

「いいか、ルイ。たしかに俺と二三香に関しては、それでいいのかも知れない。でも、ルイがいなくなること悲しむ人間が目の前に

いるってことだけは頭に入れといてくれ。半藤絡みの実害を受けずに済むとしても、勝手にいなくなられたら——そっちの方が精神的な意味で迷惑なんだよ」

「でも……」

「大丈夫。俺は何か別のルートを考えて逃げるから。とりあえず座れよ」

準は浮きかけていた腰を上げると、手を伸ばしてルイの肩にやさしく乗せる。

——ルイの返事はない。

やせ細った肩が準の手から離れる。

ぱさつ、という衣擦れの音と共に、ルイは再び椅子に腰を下ろした。

「すみません、変に取り乱したりして」

「気にしなくていいよ。いや、俺たちのことを心配してくれるのは嬉しいんだけど、何て言うか……俺個人としては、ルイと一緒に戦いたいんだ。半藤の言動を見れば分かると思うけど、俺がルイを差し出したところで大人しくなる保証なんかどこにもない。あいつは約束を守らない男なんだよ」

実際のところ半藤の真意は分からない。しかし、今後一切手を出さないとっておきながらルイを尾け回している現状から察するに、よからぬことを企んでいることは明白だった。

「本当にすみません。私、そこまで考えが回りませんでした」

「たしかに、俺の逃走ルートをどう確保するかが目下最大のネックなんだよな。ほんの一瞬でも半藤の意識を他に向けさせられれば……」

二三香をルイ逃走作戦と同じ要領で男子トイレに待機させておけば事は簡単に済むのだが、さすがにそれを打診する勇氣はない。

「二三香さんだけでなく、未波さんもうまく組み込めればいいんですけどね」

「下手に人数だけ増やすのもどうなのかな。あいつも顔を見られず

に動かさなきゃならないわけだし」

「そこは大丈夫ですよ。普通の人なら横からのコンタクトしか取れませんが、未波さんは空を飛べますから上からのコンタクトも可能です」

横からというのは、おそらく相手の目の届く範囲、つまり地上からの直接攻撃のことだろう。となると、攻撃する側には当然、反撃を受けるリスクが発生する。

まして半藤は、見た目こそ普通の高校生ながら、応戦する術を突きや蹴りのような打撃技以外にも持ち合わせている人外兵器だ。下手な得物を振り回されるより、むしろ丸腰の方が圧倒的に手強い。『無防備だから』とタ力をくくろうものなら、死亡フラグの助けを借りることなくあの世への最短ルートを攻略できてしまう。

言い換えれば、素人がどれだけ周到な攻撃プランを組もうとも、半藤相手には文字どおりの捨て身攻撃にかなり得ない。恥も外聞もかなぐり捨てて背後を狙い、なおかつ電光石火の速さで立ち回らなければ、攻撃以前に犬死に確定だ。

「でも上からって具体的に何をするんだ？」

「姿を見られなければ基本的に何でもアリですよ。パチンコ玉を投げつけて蜂の巣にするもよし、グラウンドのライン引きに使う生石灰をかけて目潰し攻撃を仕掛けるもよし」

「見かけによらず鬼畜だな」

さっきまで涙を浮かべながら特攻しようとしていた者の台詞とは到底思えなかった。準は思わず苦笑してしまう。敢えて肯定的な見方をすれば、真剣に玉砕を考えるほど追い詰められて初めて浮かぶ発想なのかも知れないが……。

「ま、手加減してやる義理も筋合いもないけどさ。ただ、未波の場合は通行人にも注意しないと。人間が宙に浮いてたら一発でパニックになるぞ」

「このクソ狭い商店街では厳しそうですね。ところで、準さんは未波さんと二三香さん以外にいませんよね？」

「いない、って何が？」

「お友達です。うまく正体を隠せたとしても、示し合わせたように次々と怪奇現象が起こっては、おいおい準さんの周辺に疑いがかかるでしょう。塩崎先生と初島先生も未発とはいえ能力者ですし、発動のタイミングが予測できないという点では、半藤の監視下に入ってしまうと未波さんたち以上に厄介なことになるかも知れません」

友達が少ないことを遠回しに指摘され、準は心が折れそうになった。

「そうは言っても、二三香の能力だけは外せないし……弱ったな」

砂漠の真ん中で湧き水を見つけたものの、凶暴なワニがいて下手に近づけない。そんな歯痒さを覚えながら、準は頭をかいた。

そもそも、本当にタブー視すべきなのは準とルイ以外の存在を悟られることであって、別に二三香の能力を頼ること自体は問題ないはずだ。

頭の中を整理する意味合いも兼ね、文頭に○×を付けてメモ帳に書き写す。

紙とペンの偉大さについて得意げに語る未波の顔が、ふと脳裏に浮かんだ。

「ここから先は3人で考えた方がいいかも知れないな。こうなった経緯も一から説明しなきゃならんし」

「そうするしかないさそうですね」

「よし、連絡しよう」

準はルイの賛成意見を聞くと携帯を取り出し、二三香の番号を呼び出した。4〜5回ほど呼び出し音が鳴った後、

「もしもし、渡瀬君？」

口に何かが入っているような、いつもより微妙に歯切れの悪い声が聞こえてくる。

（しまった、晩飯時だったか！）

瞬間、冷や汗が噴き出す。

「あ、ごめん。食事中……だったかな」

「うん。近所のラーメン屋で1人さみしく、ね」

「やっぱり……ごめん、後でかけ直すよ」

「大丈夫よ。今、ちょうど最後にとつといたチャーシューを食べてたところだったの。それより、さつそく何かあった？」

さすがは二三番、なかなか鋭い。準は息を押し殺しながら、やや早口で告げる。

「ルイが封印されてた神社の神主が現れた。正確に言うと、空襲で焼けた時の神主のひ孫で、うちの生徒なんだけど、ルイにしつこく付きまといて手を焼いてるんだ」

「う、嘘でしょ？ まさかとは思ってたけど、こんなに早く現れるなんて……。そいつは今そこにいるの？」

よほど驚いたのだろう、電話越しの声が急にポリウムアップして、準は思わず携帯を耳から遠ざける。

「今は一時的に喫茶店に身を隠して、ヤツから逃げる方法を考えてるところだ。店に入って来てる様子はないから、おそらく外で張ってるんだと思う」

「分かった。今からそっちに行くわ。喫茶店って学校の帰りに寄った所よね？」

「そうだけど出歩いて大丈夫なのか？ あんまり遅いと家の人が必要するんじゃない？」

「うん。今日はお父さんが飲み会、お母さんが夜勤、お姉ちゃんも大学のサークルの新歓でいないから」

「そっか、助かるよ」

と、ルイが何やらジェスチャーを送っているのが目に入った。

（どうしたんだ？）

アイコンタクトで返す準。

「私からもお話が……」

「あ、ルイからも何か話があるみたいだ。ちょっと代わるよ」

そう言つと、準は携帯をバトンタッチする。

ルイは慣れない手つきで受け取ると、おそろおそろ耳に当てた。

——アンテナを下向きにして。

「上下逆だぞ」

「あつ……もしもし、ルイです」

「ルイちゃんと電話で話すのは初めてよね」

二三香の声が携帯特有のノイズに紛れてうつすらと聞こえてきた。
(受け取る時に音量ボタン押しやがったな?)

「ええ。さっそくなんです、店に入る前に、入口近くに学園の制服を着た男がいないかチェックして欲しいんです」

「もしかして、そいつが例の神主……のひ孫？」

「そのとおりです。一応念のためですが、中に入る時は入口経由ではなく、瞬間移動で直接二階に来てください」

「了解！　すぐ会計済ませてそっちに行くから、渡瀬君にも伝えてくれる？」

「分かりました。お待ちしてます」

そう言つと、向こうから電話が切れたのか、ルイは携帯のディスプレイを数秒間見つめた後、通話終了ボタンを押した。

第五章 作戦会議は下ネタがいっぱい！ #5

二三香は2、3分ほどで現れた。

「1人いたわ、学園の制服」

抑え気味ながら、どこか生き生きとした——まるで目当ての物を見つけたハンターのような声。

一方、準とルイは半分やつれた顔を上げ「ああ、やっぱり」と暗い二重唱を奏でる。

外見も含め、半藤の人となりについては、電話を切った後に箇条書きでメールしておいた。

秋津駅の目と鼻の先で秋津学園の制服など、さして珍しい存在ではない。しかし、用もない喫茶店の前でドアを凝視したまま微動だにしない男となると、話は別だったようだ。

「見た感じでは普通の人みたいだけど、このご時世じゃ一途もストーカーも紙一重よねー」

「二三香は半藤が俺たちに対して何をしたか知らないから、そんな呑気なことが言えるんだよ」

「俺たち、つてことは渡瀬君も何かされたの？」

「ああ。気功波をもろに食らって吹っ飛ばされたんだ」

「気功波!？」

素っ頓狂な声を上げる二三香。一般人としては真つ当な反応だ。

が、その程度で驚いていては、実物を目の当たりにした時に正気を保てないのでは……。準は軽く心配になる。

と、ルイがセーラー服のブラウスを捲って、

「何でも、超マイナーな流派の空手を習ってたとかで。これ、その時にできたアザです」と説明を挟んだ。

驚きで見開かれていた二三香の目が、今度は静かな怒りを宿して鋭く細められる。

「ふーん。で、誰なの？ 我らがルイちゃんに仇為するくでなしは。

それ、普通に殴られたくらいでできるアザじゃないわよ？」

「誰も何も、二三香自身がついさつき見てきた男の仕業だよ」

未波のことをとやかく言えないレベルの隠れ天然なのか、単に怒りで我を忘れていただけなのか。新たな不安材料が準の胸中に暗い影を落とす。

「ごめん、聞き方が悪かったわね。名前とかクラスとかは分からなかった？」

二三香はそう言うのと、指の関節を鳴らした。

「このアザは私が直接攻撃を受けてできたものでないですよ。攻撃を受けたのは準さんで——もっとも不意打ち同然だったんですけどね。準さんが何らかの形でダメージを受けると、それが私にも何割かフィードバックされるんです」

ルイも二三香の全身から立ち上る不穏なオーラを感じ取ったのか、大あわてで補足を入れる。

普段温厚あるいは冷静な人間に限って、本気で怒ると血を見るだけでは済まないと言うが、二三香はその典型かも知れない。つくづく難儀なことだ。

「メインで食らった俺も歩き回れる程度にはピンピンしてるんだ。間違ってもヤツと渡り合おうとか考えるなよ？」

準は質問に答える前に予め釘を刺す。

「俺に危害を加えてきたのは2年1組の半藤達尚ってヤツだ。何でも、日本史研究会とかいう同好会もどきのリーダーに納まって、ルイを監視したり追い回したりしてるのは研究の一環らしい。俺を傷つければルイにもダメージが行くと知るなり1度は『もう手出しはしない』とか詫び入れてきたくせに、なぜかしつこく尾けて来やがるし……困ったもんだよ」

後半はほとんど酔っ払いがクダを巻くような口調になっていた。

助手のようなポジションで（あくまでも表向きだが）半藤に同行していた神沢アサミという少女についての説明は、敢えて省略することにした。彼女は準とルイに「実害が及ばないよう陰で協力する」

と半藤公認（？）で申し出てくれているし、当座の作戦を立てる上で特に紹介が必要な人物でもない。

それに、今の二三香では『半藤の助手』という1点だけで、十把一絡げに敵意を抱いてしまう恐れもある。アサミに関する説明は、またの機会にしておいた方が良さそうだ。

「よりによつて2年生なんて、厄介なのに目を付けられたわね。この様子じゃマンションまで尾けてくる可能性大よ」

「だから困ってるんです。それに、半藤は気功波以外の切り札も持つてまして……」

「まだあるの？」

「鳥居に貼られていた札です。見た目はただの紙切れなんです、私から半径50メートル以内に入ると赤く発光する——いわばセンサーみたいなものですね。半藤はそれを使って私の居場所を四六時中監視してるんです」

「一時的に半藤の目を逃れたとしても、秋津から離れない限り、また見つかるのは時間の問題なんだ。とりあえず今晚だけでいい。二三香の知ってる範囲で、ここからできるだけ遠く離れた場所に連れて行つて欲しい」

「それならお安い御用よ！」

二三香のドヤ顔に、準は安堵の表情を浮かべた。

「ただ、この作戦を実行する上でいくつか条件つつか制約がある。今、紙に書いて整理するよ」

準は再びシャーペンを手に取ると、項目ごとにスペースを空けて何やら書き始めた。その手元を凝視するルイと二三香。

美少女2人（約1名、明らかに少女とカテゴライズできない年齢の守り神を含む）に無言で見つめられると非常にやりにくい、あいにく今は『半藤から如何にして逃げるか』というプレッシャーの方が大きい。準もまた、無言かつ無表情で筆を走らせる。

——1分後。

「……よし、こんなもんかな」

「できましたか？」

「どれどれ……」

準はメモ帳をルイ・二三香側から見やすい向きに直す。走り書きながら読みやすく整ったペン捌きで書かれたそれは、大きく三項目に分かれていた。

条件1 半藤が今もルイを尾け回す目的は何か。それを本人から聞き出す。

条件2 瞬間移動が二三香の能力であること、二三香自身が2人に関わっている事を悟られてはならない。あくまでも俺（準）もしくはルイ、どちらかの能力であることをアピールする必要がある。

条件3 住んでいる場所が秋津以外の場所であると思わせる。

「条件3 は一応将来的なことも考えて入れておいた。あくまでも推測だけど、逃げ方が中途半端だと、あいつは俺たちがまだ近くに潜んでると思って秋津近辺をシラミ潰しに回ると思うんだ。普通は一晩探して見つからなければあきらめるか、せめて他を当たるかするもんだけど、あの性格からすると、しばらく秋津に張り付いたまま動かない可能性もある。とりあえずこれを踏まえて、いいアイデアがあれば教えてくれないか？」

食い入るようにメモ帳を見つめる2人に、準は補足説明をする。

特に、二三香に対しては単純明快に伝えておかないと、協力を依頼すると言つより一方的にこき使うような格好になってしまう。親しき仲にも礼儀ありだ。

と、ルイがおもむろに口を開いた。

「ちよつとシミュレートしてみましょう。このまま店を出て、最初に起こるイベントは半藤とのエンカウントですよ？ 条件1を消化するには、このタイミングが狙い目のような気がするんですけど」

「たしかに、逃げる態勢に入ってからだと話をするとこるじゃなさ

そうね」

二三香も即座に賛同する。

「ただでさえ人の話を聞かないヤツだからな。頭に血が上る前にサクツと聞き出すのが賢明か……」

2人の意見を余白に書き加えながら、準はため息をついた。

「渡瀬君、私からもひとつ」

今度は二三香が手を挙げる。

「どうぞ」

「条件2 と 条件3 なんだけど、逆の発想を試みるのはどうかしら」

「逆の発想？ どういうことだ？」

「一昨日の夜を思い出してみて。一緒に瞬間移動した時、私はどうしてた？」

「どうって、俺の肩に手を乗せて……いや、待てよ？ まさか……」

「ええ、そのまさか。あいつを遠くに飛ばしちゃえばいいのよ。それこそ一晩では帰って来られないくらい遠くに」

「でも、肩に手なんか乗せたらバレルんじゃないか？」

「それなら心配無用ですよ。肩だけでなく、シャツの裾とか鞆でもOKです」

「ルイが言うなら大丈夫……なのか……？」

「かく言う私も未波で1度実験してるのよね。半藤がルイちゃんと渡瀬君に気を取られてる隙に背後を狙えば……多分行けるはずよ？」

すでに実験済みと聞いて、準は内心ほつとする。

それにしても、二三香は半藤をどこに飛ばすつもりなのだろう。

ルイを守ろうという義侠心からとはいえ、あまりにもノリが良すぎて準の方が萎縮してしまう。

しかし、毎月払っている家賃の事を考えると、今のこの状況は言語道断だ。話し合いで何もかも解決するのなら、そもそも人類史上において弾圧や革命やクーデター、ましてや戦争など起こらなかつたわけで。今は心を鬼にするべき時なのかも知れない。

「あ、飛ばすって言っても、パスポートとか宇宙服が必要な所には飛ばさないから安心して」

「ってか、宇宙服が必要な場所に飛んだら、二三香も無事では済まないだろ」

「記憶に残っている場所にしか飛ばませんから大丈夫ですよ。二三香さんが実は元宇宙飛行士だったとか地球外生命体だったとかなら話は別ですけど」

ルイがレモンスカッシュを舌の上で転がしながら言った。5人分の能力をまとめて把握・設定した張本人だけあって、その口調は自信に満ち溢れている。

「ルイちゃん、炭酸平気なの？」

二三香が意外そうな顔で尋ねる。

「ええ。どういうわけか酸っぱいのが飲みたかったので」

ここ数時間の緊張状態の反動からか、ルイは頬を緩めながら答えた。傍から見ている分には、この上なく微笑ましい笑顔で。あと10年もすればレモンスカッシュがレモンサワーあたりに変わってしまふのかも知れないが、この無邪気な神様は人間と違って年を取らない、いわば永遠の13歳（推定）だ。精神面に多少の変化こそあれ、基本的には今のまま変わらずにいてほしいと願わずにはいられない。

第五章 作戦会議は下ネタがいっぱい！ #6

「渡瀬君、ちよっと……」

「ん？」

手招かれるまま、二三香の口元に耳を寄せる。

「まさかとは思うけど、もう手を出しちゃったわけ？ 酸っぱいものを欲しがるなんて、どう考えても——そこんこの事実関係次第では、半藤ってヤツの前に渡瀬君を始末しなきゃならないわよ？」

「あー、ちよっと待った。結論から言っと、俺は無実だ」
ため息と共に身の潔白を訴える準。

このままでは、年齢不相応かつ陰気なため息キャラが定着してしまいそうだ。そして、その懸念はさらなるため息を誘発する。

「ったく何事かと思えば……。いいか？ ルイは顕現して3日もたつてないんだ。どう考えても無理があるだろ。中学の時に保健体育の授業で習わなかったのか？」

主語を思い切り省略して、準は二三香に詰め寄る。

何のことはない。『事に及んでから、愛の結晶がルイの胎内に宿るまでに要する日数』のことなのだが……はつきりと口にするのは、さすがに憚られた。

「うっ、たしかに……」

「どうして『酸っぱいものが好きなんだな』って普通の見方ができないんだ？ ひよっとしてあれか？ 二三香と半藤は、実は早とちりの得意な似た者同士の兄妹でしたー、なんてオチでも待ってるのか？」

「あ、あのー」

ルイが絞り出すような声と共に、準の太股をつついた。その動きはテーブルの下で行われているので、二三香からは見えない。

準はルイの表情に注目すべく視線を移す。

まるで『ものすごく言いにくいけど言わなければ』といった強迫

觀念にでも駆られているかのような――

「お二人とも、はつきり言って丸聞こえです」

――大当たりだった。某クイズ番組のハンターチャンス終盤で、絶対に奪われたくない高額景品をライバルチームにかっさらわれ、惜しくも優勝を逃した時のような虚無感に襲われる。

と、次の瞬間。

「ルイちゃん、違うのよ!」

二三香がルイの肩をがしつと掴むと、芝居がかった口調で叫んだ。その無駄な迫力に圧倒され、目を瞬かせるルイ。

準は止めようと一瞬手を伸ばしかけたが、すぐに思い止まった。

ここは騒ぎの種を蒔いた（ばかりか、見事に開花させた）当人に事態を収束させるのが一番だ。

しかし、その選択が間違いだと気づくのに、さほど時間はかからなかった。

「あ、あのね、これには深〜い訳と些細な勘違いがあつてね……?」

「何が『深〜い訳と些細な勘違い』だ。恥ずかしいヤツだな」

99パーセントの努力と、1パーセントのひらめき。某発明王の言葉を真似たつもりなのだろうが、二三香のそれは後世に残る妄言にはなり得ても、語り継がれるほどの名言には程遠かった。

「まあまあ。でも、二三香さんが勘違いをしているのは紛れもない事実です。私はまだ、その……未経験ですし、今の準さんとの間柄を考えれば、先に手を出すのはむしろ私の方でしょう」

「ルイの言うとおりだ」

とは言ってみたものの、準は手を出されるがままでいるつもりなど毛頭ない。ルイが奇策珍策を弄したところで、一言「戻れ!」と念じれば強制的にジ・エンドだ。

そんな準の思惑にも気づかず、ルイはお説教を続ける。

「いいですか、二三香さん。コウノトリの存在を信じても許されるのは小学生までですよ!」

「まったくそのとおりだ」

コウノトリの存在を信じているはずの人間が、手を出した出されたの関係に言及しているのも妙な話だが。

「それと、テレビばかり見てると馬鹿になりますよ。特に主婦向けのドラマや恋愛トーク中心のバラエティー番組は論外です」

「いいぞ、もつと言ってやれ！」

「その点、準さんは立派です。寝起きのたびにパンツの前をカピカピにしても決してくじけません」

「そうだ、俺を見習……って、どさくさに紛れて人の私生活を捏造すんな！」

思春期男子なら実際にありがちなアクシデントではあるが、それが実話であろうと作り話であろうと、そういった実態を同じく思春期の女子に知られるのは好ましくない。偏った知識を嬉々として披露したがる守り神様にも困ったものだ。

それに、二三香だけならまだしも、未波までこの場に揃っていたら――。想像しただけで、言いようのない悪寒に襲われる。

「早とちりして悪かったわよ。それに、今の話で確信が持てたわ」

二三香が半ばふてくされたように言った。

「どういうことですか？」

「ルイちゃんに手を出すくらいの度胸がある人に限って、パンツの前をカピカピにするなんて失態は考えられないでしょ？」

ぶはっ！

飲みかけの激甘ミルクティーが気管に入り、準は盛大にむせた。

「大丈夫？」

それはこっちの台詞だと即座に言い返してやりたいが、咳き込んで言葉にならない。見かねたルイが席を立てて背中をさすってくれる。

ここ数日で『二三香』冷静で頭の回転が早い委員長タイプ』というイメージを無意識に作り上げてしまっていたが、早々に認識を改めておく必要があるそうだ。言動は冷静沈着そのもののなのに、いかにせん思考があさっての方向に弾け飛んでいる。単なる偶然か、そ

うでなければ、ほんの一過性のものであつて欲しいと願わずにはいられない。

「話を戻しますが、私と準さんは半藤の真意を是が非でも本人の口から吐かせる。その上でストーリーカー行為をやめる意思がないと判明したら、問答無用で消えてもらう。こんな流れでよろしいでしょうか？」

「問題ないと思う。それにしても、意外とシンプルにまとまるものなんだな」

「作戦の主軸は分かりやすいに越したことはないわ。あとは細かい注意点を肉付けして、各自がそれぞれの動作・手順を把握すれば完璧ね」

「とりあえず、二三香さんは店から出る時は別行動ですね。人通りだけは無駄に多いですから、特に隠れたりする必要もないでしょう」

「半藤を飛ばすタイミングはどうすればいいかしら？」

「俺かルイのどちらかが合図を送るから、それに合わせて頼む。話の流れによつては、それっぽい演出も可能かも知れないし……」

「演出……ですか？」

「ああ。半藤が大人しく白状するしないに関係なく、最終的には尾け回すのをやめてもらわないと話にならない。まあヤツのことだから、言つたところで聞き入れてなんかくれないだろう。そこで晴れて二三香の出番が来るわけだけど、その前に一言挟むんだ。『残念だが、お前にはここから消えてもらう』ってな。これは俺よりルイがやった方が効果的だと思う」

「なるほど。そう前置きしておけば、私が私自身の能力で半藤を飛ばしたようにしか見えませんね」

「だろ？ 条件3 に関しては後で考えるとして、とりあえず今回は見送る。二三香は半藤の送り先だけ考えといてくれないか？」

日本国内なら那覇空港でも二条城本丸でも、どこでもいい」

「一晩でも時間を稼げれば十分！ とばかりに、準は氷の溶けかかったお冷を胃袋に流し込んだ。」

第五章 作戦会議は下ネタがいっぱい！ #7

会計を済ませて店を出る間際、準は携帯を取り出して開いた。が、何をするわけでもなく、すぐに閉じてポケットにしまう。

7時54分。

終電が出るまで5時間弱。

つい1ヶ月前まで実家暮らしだったこともあり、こんな時間まで外にいる習慣はあまりない。陸上部を引退後、受験前の半年だけ塾通いをしていた頃は帰りが9時過ぎになることもあったが、基本的に家で私服に着替えてから行っていたので、連続外出時間としては（遠足や修学旅行などを除けば）確実に最長記録を更新していることだろう。

「準さん、いましたよ！ あの駐輪場の影に隠れてます」

ルイが向かいの有料駐輪場を盗み見ながら告げる。

「まだいたのか……」

忌々しげな言葉とは裏腹に、準の目は半分笑っていた。

ここで半藤がいない、つまり退散してしまったとなれば、先ほどのストーキング行為について詰問することがなくなる上に、二三香まで呼んで考えた作戦も無駄になってしまう。

しかし、半藤はこちらの思惑どおり居座っていたばかりか、よりによって逃げ場のない駐輪場に潜んでいる。ルイと2人で挟み撃ちにしてみれば言い逃れもできまい。あいにくカツ井は手元にないが。

と、二三香が何食わぬ顔で新秋津駅の方から歩いて来るのが見えた。そのままプレハブ小屋のような管理室の横に陣取ると、「いつでもOKよ」とアイコンタクトを送ってくる。

「よし、行動開始だ」

「はいっ！」

準はそう言うのと左へ、やや遅れてルイは右へとそれぞれ散開した。

そのまま猛ダッシュで駐輪場へ突入する。元々『小さい・狭い・乗り換え客しか通らない』の三重苦を抱えていることもあり、2ヶ所しかない出入口を塞いでしまえば、あとは袋のネズミも同然だ。

半藤は一瞬戸惑ったような表情を浮かべたものの、小柄な外見から腕力で御しやすいと判断したのか、ルイの方へ向かって走り出した。

「半藤！　そこまでです！」

ルイの怒声が響く。

（ぶつかる……！）

反射的に目を閉じた次の瞬間。

鈍い金属音と共に、半藤の呻き声が準の耳朵を打った。そして――

「準さん、やりました！」

ルイの底抜けに明るい声が聞こえてくる。

無事だったようだ。とすると、今の音は……？

準はおそろおそろ目を開け、絶句――そして納得した。

おそらく、ぶつかる寸前にルイの捨て身タックルを食らったのだろう。半藤は駐輪場の柱に頭を強打して悶絶していた。頭を手で押さえているのを見る限り、辛うじて意識はあるらしい。準はさっそく半藤に詰め寄る。

「さっきから俺たちを尾け回してるみたいだが、どういっつもりだ？　『もう手を出さない』ってのは口から出まかせだったのか？」

「私が……そう簡単に約束を破る男に、見えるかね？」

声は弱々しくかすれているものの、キザったらしさ嫌味っぽさは健在のようだ。

「さあ、どうだろうな。少なくとも今の俺たちにはそう見える」
準も負けじと冷ややかな言葉を選んで返す。

「ふん、言ってくれるじゃないか……。しかし考えてもみたまえ。私の約束は、君たち自身が平穩無事に暮らすことで、ある意味果たされる。だが、君から提示してきた約束はどうだ？　私を含め客観的に判定できる第三者がいない限り、正しく履行されているという

証明にはならない。違つかね？」

「それは……」

準は思わず返答に詰まる。こればかりは半藤の言うとおりだ。

「では、学園を出てから延々と尾け回していたのは、私ではなく準さんの行動を監視するためだった、と」

「平たく言えば、そういうことになります」

声の主がルイだと知った途端、最敬礼モードになる半藤。

「無駄を承知であなたに通告します。今後一切、こういうことはやめなさい」

「なぜ守り神様はこの男の肩を持たれるのですか？ 私とて、かつて守り神様を60年以上に渡って捨て置いた武者小路家の末裔。守り神様に好かれようなどとは到底考えておりません。しかし、いつ寝込みを襲うとも知れない凡人風情と一緒にいたがる守り神様のお考えが、私には分らない……」

「寝込みを襲われても構わない、むしろ襲われたいと思うからですよ。改めて言わなくとも意味は分かりますね？ そもそも、誰かを好きになったり愛したりするのに理屈を求めること自体が無意味なんです」

さらりと過激なことを言っただけのルイ。準は準で、二三番に聞かれてやしないかと気が気ではない。

「ま、俺は何があっても手は出さないけどな」

「準さんの意地悪……。ところで半藤、あなたはそれだけの怪我をしてもなお私たちを尾け回すつもりですか？」

ルイはそう言うと、半藤の顔を覗き込んだ。特に目立った傷はないが、だからと言って油断はできない。

「念のため医者に見せた方がいいかもな。ルイ、どうする？ 連れてってやるか？」

「そうですね。少しの間、病院のベッドで頭を冷やしてもらいましょう」

「守り神様、お手数をおかけして申し訳ありません……」

ついに半藤が白旗を上げた。

「よし、決まりだな！」

準は管理室の横に待機している二三香のもとへ走る。

「予定変更だ。ここから少し離れてて大きめの病院、どこか知らないか？」

「病院？ まさかルイちゃんが怪我でも……っ!？」

「ま、待て！ 怪我をしてるのは半藤の方だ」

奥へと駆け出そうとする二三香を、準はあわてて押し留める。

「どういうこと？」

「……俺とルイが別々に突入したところまでは見てたよな？」

「うん。じろじろ見てると怪しまれるから、はつきりとは確認できなかったけど……」

「ルイがタツクルで半藤を突き飛ばしたんだ。ヤツは柱に頭をぶつけて伸びちまつてる。打ち所が悪いと最悪の場合……」

「意識はあるの？」

予想外のアクシデントに、二三香の声にも緊張が走る。

「幸い、な。病院送りに関してはヤツも了承してるし、あの様子では検査やら何やらで少なくとも一晩は出て来れないと思う。とりあえず来てくれ」

二三香を伴って戻ると、半藤は先ほどと同じ姿勢で横たわっていた。

「まだ痛むか？」

「ああ……さすがに鉄骨と渡り合えるほど石頭ではないのね」

「それだけの減らず口を叩けりや安心だな。さっそく今から病院にワープするけど、ひとつ注意点がある」

「何かね？」

「絶対に目を開けるな。ほんの一瞬とはいえワープ中の視覚情報の負荷は半端じゃない。下手すりゃショック死する可能性もある」

「——承知した」

（おいおい……）

一歩間違えれば嘘だとバレかねないギリギリの誇張表現をしたつもりだったが、半藤の返事は実に素直で、準は拍子抜けした。

第五章 作戦会議は下ネタがいっぱい！ # 8

「それじゃルイ、頼む」

元の緊迫した表情でルイの名前を呼びながら、二三香に手で合図を送る。緊急事態とはいえ、やはり第三者の存在を明かすわけには行かない。

二三香が準とルイの手を握る。

続いて、ルイが半藤の肩に手を乗せた、次の瞬間。

半ばBGMと化していた商店街のざわめきが途絶え、外灯に冷たく照らされた芝生が視界に飛び込んできた。あまりの静けさに、周りの空気も冷たくなったような気がして、準は思わず身を震わせる。降り立った——と言うより、二三香がピンポイントで設定した移動先は、どこかの総合病院の裏手だった。同じ裏手でも秋津学園の部室棟裏と違って、湿っぽさや暗さはほとんど感じられない。

準は二三香が物陰に隠れたのを確認すると、

「もう目を開けてもいいぞ」と半藤に呼びかけた。

「……ずいぶん早いな」

「これが守り神たる私の力です。せいぜい驚くがいいでしょう」

ルイは強硬な姿勢を崩すことなく言い放つ。「ふふん！」とばかりに小鼻を膨らませて。ドヤ顔に慣れておらず、精一杯の虚勢を張っているのが丸分かりだった。

「立てるか？」

「ああ、何とか」

そう言う後半藤は、よろよろと立ち上がった。——が、どうにも安定しない。頭をぶつけた衝撃で軽い脳震盪を起こしたのか、目は半分ほど開けるのが限界といった様子で、軸足もふらついている。

「とりあえず受付までは連れて行きますが、そこから先は1人で行ってもらいますよ。検査や応急処置の現場に素人がいても邪魔なだけですから」

言葉を飲み込んだまま咳払いをすると「今なら食べ放題に行っても
余裕で元を取れそうだな」と一人ほくそ笑んだ。

エピソード

「いよう、お二人さん！」

病院の玄関先にはおよそ相応しくない、妙にハイテンションな声が響き渡る。

顔を上げると、目の前に未波が立っていた。どうやら、半藤を受付まで案内している間に、二三香が瞬間移動で連れてきたらしい。

「半藤は無事に送り届けて来ました」

未波の背後に立っている二三香に、ルイはミッション完了を告げる。

「お疲れ様。これからどうするの？」

「晩飯まだなんで、とりあえずどこかで食事でもして帰ろうかと思ってる」

「だったら、ちょうど未波もいることだし、私が半藤を飛ばすつもりだった場所に行ってみない？」

二三香の目がいたずらっぽく細められた。

「準は本能的に察知する。これは何かを企んでいる目だ。」

「いい加減、腹が減って1歩も動けん」

とりあえずの抵抗を試みる。しかし、二三香は引き下がらない。

「もちろん食事もできるわ。安くておいしい店もたくさんある所だし」

と、その時。

「おいしい店？ 行きたいです！ ものすごく行きたいです！

想像するだけでイっちゃいそうです…… あッ——！」

突然、ルイが二三香の提案に食い付いたかと思うと、派手に悶絶し始めた。

「いきなり18禁モード発動してんじゃねえよ」

一瞬だけ呆気にとられた準だったが、すぐに気を取り直し、ルイの後頭部に軽く水平チョップを入れる。これが神様でなく人間――

たとえば実の妹や従姉妹だったら、ハリセンで思い切りどついてやるところだ。

「だって安くておいしい店ですよ？」

「そりゃ俺だって行きたいよ。ところで二三香、そこは日本……なんだよな？」

ルイが再び暴走しないよう宥めながら、おそろおそろ確認する。ここ数十分の二三香の言動を考えると、正直言って油断ならない。とはいえ『安くておいしい』というフリーズに抗い難い魅力があるのも事実だ。それこそ準の理性に反し、腹の虫が解放軍を結成して暴動を起こしてもおかしくないほどに。

恩恵にあずかれるのは、何も空腹中枢だけに限らない。財布にしても、敬愛してやまない諭吉さんや樋口女史や野口博士、滅多にお目にかかれない紫式部との別れが先延ばしになれば、涙を流して喜ぶことだろう。

そう考えると、ルイが一瞬だけ垣間見せた痴態は、味と量と値段の暴力に虐げられた生物の哀れな一面に過ぎないのかも知れない。もつとも、値段の暴力と相対すべく矢面に立つのは、ルイの宿主である準の役目だったりするが。

「もちろんよ。ハワイなら2歳の頃に家族旅行で行ってるみたいなんだけど、さすがに覚えてないわ」

「そうか。ならいいけど」

海外渡航経験のない準は、ほっと胸をなで下ろす。

もつとも、二三香とてパスポートの期限はとうに切れているだろうし、財布の中身だって日本を出てしまえば換金でもない限り紙屑ないし鉄屑同然だ。冷静に考えれば考えるほど取り越し苦労だったことが分かり、準はさらに脱力した。

「なるほど……ルイにゃんが食欲と性欲を同時に持て余すと、あんなふうになるんだね」

不意に未波の呟きが耳に入った。

それを聞き付けたルイが抗議の声を上げる。

「人を野蛮なケダモノみたいに言わないでください！」

いつもの人を食ったような冷静さはどこへやら、ルイの頬はトマトのように赤く染まっていた。

「いや、ケダモノだろ。どう見ても」

「もう！ 準さんまで何なんですか！ 『自覚がないのは、ある意味幸せな証拠だ』みたいな顔して！」

抗議の矛先は準にも容赦なく向けられる。

「人の心の中を勝手に読むなよ」

「私にはそんな能力ありません——って、本当にそう思ってたんですか！？ ひどい！ ひどすぎます……」

「いいじゃん、ケダモノでも。最近、自己主張のできない子が増えてるって言うけど、その点ルイにゃんはえらいと思うよ？」

——ルイの場合、自己主張がはつきりしていると言うより、欲望や煩惱がだだ漏れなだけではなかるうか。そうツツコみたい衝動に駆られる。

「はい、みんな注目！ 積もる話もあると思うけど、まずは腹ごしらえしましょ。聞き分けのない悪い子は置いてっちゃうわよ？」

クールビューティーなイメージを取り戻しつつあった二三香の表情が、Sっ気全開のドヤ顔へと変貌を遂げた。

「じよ、冗談だろ！？ 勘弁してくれよ。ここがどこかも分からないに」

「お腹すきましたー！」

「よし、こうなったらルイにゃんの好きな物、何でもおごっちゃうけんね！」

下から順に二三香↓準↓ルイ↓未波と、あわただしく右手が重ねられる。

「全員揃ったわね？ じゃ、行くわよ！」

次の瞬間。

定点観測動画がリピート再生で冒頭に戻るのを再現するかのよう
に、準・ルイ・未波・二三香は忽然と姿を消したのだった。

エピソード（後書き）

第一部はここで一区切りとなります。

9月21日よりシリーズを改めて第二部を先行投下していきますので、引き続きお楽しみいただければ幸いです。

プロローグ（前書き）

第一部あとがきにて、小説番号を改めて投稿すると書きましたが、投稿文字数にまだ余裕があるため、サーバーへの負担軽減も兼ねて続編扱いで投稿することにしました。

ややこしい流れになってしまい申し訳ありません。

プロローグ

(不公平だ——!!)

声にできない叫びが準の脳内を埋め尽くした。

声にならないのではない。とある事情により、声にできないのだとある事情とは？ 大きくふたつに分けられる。

その1、声を出すと喉が痛む。さらに、自分の声による音波振動で、頭も巻き添えを食って激しく痛む。

その2、ここは曲がりなりにも集合住宅である。不必要な大声、これ即ち近所迷惑。

このふたつを『事情』などと他人事のようなスタンスではなく、準を苛む事象として解釈すれば『高熱と激しい頭痛を伴う風邪』という表現に置き換えられる。

——とにかく、頭が割れるように痛い。

桜は粗方散りかけ、4月も中旬に差し掛かるうかという時期に、まさかの風邪。何ともやりきれない話だが、心当たりがないわけではない。

話は3日前、金曜日の夜に遡る。外見年齢13歳の少女に扮した、廃神社の守り神・ルイを執拗に狙う半藤はんとうを病院送り(手を下したのは主にルイと二三香ふみかだが)にした直後のことだ。

「ちようど未波みなみもいることだし、私が半藤を飛ばすつもりだった場所に行ってみない？」

夕食がまだなので帰りたいと言う準とルイに、二三香はそう提案した。準としては、いったいどこに連れ回されるのかという不安があるのだ、今ひとつ乗り気になれない。しかし「安くておいしい店もたくさんあるんだから！」と二三香の但し書きが付くやいなや、ルイが話に乗ってしまった。

かくして意見は3対1となり、準も「財布にやさしい食事ができるならいいか」と渋々了承したのだが……。

結論から言うと、二三香の提案で入った店は味も量も価格も申し分なかった。カニや大トロや霜降りサイコロステーキが食べ放題で980円など、破格も破格、滅多にあるものではない。そういった意味では、財布だけでなく胃袋にもやさしいチョイスだったと言える。

が、体に対しては別だったと言わざるを得ない。何が体にやさしくなかったのかと言うと……主に現地の気候風土だ。

二三香に連れられて瞬間移動した準の目に飛び込んできたのは、中世ヨーロッパの王侯貴族のような服を着て優雅にウイスキーを傾ける中年の男をデザインした看板だった。大通りの交差点に面するビルの壁面の、実に半分近くを占有しているので、この上なく目立つ。

（それにしてもこの看板、どこかで見覚えがあるような……）

そこはかとなない既視感を覚えつつ、屋上に鎮座する一際大きな看板へと視線を移し――準は絶句した。

「二三香、ひとつ聞きたいんだけど」

「何かしら？」

「あの看板に表示されてる数字、あれって気温だよな？ ここの」

「そうよ」

「――たったの4 ってどういうことだ？」

天気予報風に言えば3月上旬並みの気温だ。具体的な数字を目にしたことで体が周囲の肌寒さを感じし、途端にガタガタと震え始める。

「まー、この時期じゃこんなもんよね。曲がりなりにも北海道だし」

「ほ、北海道!？」

「嘘だと思っなら、携帯のGPSで確認してみるといいわ」

二三香の言葉に従い、準はごそごそとポケットから携帯を取り出す。位置情報検索のアプリを立ち上げ、現在地を表示させると――

「札幌市中央区南四条……だと？」

「そついうこと。ちょうどこのあたりは世のおじさま方の聖地とし

て名高い？すすきの？の一角ね」

「聖地、ねえ……」

一見したところ、飲み屋やキャバクラがひしめく、ただの繁華街のような気がするが。

「これまた派手に移動したねー。いやー、たまげたたまげた」

呆氣にとられて周囲を見回していた未波が初めて口を開いた。

「二三香さんの能力をもつてすれば当然です。彼女の今後の経験次第では、太陽の黒点を間近で見たり、新春恒例の箱根駅伝を土星の輪っかの上で開催するのも夢ではありませんよ！」

「いくら優秀な宇宙飛行士でも、水星の公転軌道より内側に入ったら死んじゃうよー？」

ルイの謎解説に、未波から至極真つ当なツツコミが入る。準も顎に手を当てながら、

「土星の輪っかの上で箱根駅伝つても、なかなかシユールな光景だな。もつとも、あれを1周するとなると、正月の三が日をフルに使い切っても間に合わないだろうけど」

「渡瀬君。それ、土星に行った時点で箱根駅伝じゃなくなってるから」

——と盛大に話を脱線させながら、冷たい外気に晒され立ち尽くすこと数分。さらに15分近く街中を歩き回って店に着く頃には、体の芯まですっかり冷えきっていた。

食事を終えて店を出た後も、他愛のない話題に花を咲かせながら札幌の街を練り歩き、二三香の瞬間移動で秋津に戻ったのは10時半過ぎ。

それからのことは、準自身もはっきりとは覚えていない。おそろく疲れが限界に達していたのだろう。シャワーを浴びて着替えるなり、ベッドに滑り込んで泥のように惰眠を貪った。

日付は変わって土曜日。

準は特に寝坊することなく、約束の5分前には、ルイを連れて

秋津駅前に着いていた。前日の一連のドタバタ、それに伴って積もりに積もった疲労感が嘘のように。

限られた予算でルイに合うものが見つかるかどうか不安ではあったが、未波・二三香コンビのサポートでセール品を無事にゲット。店のロゴ入り紙袋を大事そうに抱え、レジを後にするルイの笑顔に、一同の視線は釘付けになる。

「これだよ、この笑顔だよ」

「み、未波じゃないけど、この初々しさは反則だわ」

感嘆とも悶絶とも言えぬ息遣いで胸の内を吐露する未波と二三香。「一時はどうなるかと思ったけどな。ここまで喜んでもらえる保護者——つと、もとい宿主冥利に尽きるってもんだ」

保護者と言いかけたところで、未波・二三香から「ルイちゃんがあんただけのものだと思ったら大間違いなんだからね！」とでも言いたげな視線を向けられ、準はあわてて訂正する。

このメンバーの中では当初、二三香がルイに対して冷静な姿勢を維持する唯一の存在だったのだが……。哀しいかな、今や未波ともども忠実なるルイ信者へと、順調に変貌を遂げつつある。いつの世も、大人は子供に弱いものらしい。

ともあれ、当面の生活に必要な服がひととおり揃ったということは、準にとつての土曜日は8割方終わったに等しい。

「それじゃ一旦秋津に戻りましょうか」

二三香の一言を合図に、それぞれの手を繋いで瞬間移動のための『儀式』を執り行う準・ルイ・未波。

瞬間移動の能力を持つ二三香も含め、全員が一斉にワープするには互いが接触状態になければならない。能力を二三香に付与したルイ曰く、触れ合うのは服の裾でも靴でも問題ないらしいのだが、何度が移動を繰り返すうちに『触れるのは手もしくは肩』という不文律が自然と出来上がっていた。至極シンプルに解釈すれば『それっぽさの演出』を狙ったことなのだろう。

……とはいえ、この一連の動作に、準は未だ緊張と躊躇いを禁じ

得なかった。どうしてもワントンポ遅れが生じ、そのたびに業を煮やした3人に手首ごと驚掴みされるのもお約束の流れになりつつある。幼稚園・小学校・中学校と、良くも悪くも男同士でしかつるんで来なかった過去を振り返れば、当然の結果と言えるのだが――。

準の手首にマリリン・モンローも真つ青のくびれができる日も、そう遠くないかも知れない。

「準備はいいかしら？ 一応人目に付かないように、学園の駐輪場に飛ぶわね」

「いつでもどうぞ」

準たちを代表して、ルイがGOサインを送る。

全員が一斉に目を閉じ、ルイの肩に二三香の手が重なれば準備完了だ。

と、次の瞬間。どことなく間延びしたレゲエ調の店内BGMが途絶え、激しい雨音と雷鳴が耳朵を打った。

4月上旬ならではの冷気と、服や髪が肌に張り付く感触で直感的に悟る。どうやら、にわか雨に当たってしまったらしい。

反射的に両手で頭をガードした二三香が喚く。

「ちよっと、どうなってるのよおお！！」

「二三香、教室！ 教室に避難しようよ！」

「未波さん、グッジョブです！ さ、早く中へ」

未波が下したとっさの判断に、いち早くルイが同意した。いずれにせよ、このまま手をこまねいて雨に打たれ続けるのは得策とは言い難い。

ふと、ルイの胸元に抱えられた紙袋が視界に入った。買ったばかりの服が、1度も袖を通すことなく洗濯機行きになる事態はなるべく避けたい。準も雷鳴が途切れた隙について呼びかける。

「二三香！」

「……了解」

二三香の返事とシンクロするかのように、青い白い閃光が走る。次の瞬間、ミキサーでフィルター処理を施したかのように、土砂

降りの雨音が低く靄のかかった水音に変化した。

ここまでの映像を脳内でフルハイビジョン再生し、準はひとつの結論にたどり着く。

未波と二三香には申し訳ないが、今日は大事を取って休ませてもらおう。

高熱で蒸発寸前の頭をなるべく揺らさぬよう、そつと体を起こして携帯を手に取る。仰向けのまま話せば楽なのだが、それでは今ひとつ病人らしさが伝わらない。電話越しとはいえ、やはり演出は大事だ。

「はい、秋津学園でございます」

4回目の呼び出し音の後、中年にさしかかったあたりの女の声が耳朵を打った。とりあえず無駄に声の大きい体育教師に当たらなくてよかったと、準は胸をなで下ろす。

「1年3組の渡瀬ですけど、塩崎先生が初島先生ついでお願いします」

「1年3組の渡瀬君ね。ちょっと待っててくださいね」

中年教師はそう言うのと、どうやら近くにいらっしゃるらしい初島に「初島先生」、先生のクラスの渡瀬君からお電話入ってますよー！」と声をかけた。このような場合、すぐに保留にするのがマナーとしては正しいという話を聞いたことがあるが……頭痛に苛まれている今は逆にそれがありがたい。

程なくして「もしもし」と初島の声が聞こえてきた。

「おはようございます、渡瀬です」

「ああ、おはよう。朝からどうした？ ひよつとして風邪か？」

「ビンゴです。土曜の昼過ぎに通り雨に当たっちゃいました……」

「あー、ありやすごかったなー。そうそう、風邪と言えば塩崎先生も『今日は休む』って連絡があったよ。何でも、眩暈がひどくて動けないらしい」

「眩暈、ですか……あの、他に何か聞いてませんか？」

湧き上がる嫌な予感——と言うと語弊があるが、妙な胸騒ぎを覚

え、準は駄目元で初島にたずねる。

「いや、特に聞いてないな。電話を受けたのは乃木先生だし。ほら、うちのクラスの化学を受け持ってる——」

「そうですか……」

眩暈の他に何かしらの異変を訴えているようであれば、ルイから付与された能力が発動している可能性が高いのだが……。結局、体の不調を訴えている以上の情報は得られず、準は少し落胆する。

「とりあえず渡瀬君は病欠、と。久坂さんくさかと妹尾せのおさんには俺から伝えとくよ。明日は出て来られそうかな？」

「そうですね。ちよつと微妙なところですけど……全力で治します！」

精一杯の虚勢を張ってはみたものの、準の心はマジで壊れる5秒前だった。割れんばかりに痛む後頭部、いくら水分を摂っても潤う気配のない喉。ポジティブに構えていられる要素など何ひとつない。

「まあ無理しない程度にな。それじゃ、お大事に」

「すみません、失礼しま——」

そう言いかけた瞬間だった。

受話器を机に落としたような衝撃音と共に、

「初島先生、しっかりしてください！」

「誰か救急車——いや、保健室から担架を！」

という慌しいざわめきが、準の鼓膜と三半規管を大きく揺さぶった。反射的に携帯を遠ざけたはずみで、通話終了ボタンを押してしまっ。

（何だったんだ、今の……？）

周りの教師が初島にかけた言葉から推測する限り、初島は目に見える形で発病ないし負傷、あるいは卒倒したと考えるのが妥当な線だろう。しかし『救急車』が一拍の間を置いて『保健室の担架』と言い直されているのがどうも気になる。症状そのものは、よく見ればさほど重篤ではなかった、ということなのだろうか？

必死に思考を巡らせてはみるものの、最初の衝撃音をまともに聞いてしまったダメージはあまりにも大きく、準の意識は再び暗い闇

の彼方へと沈んでいった。
（助けてくれ、ルイ……）

第一章 悪夢のち握手時々あくび #1

「それでは、全会一致につき——渡瀬準を学級副委員長より更迭する」

聞いているだけでも静かに底冷えのするような声が響いた。

感情が嵐のように錯綜する頭の中とは裏腹に、顔ひとつ上げられないまま、鉛のように体が硬直する。シヨックと言うより、ほとんど絶望に近い薄笑いが無意識に浮かび、

「冗談、だろ……？」

言葉になっっているのかどうか、もはや判断もできない。操り人形さながらに頬が痙攣しているのが分かる。

準をここまで追い詰めているのは、今投げかけられた言葉だけではない。むしろ、その言葉を発した人物の方に大きな比重が置かれていた。

教室よりも都心のオフィス街の方が馴染みそうなライトグレーのスーツ、際立った存在感や威圧感こそないが人目を引く長身、つかみどころなく波打った黒髪。1年3組の副担任・初島史郎が、黒板を背に氷の彫像のごとく立ち尽くしていた。担任の塩崎奈津も固い表情のまま、無言で傍らに控えている。

「久坂さん、妹尾さん、何か異論は？」

初島と何やらアイコンタクトを交わした塩崎が口を開く。

数秒の沈黙の後、椅子を引く音と共に二三香が立ち上がった。

「代表して私たちの見解を発表します。単刀直入に言うと、渡瀬君はクラス委員の器ではありませんでした。自分の意見を述べるところか、議題に沿った司会進行や問題提起すら人前でできないようではクラス委員として致命的です。今は『クラス委員とその他大勢』に分けることで何とかありますが、果たしてそれが社会に出てからも通用するでしょうか？ 私たちは、この決議に全面的に賛成します」

その瞬間、教室中が割れんばかりの拍手に包まれた。そこかしこで喝采が湧き起こり、

「これでうちのクラスも安泰だな」

「ええ。組織存続のためには、一般のメンバーより無駄な役員・管理職を切るのがセオリーだって初島先生も言ってたしね」

「俺たちも一応ひとつの組織だもんな」

「たかが学校内の一クラスと言えど例外じゃないってことよ」

「っーか、あいつは転校生だからって甘ったれすぎなんだよ!」

といった声まで漏れ聞こえてくる。

『四面楚歌』の四字熟語が、ふと脳裏をよぎった。

味方だったはずの陣営が敵方に回っただけでも精神的ショックは計り知れないのに、中立ですらなかった無関係層からも矛先を向けられては、もはや卒倒レベルだ。

一人一人の声が、徐々に聞き分けられなくなってくる。自己防衛機能による聴覚の麻痺か、はたまた数日前にも味わった貧血もどきの前兆か。しかし、不思議と不快感や不安は感じなかった。

いつそこのまま？落ちて？しまおうか。そう思えるくらいに、安心感すら覚えるほどの浮遊感が体を包み込む。先日の貧血もどきの際にも浮遊感があったが、感触としてはまったくの別物だ。強いて言うなら、今までは自由落下あるいは無限下降系の目眩だったのに対し、今回のそれは天空に向かって果てしなく上昇していくような、何とも晴れやかな気分だった。

——が、安息への旅路は、突然の激しい揺れによって無惨に寸断された。一瞬、地震かと思った準だが、すぐに誰かに見えない手で肩を掴まれ揺すられているような感覚に気づく。その証拠として、肩だけが人肌と摩擦熱でやたらと温かい上に、誰ひとり「地震だ!」と騒ぎ立てる者がいない。しかも、揺すられるたびに教室内のざわめきが遠ざかり、視界も少しずつ暗転していく。

やがて入れ替わるようにして、聞き覚えのある——しかし教室内には姿が見えなかった人物の声が耳朵を打ち始めた。その声は加速

度的に大きくなり、はつきりとした輪郭を伴って伝わってくる。

何かに駆り立てられるように、準の名前を必死に呼び続けているのは――

(……………ルイ……………?)

いつの間に閉じてしまったのか、反射的に瞼が開かれ、準は「う」と小さく呻いた。

「大丈夫ですか？ 派手にうなされてたようですが……」

無圧縮・無調整のステレオ音声を耳元で再生されたかのような鮮明さを伴い、ルイの声が耳に滑り込んできた。

「……………ああ、何とか」

自ら声を発することで体にかかる負担を確認するように、準は短く答える。

つい先ほどまで目の前で繰り広げられていた委員更迭劇は、どうやら夢だったようだ。

懸念していた頭痛がすっかり治まった代わりに、声を出すのも一苦労なほど喉が乾いていた。枕元に置きっぱなしで、すっかりぬるくなってしまったペットボトルのミネラルウォーターを左手で引っ掴み、キャップを開けるべく布団から右手を出す。

「あ。今湯呑みに移しますから、少々お待ちを……………」

ルイは半ば強引にボトルを奪い取るなり、ぺたぺたとコミカルな足音を立ててキッチンへ消えたかと思うと、程なくして湯呑みを片手に戻ってきた。

薄いピンクのパーカーにデニム生地の手パンという服装を除けば、その挙動は座敷わらしそのものと言って差し支えあるまい。

「ごめん。落ちる間際、無意識にルイの名前を呼んじまっていたみたいだ。ずっとこんなとこにいて退屈だったろ」

「本当にびっくりしましたよ。呼ばれたかと思いきや、準さんが携帯を握りしめて気を失ってるんですもの。私も若干熱っぽかったの、すぐに準さんの風邪のフィードバックが原因だと分かりましたけど。――背中、支えましようか？」

「サンキュー」

ゆっくりと体を起こし、差し出された湯呑みを一気にあおる。案の定、完全に室温に馴染んでしまっていたが、喉と頭を同時に覚醒させるには十分な効果をもたらしてくれた。部屋の中が闇に沈まない程度に薄暗いのもありがたい。

「もう何時になるんだ？」

「えっと……5時半を少し過ぎたところです」

「やれやれ、半日寝ちまったか……晩飯どうしようかな」

「まだ無理しない方がいいですよ。それに、5時半と言っても明け方ですし」

「な、何だつて——！？」

準はルイの言葉が信じられないとばかりに、開いたまま枕の下敷きになりかけていた携帯を手に取った。

たしかに欠席する旨を初島に伝えた時の頭痛は嘘のように治まり、体を起こせるまでに回復している。が、だからと言って丸一日眠り続けたことなど過去の記憶を総ざらいする限りでは、ただの1度もない。ルイの得意な冗談だと考えるのが妥当な線だ。

『PWR』と略語表記された電源ボタンを押し、ディスプレイを復帰させる。

眠っている間に受信していたメール2件（後で確認すると未波と二三香からだった）をひとまず無視して画面右上に視線を移し――

4月12日（火） 05時34分

――石化した。

準の携帯の時計は24時間表示だ。推測どおり夕方であれば『17時34分』と表示されているべきで……さらに、完全に変わってしまったっている日付が、無言の圧力でもってルイの言葉が真実であることを告げていた。

第一章 悪夢のち握手時々あくび #2

「この時間じゃ晩飯じゃなくて朝飯の心配しなきゃならないな」

「熱の方はもう大丈夫なんですか？ 念のため計っておきましょう」

「そうだな……」

ルイに言われるまま、体温計を脇に挟んで再び横になる。

半日に及ぶ頭痛との闘いで、背中が額がじつとりと汗ばんでいた。食事の支度に取りかかる前に、軽くシャワーでも浴びたい気分になる。どうせ、この病み上がりの身では、いつものようなメニューは到底作れまい。

そんなことを考えているうちに、計測完了を知らせる電子音が鳴り響いた。すかさずルイが体温計を抜き取り、

「37度2分ですか……大人しくしていれば大丈夫でしょうけど油断は禁物ですよ？」

「分かってるよ。とりあえず今日の体育は見学する」

第二次反抗期の子供がするように、半ば投げやりに答える。

幸運にも、今日の体育は準の苦手な柔道だった。元運動部員（陸上部）のプライドなどとうに捨ててしまったか、あるいは初めからなかったかのような見学宣言に、安堵の笑みをこぼすルイ。

準の柔道経験は、後にも先にも中学時代の体育の授業だけだ。手本どおり受け身をとっているにも関わらず、背中を打ちつけられるたびに胃がひっくり返りそうになり、もはや相手より吐き気との闘いだった記憶しかない。自分の三半規管を憎んだこともあったが、生まれつき乗り物酔いをするような体質ではないので、結局のところ因果関係は（あくまでも準の中では、だが）謎のままになっている。

「さて……」

病み上がりにかこつけた逃げ口上に心の中で区切りを付け、準は

ゾウガメのように重々しくベッドから這い出る。足の裏に伝わる、フローリング特有のひんやり感が目覚めをさらに加速させ、エンジン起動の瞬間さながらに体が震えた。

「あの、どちらへ？」

ベッドの横にちょこんと体育座りしたルイが顔を上げて尋ねる。

「シャワー浴びてくる。寝汗でベタついて気持ち悪いし、寝癖も直しとかないと」

無意識に何度繰り返したか分からない寝返りと地球の重力で、準の前髪は盛大にハネていた。これと言って特徴のない普通の髪型と比較すれば、なかなか前衛的なヘアスタイルではあるが、やれ高校デビューだのイメチェンだの微熱少年だのと未波に絡まれるのはまっぴら御免だ。

「さようですか。では、お部屋温めておきますね」とルイ。

ありがたい申し出だったが、言い終えぬうちにルイの口元が怪しく歪んだのを、準は見逃さなかった。

「ルイ」

「……はいつ？」

一拍の——しかし、聞く者が不信感を抱くには十分な間の後で、大きく上ずった返事が寝室に木霊する。準は深く息を吸うと、静かに切り出した。

「俺と……ひとつにならないか？」

「——！！」

ルイの動きがぴたりと止まった。そして、沸騰寸前のやかんのように顔を上気させ、

「ついに……ついに、ご決心いただけたんですね!？」

第一志望校の合格通知を手にした受験生よろしく、胸の前で小さくガッツポーズまで決めている。

準もまた、悲願を達成した娘を温かく見守る父親のような眼差しで、

「——何の話だ？」

その瞬間、ルイの頬が引きつった。やがて、徐々に血の気が引いて青ざめていく。

「えっ？ い、今たしかに『ひとつにならないか？』って……ま、まさか——」

「さすがルイ、理解が早くて助かる。そういうわけだから——戻れ！」

「なんと御無体な！ そんな形でひとつになっても、私は嬉しくな……あッ——！？」

断末魔の叫びを残し、ルイの体は音もなく準の体に吸い込まれていった。

再び1人になった準は、半開きのカーテンを完全に開け放つと、誰にともなく呟く。

「安心しろ。シャワー浴びて着替えたら、また出してやる」

第一章 悪夢のち握手時々あくび #3

2日ぶりに拝む太陽は、準が予想していた以上に眩しかった。うだるような暑さを伴うのはまだまだ先のことだろうが、病み上がりの身には少しばかりこたえる。

早く日当たりの悪い廊下側の席に腰を落ち着きたい……。足を早めようと息を吸い込んだ次の瞬間、

「おはよう」

およそ朝のさわやかなイメージとは程遠い、背後から静かに忍び寄るような声が耳に飛び込んできた。

準が振り返るよりも早く、すぐ隣に回り込んできた声の主は、立ち止まるでもなく返事を待つわけでもなく、先へと進んで行く。

「か、神沢さん？」

挨拶を返すタイミングを完全に失った準は、戸惑い顔のまま仕方なくアサミの背中を追いかける。

「ところで——」

不意に、アサミがこちらを振り返った。

立ち止まる、あるいは速度を落とすといった予備動作は一切なく、顔だけが機械仕掛けのように180度動いたので、準は完全に虚を突かれて後ずさる。いつだったか、秋津駅の改札前でルイに奇声を上げられた時のように、間抜けな声が漏れなかったのは不幸中の幸いだったかも知れない。そのまま歩を進めていたアサミとの距離は、再び不自然に空いてしまったが……。

「あれから、どう？ 部長に絡まれたりしてない？」

「部長？——ああ、半藤はんどうのことか。あいつなら金曜日の夜にさっそくやらかしてくれたよ」

「……詳しく聞かせてほしい」

白く透き通った——それ故に表情が欠けているようにも見える顔が至近距離に迫る。

やはり、アサミは何も知らなかったようだ。これで、半藤がアサミの目を盗んだ上で単独行動に出ていたことが、ほぼ証明された。

——が、因果関係を解き明かしたところで問題が解決するわけではない。準は、半藤に延々と尾け回されたこと、激怒したルイが半藤を突き飛ばして頭を負傷させたかも知れないこと、念のため二三香^かの能力で病院まで送り届けたことなどを洗いざらい話した。もちろん、準たちが守り神であるルイから能力を付与されていること、そのルイが分身として準に憑依（体内に吸い込まれているので？格納？または？吸収？と表現すべきかも知れないが）していることの説明も忘れない。

現状ではアサミも半藤も、ルイを準の相棒か同居人としか見ていない。目の前で準の体から突然ルイが這い出て来ようものなら、いくら冷静な彼らでも混乱することだろう。

もつとも、こんな話を真顔でしている自分も、はたから見ればとんだ眉唾野郎だが……半ば自嘲気味なため息と共に、準は言葉を区切る。

と、聞き役に徹していたアサミが、静かに口を開いた。

「自業自得。100パーセント部長が悪い」

苦笑まじりの瞳が、逃げ場を求めるように準から逸らされる。アサミにしては珍しく、人間味のある——長いこと抑え込まれていた感情が、本人の意思とは関係なく前面に押し出されたような表情だった。

「あれでも一応先輩なんだろう？ 怪我をさせた当事者が言うことじやないのかも知れないけど、心配にならないのか？」

「別に……。日曜日に一緒に出かけたけど、いつもどおりだった。大した怪我じゃなかったのかも」

「それならいいけど……いや、待てよ？ そうなると、また逃げ回る生活に逆戻りか」

どちらに転んでも、準にとっては気の重い話だ。漫画のように、頭をぶつけたショックで人格が変わったり、ルイに関する記憶をま

ること喪失したりしてくれば助かるのだが……。

「ひとつ提案がある」

マイペースに歩を進めていたアサミが、立ち止まるなり唐突に切り出した。準もそれに倣い足を止める。

「提案？」

「そう。連絡先、交換しよう。私も部長のそばに年中いられるほど暇じゃないし、万が一逃げられたら手の打ちようがない。緊急時のホットラインは必要不可欠」

未波・二三香との連絡先交換の際、ひどく狼狽して未波にからかわれたトラウマが、準の脳裏に一瞬フラッシュバックした。携帯に手を伸ばそうと反射的にポケットに突っ込んだ手が、マナーモードの振動を受けたかのように震える。たった2回（実質1回）の経験で要領を把握できるほど、準の神経は図太くなかった。

しかし、である。この件に関しては、当事者が全員生身の人間（顕現後のルイも含め）なだけに、ホットラインの出席は確かかつ突発的にやってくる。そもそも、合コンの締めに儀式的に行うようなアドレス交換とは意味合いからして違うのだから、恥じらいや後ろめたさを感じる道理は何ひとつとしてないはずだ。準は煩悩を二酸化炭素に乗せて吐き出すように深呼吸をすると、

「そうだな……そうしよう」

努めて冷静に、了承の意を伝える。

が、次の瞬間。準の？心の準備？は思わぬ形で梯子を外される格好となった。

「じゃあ、これが私の番号とアドレス。気が向いたら送って」

番号とアドレスが走り書きされたメモ用紙サイズの紙切れが、営業マンの名刺交換のように差し出される。

「え？ 赤外線は……？」

「私の携帯は赤外線通信に対応していない。5年以上前に買ったものだから」

アサミはそう言うと、制服の胸ポケットから携帯を取り出した。

およそ近年の高校生の持ち物とは思えないほど古めかしく角張ったデザインに、やたらと面積の狭い液晶画面。端末の背面には、赤外線ポートはもちろんカメラすら付いていない。5年どころか、下手をすれば10年近く前の機種では？ と、思わず疑いたくなるような代物に、準は「嘘だろ？」と小さく驚きの声を漏らす。

「私にはこれで十分。ちゃんとメールもネットもできるし、着信音だって16和音。フル充電しても半日持たないのがネックだけど……そろそろ買い換え時？」

「いやいや、1日持たなくなっただあたりで買い換えようよ。ってか、それだけ長く使ってるいやポイントが大分貯まってるだろうし、最新機種に拘らなければかなり安く買えるんじゃないか？」

16和音をドヤ顔で強調するアサミに思わず苦笑いを浮かべながら、さりげなくアドバイスを送る準。60年以上に渡って外界と遮断されていたルイでさえ、最新家電事情に関しては人並みの心得を持ち合わせているというのに……まるで、一昔前からタイムスリップしてきたかのようだ。

「珍しい？」

「少なくともその携帯に関してはな。珍しいというか、変わってるというか……驚くのは多分俺だけじゃないと思う」

「やっぱり……でも、何となく私にも分かる。私に対するみんなの視線は十中八九、普通じゃない」

「さすがに気のせいじゃないかな。誰しも慣れで使い古してる物はあるはずだし、持ち物のひとつが偶然古かった、っただけで人となりを判断しちまうヤツの方が、むしろ視野狭窄ってもんだ」

準は改めてアサミの姿を上から下まで凝視した。少なくとも服装や体格は、まさしく現代の女子高生そのものだ。

そんな視線の動きを察知したのか、アサミは悲しげに呟く。

「物や服に関係なく、私自身から普通の人とは明らかに違うオーラが漂ってるのかも。中学の頃、よく友達に言われた。『いつも自分の世界に入り込んで』とか『人形みたいだ』とか」

その声は弱々しく、しかし、低く抑えられたトーンに明確な不快感が滲み出ていた。

無理もない。表現こそ婉曲的ながら「不気味なヤツだ」と容易に解釈できるような言い方をされれば、誰しも少なからずショックを受けて当然だ。

「？夢を見る人形？と、みんな私を呼ぶ……か。まさに80年代だな」

準は無意識にアサミから目を逸らしながら、意識的に明るい声で呟いた。

「でも1人だけ、私のことを笑わなかった人がいる。それが部長。そして、たった今、もう1人増えた」

「たった今増えた、って俺のことか？」

「うん。ちよつと——いや、すごく……嬉しい」

アサミは小さく頷くと、こちらをじっと見つめてきた。

「そつか……それにしても、世の中にはデリカシーのないヤツがいるもんだな」

別に喜ばれるほど大したことはしていないはずなのだが……。面と向かってそんなことを言われると、正直言っただけさ。準はアサミの言葉に小さく相槌を打つと、見えない？敵？に悪態をついた。

普段冷静な人間が弱気になったり自虐的になったりするのを見るのは、精神衛生上あまりよろしくない。ルイにもある意味同じことが言えるが、特にアサミの場合は放っておくと、自分を見失ったまま風船のように消えてしまいそうなオーラが漂っている。

その点、何があるうと思考がブレる素振りすら見せないのが半藤だ。半藤がアサミを半ば強引に導く一方で、アサミが半藤を陰から支え、時には暴走を押し止める。一見アンバランスなように見えて、実はこの上なくお似合いのコンビなのかも知れない。

一定の結論を得たところで、準は話題を変えることにした。

「そう言えば神沢さん、10組の委員長をやってるって前に言っ

たよな？ 実はさ、俺も3組で副委員長の片割れやってるんだ。クラス委員会議とかで顔を合わせるようなことがあったら、その時は改めてよろしく。人前に立つのに慣れてないんで、色々と苦労してるけど……お互いにがんばろう」

神沢さん、あんたは別にひとりぼっちじゃないんだぞ。そんなニユアンスを込めて言ってやると、

「こちらこそ、よろしく」

返事と共にアサミの右手が差し出された。

半藤を一撃で昏倒させるほどの猛者らしからぬ白い指先が、朝日を受けて眩しく光る。

準も同様に右手を伸ばし、互いの掌が触れた——その瞬間。

「お前ら、朝から青春するのもいいが遅刻しない程度になー」

「は、はい！」

「……すみません」

準側に若干ぎこちなさの残る握手は、生活指導顧問を兼任する化学教師・乃木のぎの一声で

無惨にも中断されたのだった。

第二章 教師たちのジレンマ #1

塩崎奈津は困惑と自己嫌悪に苛まれながら、やや遠慮がちに職員室の引き戸に手をかけた。

教師になつて初めての欠勤を経験したのが昨日。しかし、翌日の朝がこんなにも気まずく後ろめたいものだとは……。ある程度覚悟はしていたが、現実とはえてして予想の斜め上を行くのが常らしい。じつとりと嫌な汗が、掌と背中に滲む。

「おはようございまーす」

特定の誰にもなく機械的な挨拶をして、さつと室内を見回す。早朝会議で席を外している教師を除いて、出勤しているのはまだ5、6人といったところか。塩崎はその中に目的の人物を見つけると、鞆も置かずに直行し声をかける。――演技でも建前でもなく、まさに神妙そのものといった仕草で。

「飯沼先生、昨日はお手数をおかけしました」

「おや、塩崎先生。具合の方はもう大丈夫ですか？」

飯沼と呼ばれた男は塩崎の声に顔を上げると、年に数回しか会えない孫娘に接するかのように相好を崩した。

やや白髪まじりの七三分けに銀縁の眼鏡、おそらく170センチにも満たないであろう小柄な体躯。いかにも定年間近といったオーラが漂っていて、本当に孫がいてもおかしくなさそうなのが哀しいところだ。

しかし、どうにもうだつの上がない外見とは裏腹に、勤続30年を超えるキャリアはハリボテではないらしく、校長はじめ教職員や生徒からの信任も厚い。

塩崎もまた同じ英語教師として尊敬する相手だけに、今回の失態には、ただただ恥じ入るばかりだった。

「はい。お陰様で何とか……本当にすみませんでした」

こんなことなら、多少無理をしても体調が落ち着いた時点で出

て来るんだった。そんな後悔の念が頭の中で渦を巻く。

「いやいや、とんでもない。大事に至らなくて何よりです。そう言え、初島先生もだいぶ心配されましたよ。いつも一緒にいる塩崎先生がいなないせいか、顔色もあまりよくありませんでしたし」

3 年来の悪友にして、職務上のパートナーとも言える同僚の名前が唐突に出され、塩崎は一瞬表情を強張らせた。

「そうですか……分かりました。本人が来たら後で詳しく聞いておきます」

相槌とも独り言ともつかぬ言葉を返し、どうにか場を取り繕うと、
「ぜひ、そうしてあげてください。では、私は給湯室と職員玄関の掃除当番がありますので。失礼」

飯沼は「よつこらしよ」と立ち上がると、とても定年間近とは思えない軽やかな足取りで去ってしまった。手持ち無沙汰のまま、ぽつんと取り残される塩崎。飯沼に声をかけた当初の愛想笑いは跡形もなく消え失せていた。

「おかしいわ、どう考えても……」

昨日貧血を起こして倒れ伏した時よりも蒼白な面持ちで、静かに
呟く。

たしかに初島^{ついでま}は、女の自分から見ても神経が繊細なところがある。2人で飲みに行っても「生活のリズムが崩れるから」と徹夜を避けたり、漫画や小説の帯を捨てずに折り畳んで保管していたり、スポーツ中継よりも大河ドラマを好んで見ていたり。しかし、だからと言って塩崎がいなくなった程度で心身に不調をきたすような軟弱者ではないはずだし、頼りにされたことも教員採用の話を持ちかけた時以外は皆無に等しい。悲しいことに、こればかりは自信を持って断言できる。あるいは、昨日の自分と同様に奇妙な能力が初島にも発動していて――

（そんなバカげたことがあるわけじゃない！）

塩崎は亡霊のごとく忽然と脳裏に浮かび上がった？ 仮説？ を全力で否定した。こんな体たらくでは駄目だ！ とばかりに、両手で頬

を軽く叩く。

この1年間、周囲から「学生気分が抜けていない」と散々言われながら過ごしてきた。せめて表面上だけでも冷静にならなければ後輩の初島に（教師としては一応、だが）示しがないし、下手をすれば教え子からも笑われてしまう。

ふと、日々の激務ですっかりくたびれてしまった、去年の学級日誌が目に入った。当時は（と言っても、ほんの1年前だが）塩崎も新米教師ということで副担任のみの割り当てだったが、今年度から担任を務めるにあたり、参考資料として同クラス担任だった化学教師・乃木から譲り受けたものだ。

100円ショップで買ったブックエンドからそれを取り出し、気功師や超能力者が術をかけるように手をかざす。

——当然、日誌には何も起こらない。そもそも自分は超能力どころか手品もできないのだから？当然？と前置きすることすら逆に白々しいくらいだ。

（そうよ、自慢じゃないけど私は普通の人間なんだから！）

塩崎の苦渋に満ちた思案顔が、確信を得たような笑みに変わる。

と、次の瞬間。

何の動きも見せなかった日誌が、突如青白く発光し始めた。浮かび上がったページがめくれたりといった日誌そのものの物理的な動きは依然としてないが、じつと目を凝らして見ていると、破れたリシワが寄って傷んだ部分が徐々に修復されていくのが分かる。

やがて、油性マジックで書かれた乃木と塩崎の名前も、表紙の水色に飲み込まれるようにうつすらと消えていき——新品同様の、折り目ひとつない日誌が残された。再び手をかざすと、今度は消えたはずの2人のサインが復活し、元あった破れやシワが忠実に復元されていく。

（やっぱり駄目か……）

対象物の時系列を自在に操れる奇妙な能力は、完全に体に染み着いてしまったらしい。これはつまるところ、自分がすでに『普通の

人間ではない』ことの証明でもある。

しかし「どうして私が？」という感情は、不思議と湧いてこなかった。ほとんど確信とも言うべき心当たりがあるからなのだが――それを口に出すのは他の？当事者？が来てからで十分だ。確定事項か否かという形で心当たりには白黒つけるためには、むしろそうする他ない。

塩崎は力なく机に伏せると、当事者の1人にして、まだ来ぬ同僚の名を呟いた。

「史郎ちゃん、何してるのよ。早く来なきゃ駄目じゃない……。さもないとお仕置き確定よ?」

*

*

*

第二章 教師たちのジレンマ #2

眼鏡を日常生活の相棒として迎え入れたのは何年前だったろう。

初島史郎がふとそんなことを考えたのは、自分と同年にして教員生活6年目の数学教師・小村と、すれ違いざまに挨拶を交わした時だった。

眼鏡族同士ということで、2月の新任研修の頃から懇意にしている間柄だが、小村の特徴は、遠目にも分かるほど分厚いレンズのメガネに集約されていると言ってもいい。フレームこそ洒落っ気のある、そこそこ無難な造形をしているものの、本人もレンズ周りの野暮ったさは気になるらしく「生まれる時代を間違えていたら、生徒からのあだ名は十中八九？牛乳瓶？で確定でしょうね」と、事あることにおどけては周囲の笑いを取っている。

「お前は今日からこれをかけて授業を受けなさい」

そんな言葉と共に、真新しい眼鏡ケースを両親から受け取ったのは、たしか小3の冬休みが明けてすぐの頃だ。今の自分の年齢から逆算すると20年近く前のことになる。

最近はどうでもいいのかも知れないが、当時の子供たちの間では、眼鏡と言えば一種のからかいの対象だったと初島は記憶している。大人たちの間でも今ほどのファッション要素はなかった気がするし、やはり『眼鏡』ガリ勉・おたく・TVゲームのやりすぎ』というのが老若男女の一般的な共通認識だったのだ。

無論、からかいの対象という意味では、初島とて例外ではなかった。さらにタチの悪いことに、初島家が家庭用ゲーム機の類を所持していないこと（貧乏だからではなく、親の教育方針で、だが）を知る一部のクラスメイトが発信源となって、ガリ勉・おたく疑惑、果てはゲームセンターに入り浸る不良疑惑まで浮上する始末。学校の廊下で初島に出くわすなり、恐怖に顔を歪め猛ダッシュで逃げて行った（おそらく不良説を信じてしまったのだろう）上級生の後ろ

姿は、20年近い年月が流れた今でもなお忘れることができない。

眼鏡が生活必需品から身だしなみという認識に変わったのは、高校生になってからのことだった。

進学してすぐに始めた郵便仕分けのアルバイトは、冴えない眼鏡少年に小遣い以上の経済観念をもたらした。高校が駅ビルの近くということもあり、眼鏡や鞆は自分の好みで選ぶようになる。眼科での診断書の取り方を覚えたのも、おそらくこの頃だ。

そんな紆余曲折を経て、さらに歳を重ねるうちにコンプレックスは少しずつ薄らいでいき、今ではすっかり鳴りを潜めてしまった。もつとも、人並みの裸眼視力への憧れまで捨て去るには至っていないが……。

初島はため息と共に眼鏡を外し、窓から差し込む春の陽光に目を細めた。職員室から見える夕焼けといい、こんな風情に浸れる？ 感覚が残っている？ ことには自分でもただ驚くばかりだ。

と、廊下の曲がり角から女子生徒が現れた。彼女は初島の姿を認めるなり「おはようございます」と軽く頭を下げると、再び歩き出す。

それにしても、個別の挨拶が多い朝だ。職員玄関から出入りしているので普段は生徒に出くわすこともないし、職員室でも入室の際に一声かけるくらいだというのに。

とはいえ、うら若き女子高生からの挨拶は、ごく普通の男としても教師としても素直に嬉しい。初島も何気なく挨拶を返そうと細めていた目を開け、

「おはよ——！？！？」

女子生徒を凝視したまま石像のように固まった。

体の表面積の大半を肌色が占め、性別の違いが如実に表れる部分を慎ましく隠すは、自己主張のなさが却って人目を引く白。そのすべてを網膜が認識した次の瞬間には、初島の理性は状況判断力もろとも吹き飛んでいた。裸眼のままの双眸が放つ視線は、女子生徒の背中から腰のあたりを無意識に放浪してしまう。

どこからどう見ても半裸の女子生徒は、背後からのただならぬ視線に気づいたのか、3歩ほど歩いたところで立ち止まった。

弾かれるように背を向ける初島。

大あわてで眼鏡を装着するのと同時に、

「あ、あの……どうかしましたか？」

と、訝しむような声が耳朶を打つ。

「え？ いや、その――！」

どんな言い訳をしたものやら……しどろもどろになりながら振り返った初島は、再び驚愕した。

ここ数日ですっかり見慣れてしまった学園の制服に身を包み、女子生徒が不思議そうにこちらを見ていた。肌色と白が織り成していた劣情と狂乱のコラボレーションは、影も形もなくなっている。

何が何だかさっぱりだが、今は会話を繋ぐことを最優先しなければならぬ。

「いやー、驚かせてごめん。ぬか床を冷蔵庫にしまい忘れてたのを急に思い出してね。今日みたいに暖かい日は漬かりが早い分、出しゃばなしだと酸っぱくなりやすいんだ」

「え？ 先生、ぬか漬け作ってるんですか？」

「一人暮らしだからね。少しは野菜も摂らないと」

「あはっ、一家の主婦みたいですね。お住まいはこの近くなんですか？」

「そうだね、自転車で10分くらいかな。ここの先生たちの中では一番近いかも知れない」

「ほとんど目と鼻の先じゃないですか！ それなら昼休みにでも一旦戻って、しまってきた方がいいですよ？」

「お、その手があったか。4限目の授業が終わったら、さっそく冷蔵庫にぶち込んで来るよ。悪いね、下らない話で足止めしちゃって」

「いえ、むしろ朝から面白い話が聞けてよかったなー、なんて……。実は私も家が学園の近くなんです。私たち案外ご近所同士かも知れませんね」

「へえー、君もこの近くなんだ？　じゃあ、知らず知らずのうちに駅前の商店街で何度か顔を合わせてたかも」

「そうですね。また会った時はよろしくお願いします。それじゃ……」

女子生徒は人懐こそうな笑みを浮かべると、軽く一礼して去って行った。

（面白い話、ねえ）

遠ざかる背中を見送りながら、初島は苦笑する。話の内容より、一人暮らしの男がせっせとぬか漬けを作っているというギャップの方に楽しさの比重が置かれているような気がしてならない。

とはいえ、あれ以上疑いの目を向けられなかった自らの運命には感謝すべきだろう。もっとも、自家製のぬか漬けが冷蔵庫の奥深くに眠っているのは本当だし、塩崎にせがまれて持ってきたナスの本漬けが保冷剤と共に鞆に入っていたりもするが。

（それにしても解せんな）

初島は真顔に戻ると、歩きながら再び考え始めた。

第二章 教師たちのジレンマ #3

裸眼と矯正では、視力に差が出て当然だ。むしろ差が出るからこそ、矯正技術に商品価値が生まれて眼科医や眼鏡屋が儲かるし、患者側としても失われた（あるいは先天的に持つことができなかった）裸眼視力への未練・憧れが出てくる。同一の視覚情報がリトマス試験紙の役割を果たし、見る側も視力＝解像度の違いを認識できるのだと客観的に言い換えてもいい。

しかし、である。今のは、その何もかもが逆になっていた。

視力は矯正時と同一レベルのまま、眼鏡が映像＝視覚情報の切り換えの役目を果たす。常識的に考えてあり得ないことだ。単なる疲れ目や、網膜剥離・白内障といった疾患の類でないことは、医学知識ゼロ＆根っからの文系人間である初島にだって分かる。

通りがかりの誰かを片っ端から裸眼で見たいれば、いずれ答えが出るのかも知れないが……。

そんなことを悶々と考えているうちに、初島は職員室にたどり着いた。

さすがに職員室内での『実験』は避けておきたいところだ。いや、場所がどこであれ、人を実験道具にすることなく確証を得られればベストなのだが……。

「おはようございまーす」

複雑な思いで引き戸を開けながら、事務的な挨拶を口にする。

「――遅かったじゃない」

予想外の返事に顔を上げると、塩崎がすぐ横の複合プリンターで何やらコピーを取りながら、こちらをジト目で睨んでいた。悪意や憎悪といったマイナスの感情を出さずに相手を睨む芸当ができるのは、世界広しと言えど彼女くらいだろう。

とはいえ、ここまで？病的な？塩崎のジト目は酒の席でしか見たことがない。悪酔いすると大抵このような目つきになり、初島や他

のオフメンバーに絡んだりしていた。……病み上がりの景気づけに、朝から一杯キメてきたのだろうか？

出勤の遅さを咎めるのが目的なら「おそい！」と平仮名3文字で済む——いや、塩崎なら強引に済ませるはずだ。苛立っていると言うよりも、待ちくたびれたとでも言いたげなオーラを感じ、初島は努めてやさしくたずねる。

「すまん。でも、まだ8時を過ぎたばかりだろ。早朝会議があるわけでもないのに、いったいどうしたんだ？」

「飯沼先生に聞いたわ。昨日ここで倒れたそうね」

「ああ。——けど、別に大したことはない。おそらく？先週と同じ？貧血か何かだろ。そう言う奈津は大丈夫なのか？体の具合の方は」

「私も軽い貧血みたいなものだったから、もう平気よ。でも……」
「でも……どうしたんだよ？」

普段の塩崎からは、およそ想像もつかない歯切れの悪さに不審感を隠し切れず、初島は先ほどよりも少し険しい表情になる。

「ちよつと、ここでは言えないわ。一旦席に着いて話しましょ」

「！？ お、おい。分かったから袖引つ張るなよ」

窓際の一角にある自席へと強引に促され、初島は思わず抗議の声を上げる。

他の教師や教頭・校長、下手をすれば理事長や来客の目もあるだろうに……。 「学生気分が抜け切っていない」という周囲の指摘は、あながち間違いでもないようだ。

*

*

*

未波と二三香の様子がおかしい。

準がそのことに気づいたのは、教室に足を踏み入れた直後のことだった。

席に着こうとする行く手を阻むかのように、仁王立ちのまま微動

だにしない2人。ただならぬ雰囲気に好奇の視線を向ける者もいる中、未波が静かに口を開く。

「あの子、準ちゃんとはどういう関係なの？」

「へ？ 何の話だ？」

心当たりがなさすぎるのと、質問の意図が今ひとつ分からないのが合わさり、つい間抜け面になってしまう。

「しらばつくれてもムダだよ？ あたし、この目でちゃんと見たんだから。ついさっき、校門のところで他のクラスの子と話してたでしょ」

ついさっきまで準と話をしていた、他のクラスの生徒。未波の言葉を脳内で反芻し、ようやく思い出す。

「——ああ、10組の神沢さんのことか」

「10組とは、なかなかの越境將軍ぶりね。でも私たちが知りたいのは、あの子の名前やクラスじゃないのよ。転入間もない渡瀬君と、どういう関係で知り合ったのか、どこまで進んでるのか。そこを詳しく知りたいの」

値踏みするような、責め立てるような、あまり浴びたくないタイプの視線を向けられ、準は大きく嘆息した。

「……ちようどいい機会だ、一から説明するよ。でも、その前に鞆くらい置かせてくれないか？」

2人が何を想像しているかは粗方見当がついている。端的に言えば、準が他の女子と親しげに話し込んでいたことに妬いているのだ。もう少し謙虚な見方をするにしても、あまり快く思っていないのは確かだろう。実際に口に出して確認する勇氣はないが……いずれにしても立ち話で済むような簡単な内容ではない。

「「あつ、ごめん」」

自分の席へのゲートがようやく開き、準は椅子に腰を下ろす。

「彼女——神沢アサミさんに初めて会ったのは先週の金曜日、未波の家から秋津に戻ってすぐ後のことだ」

「あの後ってことは、ルイちゃんも一緒だったの？」

「ああ。近くをもう少し歩いてみたいって言うもんだから、ここに連れて来たんだ。そしたら突然現れた。半藤の助手として、ヤツと一緒に。当然、彼女も日本史研究会の所属メンバーだ」

少しでも信憑性を上げるべく、静かに訥々と言葉を継ぐ。これが功を奏したのか、2人は徐々に能面のような顔から普段の顔に戻りつつあった。

第二章 教師たちのジレンマ #4

「半藤の手下と準ちゃんが——どうして？」

解せないとはかりに、未波は首をかしげる。

「まず『神沢さん』半藤の助手『ルイや俺たちの敵』って既成概念は捨ててほしい。それと、俺が彼女と接点を持っているのはルイ公認の上でなんだ」

「どうということ？」

「半藤と神沢さん、両者のルイに対する見解の違い、とでも言うべきなのかな。ルイを研究材料として追いかけて回そうと躍起になっているのが半藤、それに反対意見を唱えて俺たちに加勢してくれてるのが神沢さん。歴史研究には協力しても、守り神云々のオカルト研究には手を貸さないってのが彼女の言い分なんだけど、それだけで俺たちとは利害が一致する。だから手を組むことにしたんだ」

「それならそうと、札幌で御飯食べた時に教えてくれればよかったのに」

ようやく自分の誤解に気づいたのか、恥ずかしそうに俯く未波。

その様子に準は内心ほっとしつつ、さらに言葉を続ける。

「ちなみに、さっきは神沢さんと連絡先を交換してた。彼女も半藤に年がら年中張り付いていられるほど暇じゃないし、いざという時のホットラインを確保しとくに越したことはないからな」

「味方についてくれたのはいいいけど、半藤って気功波とか撃つてくるんでしょ？ その神沢って子は太刀打ちできるの？」

おそらく未波と共にアサミの姿を見ていたのだろう、その実力の程に二三香が疑問を呈した。

未波も「そうそう、あたしもそこが心配なんだよね」と同調する。たしかに動作はどちらかと言えば緩慢だし、体格も格闘技をはじめめとする体術全般とは縁のなさそうな、至って普通の女子高生のものだ。準はアサミの人となりについて多少心得があるので？普通の

？女子高生という見方は間違ってもしないが、初めて見る者の感想としては、二三香の言葉は至極当然と言えるかも知れない。

だからこそ、アサミが半藤を昏倒させた時は準もルイも啞然としたし、敵対勢力の1人という認識を即座に改めるきっかけにもなった。

「俺も初めは二三香と同じことを思ったよ。いや、そもそも戦闘要員として見ていなかった。実際、彼女は半藤みたいに気功波を撃つことはできない。でも、素手同士の肉弾戦なら神沢さんの方が圧倒的に強かったんだ」

「ちよつと待つて。実際にぶつからないことには力の優劣なんて判断できないはずよ。2人は事実上、仲間割れを起こしてるってこと？」

「半藤は武者小路家——半藤の先祖が代々祀ってきた守り神に、一般人の俺が馴れ馴れしくしたり、勝手に名前をつけたりしてるのが特に気に入らないらしい。不意打ちで俺を吹っ飛ばしたのに飽き足らず、さらに2発目をゼロ距離で俺に撃とうとした。でも——」

「神沢つて子に力ずくで阻止された、とか？」

「そう。後頭部に一撃入ただけで、半藤はそのまま伸びちまった」と、渋い顔で話を聞いていた末波が口を開いた。

「うゝ……嘘のような本当のような、何とも微妙な話だねえ」

「私はあながち嘘でもないと思うけど？」

「どうして？」

「攻めと守りの両方に優れた格闘家なんて、世界チャンピオンクラスでも滅多にいないものよ。気功波なんか出せるだけでも世界チャンピオンを超えてるかも知れないのに、さらに周りからの不意打ちにも対応しろなんて、ほとんど不可能に近いわ。ほら、ゲームにだっていないじゃない。派手で強力な技を使うけど動きが遅かったり、防御が最低ランクだったりするキャラクターとか」

「納得できるような、できないような……」

「とにかく、俺とルイが無事でいることが何よりの証明だ。神沢さ

んがいなかったら病院送りになってたのは俺だし、ルイだって囚われの姫君になってたかも知れないんだぞ？」

当たり前が悪ければ司法解剖コースまっしぐらになっていた可能性も否めない。

半藤とアサミの力関係はともかく、連中の化け物ぶりはいずれ未波も目の当たりにすることになるだろう。ある意味、ルイに関わる者の宿命とも言える。

「それより、俺からも聞きたいことがある」

「んー？ 今日普通の白だよ？」

脈絡不明な未波の返事に、準の眉がぴくりと動く。

「俺はまだ何も言っていないぞ。ってか？ 白？ って、どんな質問を想定しての答えだ？」

「言わせないでよ恥ずかしい。ほら……こ・れ・だ・よ！」

準のツツコミを聞くなり、未波は自分のスカートをいきなり指でつまみ上げた。ほんの一瞬だが、宣言どおりの白が視界に飛び込んでくる。

「ちよっ、おま……」

「はいそこまで。タイムサービス終わりっ！」

派手な音を立てて椅子ごとのけぞったところで、二三香が素早く未波の両手首を締め上げた。

「もう遅いわっ！ ばっちり見えちゃったよ。つい先週末であんなに恥ずかしがってたのに、どういう風の吹き回しだ？」

「準ちゃんには1度見られてるからね。隠しても意味ないかな」
と
思っ

「いや、隠せよ。『見せる』なんて俺は一言も言っていないぞ。俺が聞きたいのは塩崎先生のことだ。あの人も昨日休んでたらしいけど、何が原因か聞いてないか？」

いつの間にか、朝礼開始まで残り2分ほどになっていた。半ばまくし立てるようにたずねる準。

「初島先生は『体調不良で休んでる』としか言っていなかったよね？」

「そうね。私たちもそれ以上のことは聞いてないわ」

「そっか……初島先生が教室に来た時、何か変わった様子は？」

「特になかったと思うけど。来たのもいつもどおりの時間だったし」

「なるほど……これで、ほぼ確定だな。塩崎先生はともかく、初島先生は能力が発動してる可能性が高い」

その瞬間、2人の顔に緊張が走った。

「——どういうこと？」

「初島先生、実は昨日の朝礼前に倒れたんだ。ちょうど俺と電話で話してる時に。ただ、今の二三香の話と総合して考えると、それから10分ちよつとで復活してることになる。これはあくまでも推測だけど、倒れたとは言っても比較的軽い症状——つまり、例の眩暈のような気がするんだ」

「あ、言われてみればたしかに……。でも、それでどうするの？」

初島先生を単体で捕まえて話を聞くのは多分難しいわよ？」

「そこが問題なんだよな！。日本史の授業は直近でも明日の4限だし——」

「昼休みはいつも塩崎先生とセットだもんね」

事情を知らない他の生徒や教師には、さぞ奇妙な組み合わせに見えることだろう。未波も「打つ手なし」とばかりに苦笑する。

と、その時。

「私たちがどうかした？」

突如、大人の落ち着きといたずらっぽさが同居しているような声が響いた。

「「！？」」

心臓が口から飛び出さんばかりに驚く未波と二三香。その背後に視点を移すと、日誌やらプリントやらを抱えた塩崎と初島が並んで立っていた。

「せ、先生！？ びっくりさせないでくださいよ、もう！」

「はは、ごめんごめん。でも、さすがにスルーできない話が聞こえてきたんもんだから、つい……」

初島は抗議の声を上げる未波を軽く宥めるように弁明した。口でこそ笑いつつ目が完全に泳いでいるのは、初島なりに謎の能力への戸惑いがあるせいだろう。

思えばこの2人には、能力を付与した張本人であるルイからの説明が何ひとつ為されていない。それでも、二三香が初めて準に電話をかけてきた時の憔悴しきった表情に比べれば、2人のそれは大人の余裕というか冷静さを感じさせるものだった。

第二章 教師たちのジレンマ #5

「塩崎先生も初島先生も、いつからそこにいたんですか？」

「そうね。久坂さんが渡瀬君をパンチラ悩殺したあたりからかしら」

——ある意味、最悪と言わざるを得ないタイミングだ。そもそも、そのような暴挙に及ばんとしている教え子がいたら、全力で止めに入るのが教師というものだろうに。

「俺は別に悩殺なんかされてません」

「それはパンチラごときに惑わされるほど純じゃないってこと？」

それとも、あたしのじゃダメってこと？ どっちにしてもショックだよ……」

未波はそう言うなり、がつくりと頭を垂れた。それと反比例するかのように、柔和な笑みを浮かべていた塩崎の眉がにわかに吊り上がる。

「……パンチラを拝むだけならまだしも、女の子泣かすのは感心できないわね」

普段より低く幾分凄味のある声に、二三香と初島が半歩後ずさった。しかし、準は一切動じない。それどころか、負けじと塩崎を睨み返しながら、

「言いがかりも程々にしてください。相手が先生でも、こればかりは認めません」

と、静かに告げる。

下手に言い繕ったところで、相手の怒りに余計な油を注ぐか、上から目線でいじり倒されるのが関の山だ。

沈黙が一触即発の空気を支配する。それを破ったのは、意外にも未波と塩崎だった。

「——なんてね！ 準ちゃんの反応が面白いからやってるだけだよっ！ 塩崎先生も本気になっちゃダメですよー？」

「やっぱり……そんなことだろうと思ったわ。まあ、久坂さんに便

乗した私も悪かったんだけど……渡瀬君、いつまでそんな怖い顔してるのよー」

まさかのネタばらしに、準の顔は噴火寸前の活火山のように赤く染まる。

と、ここまで苦笑混じりに事態を見守っていた初島が口を開いた。「久坂さんも塩崎先生も、あんまり男をからかうもんじゃないぞ。それと、渡瀬君も少し落着こうか。まだ若いんだし、パンチラを目撃したら黙っておかずにするくらいの余裕と下心は常に持つてないとな」

赤メガネを指先で押し上げながら、他人事のようにそうのたまう。理論が飛躍しすぎていて、どこからツツコミを入れればいいのか分からない。代わりに釘を刺してくれたのは毎度おなじみの二三香だった。

「初島先生、未波はともかく、渡瀬君にまで変な事を吹き込まないでください。ところで能力の件ですけど、改めて全員集まれる時にゆっくり話しませんか？ もうすぐホームルーム始まっちゃいますし」

「そうだな、さっそく夕方にも集まろうか。場所はどっする？」

「駅前の商店街にあるジユラ紀とかどうですか？ 席が個別に区切られてますし、話をするのに打ってつけだと思いますよ」

話を強引に本線復帰させたかと思いきや、集合場所の打ち合わせまで運んでしまう二三香の交渉術に、準と未波は思わず息を飲んだ。「ジユラ紀か……。奈津、どっする？」

「私は構わないわよ。むしろ、ちょうどいい機会なんじゃない？」

「ちょうどいい機会、って何がですか？」と二三香。

「ん、こつちの話。今日は職員会議があるから、もしかしたら6時過ぎちゃうけど大丈夫かしら？」

「私は大丈夫です。渡瀬君と未波は？」

「俺も大丈夫だ」

「あたしもOK」

それぞれに準と未波は即答する。

部活を始めたりクラス委員の仕事を申し付けられたりしない限り、放課後のスケジュールは基本的に空欄状態だ。恋愛シミュレーションゲームの青春度指数のような評価基準があるとしたら、ぶつちぎりの最低記録を叩き出すことだろう。

「それじゃ決まりね。校内で一緒になると目立つから、一度教室に集合したあと現地で落ち合いましょ」

塩崎はそう言うのと、初島を従えて行ってしまった。その背中を見送りながら、準は静かに安堵のため息をつく。

「これなら半藤に気づかれずに済みそうだ」

「そう言えばあいつ、あれからどうしたのかしら。渡瀬君、何か聞いてない？」

「神沢さん曰く、土曜の夕方の時点で、すでに復活してたらしい。怪我に関しては俺たちが心配するまでもなかったみたいだ」

半藤たちがどこに住んでいるのか、準はまったく知らない。しかし、何事もなかったかのように我が物顔で外を出歩いている半藤の姿を想像すると、無性に腹が立ってきた。

「そうそう、あの病院って結局どこだったの？ 訳も分かんないまま二三香に連れてこられたけどさ」

未波が二三香の制服を軽く引つ張りながらたずねた。

「私が小さい頃お世話になってた総合病院よ。——って言っても、うちからはバスで30分以上かかるけど。あんまり遠くに飛ばしすぎちゃって警察沙汰になっても後々面倒じゃない？ 私の妥協点としては、あそこが限界だったのよ」

「それで最初の候補が札幌って、色々と矛盾してないか？ まあ、あいつの親や兄弟がいくら騒ぎ立てようと知った事じゃないし、俺はルイとみんなさえ無事なら、それで満足だけだな」

今さら風邪との因果関係を追及する気はないが、考えれば考えるほど謎なチョイスであることは間違いない。

「私だって、ルイちゃんがあんなアグレッシブなことをするなんて

夢にも思っ てなかったから、急に病院とか言われても対応のしようがなかったのよ。そうでなくても私にだって怪我人を氣遣うくらいの仏心はあるし、あいつにしてみれば、むしろ怪我の功名ってこんなじゃないかしら？」

そう言つと二三香は「いつまで掴んでるのよ」とばかりに、未波の手を振り払つた。

「……ま、救急隊員でもなけりやすぐに思いつかないのが普通だよな」

「そうよ。だから細かいことは気にしない！ あ、もうホームルーム始まるわよ」

二三香が口を開いたのに遅れること数秒、予鈴が鳴り、朝の押し問答はここで強制的にお開きとなつた。

昼休み。1人で屋上に上がった準は「いでよ！」と小さな掛け声と共にルイを呼び出した。

「はい、お呼びでしょうか——つて、まぶしっ！ ここはどこですか？」

準と同化する瞬間まで薄暗い部屋にいたせいだろつ。顕現するなり両目を覆い、苦悶の声を上げるルイ。

「現在地、学校の屋上。現地時間、12時42分。天候、快晴。——他に何か質問があれば遠慮なく申し付けられたし」

「実に単純明快なご説明ありがとうございます。でも珍しいですね。学園内で私をお呼びになるなんて」

「そうかな？ 名前を付けた時と、未波の能力が発動した時にも呼び出した気がするけど……まあいいや。それより、塩崎先生と初島先生の能力が発動したみたいだ」

準は何のてらいもなく、単刀直入に用件を切り出した。

「本当ですか！？ よかつた」

「幸い、今のところ半藤の目に触れてる様子もない。それを早いとこ伝えたくて呼び出したんだ」

「半藤……そう言えば、あの男はどうなったんでしょう。準さん、何か聞いてませんか？」

瞬時に緊張の色を滲ませるルイ。半分宥めるように、準は話を続ける。

「結論から言うと、あいつの怪我は大したことなかった。神沢さん曰く、土曜の夕方には復活してたらしい。それに、二三香も病院つて条件付きではそれほど遠くに飛ばせなかったみたいだ」

「やっぱり……コンビニやファミレスならまだしも、病院縛りは無茶振りが過ぎたようですね。ところで、お二方の能力はもうご覧になりました？」

「いや、お披露目は先生たちの仕事が終わってからすることになる。例の店でな」

「あの極道喫茶ですね」

準のことを散々笑っておきながら、ルイも結局はスキンヘッド店長を極道呼ばわりするのだった。

「ああ。ルイにも講師として同席してもらっ」

「えっ！？ 講師と言われましても……何を話せばいいんですか？」

「色々あるだろ。今までの経緯とか、能力の使い方とか、半藤のこととか。表面上何もないように装ってるけど、多分相当参ってるぞ、あの2人」

「なるほど……そういうことでしたら、おまかせください！ 偏差値30でも理解できるよう、分かりやすく解説してご覧に入れましょう。そして目指すは打倒・日本史研究会！ ついに来たり、7人の侍！！」

——新春時代劇の番宣に使われるキャッチコピーか何かだろうか？ 一瞬そう思いたくなるような台詞を声高に叫ぶルイに脱力しつつ、準は軽く釘を刺す。

「やる気になってくれるのは結構だけど、神沢さんも一応研究会のメンバーってことを忘れないようにな……」

ルイの言う？7人？とは、ルイ自身と準たち能力者5人、そこに

アサミを加えた陣営のことだろう。頭数が揃えばそこそこ絵になると踏んだのかも知れないが、半藤と互角に渡り合える武闘派はアサミしかない。何とも不毛な人員構成だ。

「私も、アサミさんと半藤が敵対関係でないことくらい承知してますよ。元を正せば研究材料の選定で意見を異にしているだけですからね。ところで、二三香さんと変態ポニーテールは一緒ではないんですか？」

「変態つて未波のことか……ルイと同類のような気もするけど」

呆れ顔で、さりげなく異論を挟む準。

とはいえ（性的な意味で）興味の対象が同性に向いていない分、ルイの方が健全であると言えなくもない。もつとも、二三香のように高度なスルー能力を持ち合わせていない準にしてみれば、両者とも厄介な手合いであることに変わりはないが。

なぜあんなにも欲望に忠実になれるのだろう？ 単なる疑問を通り越して、もはやカルチャーショックの領域だ。

貞操観念がどうのこうのと堅苦しいことを言うつもりはない。ただ、未波もルイも普通にしていれば普通に美少女だし、準としても気恥ずかしさを感じこそすれ余計な苦手意識を持たずに済んだかもしれないことを考えると、ひたすら残念でならなかった。

と、意外な言葉がルイから返ってきた。

「準さんの当事者意識の欠落ぶりには涙が出てきますよ。敢えて変態にならざるを得ない私の苦悩も考えてくださいな」

手すりにもたれて頬杖をつきながらため息まじりに呟く姿は、相変わらず外見年齢にそぐわない。しかし、こちらを振り返りもせず、に紡ぎ出された言葉は、その静かな口調が内包するけだるさと相まって、準の心拍数をにわかに増大させた。

ルイの苦悩とやらを根本的に理解するのはほぼ不可能に近いし、仮に理解できたとしても、自分からしてやれることなどたかが知れている。が、いつもと明らかに違う態度は、当人にしか理解できないであろう悩みの深さを？ 大人っぽい？ としか形容できないアンニ

ユイな雰囲気に変換して訴えかけていた。

第二章 教師たちのジレンマ #6

「……まず最初の質問に答えさせてもらうぞ。未波たちなら先に学食行ってる。それにしてもルイ、今日はやけに未波に対して棘があるじゃないか。いったいどうしたんだ？」

「準さんと同化している間、私の意識は半分眠っている状態になるんですけど……実は、かなり後味の悪い夢を見てしまいました」

「へえ、どんな夢だ？」

「私の目の前で未波さんが、その……スカートをめくって準さんを誘惑する夢です」

その瞬間、準は凍りついた。心当たりがありすぎる——と言うより、準視点での現実世界がルイの深層心理に直結しているとしか考えられない。動揺を隠せという本能からか、無意識に乾いた笑いが漏れる。

「はは……ある意味ルイらしい夢だけど、それだけでこんなに思い詰めるなんてルイらしくないな」

「そうでしょうか？ でも、妙な胸騒ぎがするんです。未波さんが準さんにちよっかいをかけるなんて日常茶飯事のはずなのに……」

ルイはそこまで言うと、苦しそうに手すりを握る指先に力を込めた。

「とりあえず冷静になろう。だいたい、未波のターゲットは他ならぬルイなんだぞ？ 自分の身を心配するならともかく、俺が色仕掛けに惑わされるなんて考えすぎだ」

反論する隙を与えないよう、準は一気に畳みかける。

と、視線を宙に迷わせていたルイが、ようやくこちらに顔を向けた。

「そう、ですよ……。準さんに限って、そんなことはありませんよね」

ハグでもするかのような距離まで間合いを詰められ、準の心臓は

より激しく高鳴る。昨日の高熱が再発したかのように、額から耳の先までが熱い。

「ああ。そりゃ未波は人並み以上にはかわいいけど、少なくともルイが想像してるような見方はしてない。その前に、ルイは二三香の存在を見落としてるぞ」

「二三香さん、ですか……？」

「あいつがいてくれる限り未波の思いどおりには行かないし、俺の立場も守られるってことだ。それより放課後の件、よろしく頼むぞ」
「承知しました。当面の安全なくして色恋沙汰じゃありませんものね」

ルイはそう言うと、空を見上げて微笑んだ。

「当面の安全、か……」

正直なところ、半藤との争いに何らかの形で終止符が打たれたとしても、ルイ・未波・二三香との関係に目立った変化が訪れるとは考えにくい。ルイが自由の身を望む限り、ルイは準のそばに居続けるだろうし、未波・二三香にしても離れ離れになるのは早くて来年の三月だ。……いや、実際に離れ離れになったとしても、二三香や未波が準の存在を心の片隅に留めていてくれる限り、物理的な距離はゼロに等しい。ルイから授かった、チートまがいの能力があるのだから。

数日先のことも予測できないような凡人中の凡人に、彼女たちはいつまで付き合ってくれるのだろうか？

ふと、そんな疑問が脳裏に浮かんだが、実際に口に出して問う勇氣はなかった。

*

*

*

大人の事情。

しばしばそんな表現に置き換えられることもある。

職員会議があるから。あるいは「少し遅れることくらい察しなさ

い！」という、遠回しにして無言の圧力。

事前に前者より幾分良心的な説明をしてくれた塩崎は、初島を従えて教室に現れる時間も良心的だった。

「みんなお待たせ！ 思ってたより早く会議が終わってラッキーだったわ」

準たちと黒板の上の掛け時計を交互に見ながら、心底嬉しそうな声を薄暗い教室に響かせる。元々『6時過ぎ』としか聞かされておらず、6時半頃まで共同で宿題に没頭する算段を立てていた準たちは、それぞれに苦笑いを浮かべた。

「大丈夫ですか？ かなり息上がってますけど」

「病み上がりなんですから油断は禁物ですよ？」

「……渡瀬君もね。ルイちゃんに風邪移しちゃダメよ？」

未波に便乗する形で釘を刺したつもりの準だったが、横から二三香にツッコまれてしまった。さらに、初島の一言が準を追い詰める。

「ん？ さっそく新しい知り合いでもできたのかな？」

「え、ええ。そんなところです」

しどろもどろで嘘をつきながら、非難の意図を込めて二三香を睨む。すると、こちらの怨嗟の視線に気づいたのか、両手を合わせる仕草と共に「ごめん」とアイコンタクトが返ってきた。

「まあ親しいのは主に二三香で、俺と未波はおまけ程度のもんですけどね」

こうなつた以上はヤケクソだ！ とばかりに、準は脚色を重ねる。むしろ、噛まずに言えたことで信憑性は上がっているはずだ。

「そうなのか。じゃあ早く完治させないとな」

「熱は下がりましたし、3日もあれば大丈夫だと思います」

あっさり納得してくれた初島への申し訳なさと、慣れない嘘をついた緊張感との相乗効果で心拍数が急上昇する。息切れを押し殺すのが精一杯で、これ以上何か問われてもまともに答えられる自信がない。

（誰か、この流れどうにかしてくれ！）

と、その時。

「6時になりました。教室や部室、図書館に残っている生徒の皆さんは下校の際、必ず照明・冷暖房を落としてから退室するようご協力ください」

予鈴も前置きもなく、帰宅と節電を暗に促すような校内放送が鳴り響いた。

「あらら。私たちも急ぎましょうか」

言葉の割に焦る様子を微塵も感じさせない口調で、塩崎が誰にともなく呟く。

「さっそく場所を変えて本題に移ろう」

何が入っているのか、やたら重そうな鞆を持ち直して移動開始の態勢に入る初島。

「それじゃお三方、手はずどおりジュラ紀の前で落ち合いましょ」

塩崎の言葉に、早くも初島が引き戸をスライドさせる音が重なる。

よほど能力のことが気になっているのか、それとも生来の決断力ゆえなのか。2人はそのまま振り返ることもなく、早歩きで去って行った。

第二章 教師たちのジレンマ #7

「後発組が先に着いてたら間違いなく怪しまれるわよ?」

という二三香の判断により、準たちは徒歩でジュラ紀に向かうことになった。

特に会話もなく、三者三様にどこか上の空で歩くこと数分。

「お待たせしました。さっそく入りましょう」

ドアの前に佇む塩崎と初島の姿を見るなり、二三香はドアに手をかけた。

「妹尾さん、ちょっと待った!」

「急にどうしたんですか、初島先生」

「店に入る前に確認しておきたいことがある。久坂さんも渡瀬君も、ここの店長の顔を見たことある?」

二三香は初島の問いに首をかしげながら、

「言われてみれば、アルバイトの人しか見たことないかも知れませんが。未波も同じだと思うけど……渡瀬君は?」

「俺はありますよ。スキンヘッドにサングラスの人ですよ? 見た目の割に普通の人だって聞いてますけど」

数日前、ルイと2人で駆け込んだ時のことを思い出しながら、準は見たまま聞いたままを答える。

と、初島は短いため息と共に二三香へと向き直った。

「聞いているとおり、ここには見た目がヤクザかチンピラそのものの店長がいる。でも、渡瀬君の言うとおり普通の人だから、なるべく驚かないでやってほしいんだ」

「ふふ。下手なクレームよりヤクザに間違えられる方が100倍辛いつて、よく言ってるものね、久世川さん」

「あの……先生はこの店長さんと知り合いなんですか?」

初島の横でいたずらっぽい笑みを浮かべている塩崎に、未波から疑問の声が飛ぶ。

これには準も同感だった。ただ、塩崎の言葉から察するに、業務上の愚痴をこぼせる程度には親しい間柄らしい。

「それはいずれ分かるわ。ここは渡瀬君たちが先に入った方が面白いことになりそうね」

塩崎は含み笑いを隠そうともせず、準たちに先鋒を割り当ててきた。たかが喫茶店に入るだけなのに、何とも物騒なものだ。

初島は初島で「久世川さんがいればの話だけどな」とだけ呟いて沈黙してしまった。

準は「仕方ないな」とばかりにドアノブに手をかける。

果たして、久世川店長はカウンターで雑誌を読みながらコーヒープレイク中だった。

スキンヘッドとサングラスが、一様に凶々しい光沢を放っている。昼間でも薄暗い店内でサングラスをかける意味がよく分からないが、おそらく彼なりのセンスやこだわりなのだろう。

「いらつしやいませー。——あれ？　今日は今日はお一人ですか？」

久世川はおもむろにカップを置くと、雑誌を足下のラックに戻しながらたずねてきた。相変わらず、一般人然とした話し言葉と浮き世離れた風貌との落差が半端ではない。

「いえ、今日は5人です。席、空いてますか？」

「大丈夫ですよ。あとの4名様は……」

直後、不安げな顔の未波と二三香が店に入り、続いて塩崎と初島が顔を覗かせる。

その瞬間、久世川の口調がほぼ180度変化した。

「おっ！？　奈津に史郎じゃねえか！　久しぶりだなー！」

突然の大声に、未波と二三香、さらには準までもが身を震わせる。

「あ、あの、先生……！？」

「大丈夫よ、怖くないから」

半分涙目の二三香を宥めるように、やさしく声をかける塩崎。未波も相当驚いたらしく全身が完全に硬直していた。

と、そこに初島の声が割って入る。

「久世川さん、あんまりデカイ声出さないくださいよ。それに、久しぶりって言っても先月の末に会ったばかりじゃないですか」

「あ、言われてみりやそうだったな。でも急にどうしたんだ？ 奈津と史郎が同じクラスの担任になったとは聞いてたが……あのお三方は教え子か？」

「ええ。うちのクラス委員を任せてるメンツなんですけど、まだお互いのことをよく知らないのと、学校だと話せないようなこともあるんで」

あのをヤクザ顔をものともせず、初島は淡々と久世川の問いに答える。

「なるほど、秘密の首脳会議ってわけだな？」

「まあ平たく言えばそんなところですよ」

「来いよ。案内するぜ」

久世川に先導されて階段を昇り始める初島に倣い、準たちも半ば放心状態のまま後に続く。

幸い、2階は準たち以外に客の姿はなく、完全貸し切り状態だった。あまりにも閑散とした様子を見て、塩崎が呆れたように言う。

「ちよつと、客席ガラガラじゃない。今日の売上、大丈夫なの？」

「代わりに昼の客足が多めだったからな。そんなに心配するほどでもねえさ」

まだ昼間の疲れが残っているのか、背伸びをしながら軽く受け流す久世川。首や膝の関節が乾いた音を立てるあたり、どうやら1人で店を回していたのかも知れない。

「あの……ずっと気になってたんですけど、先生もこの常連なんですか？」

ようやく放心状態から復帰したのか、未波が唐突に口を開いた。

「久世川さん、説明よろしくね」

「うおおい、史郎じゃなくて俺かよ！？」

「店長義務ですよ、久世川さん」

塩崎と初島に解説役を押しつけられ、うろたえる久世川。それを

見て、未波もあわてて言葉を挟む。

「えっと、無理にとは言いません！ 言いにくいことだったら別に……」

「いやいや、そんなことはないですよ。奈津と史郎が元々オフ会で知り合った仲だって話は、もうご存知ですか？」

「はい。って言うか久世川さん、さつきと口調が随分違いますね。そんなに畏まらなくても……」

「そうは言ってもお客様相手ですからね。こう見えて、公私のけじめはつけるようにしてるんです。それに、かく言う自分も奈津や史郎と同じオフ会のメンバーでしたから」

数秒間の沈黙が、場を支配した。

「オフ会のメンバー、店長さんと先生たち以外にもいると見て間違いなさそうね」

いつの間にか準の背後に陣取った二三番が耳打ちしてくる。

「花火大会前からの顔見知り同士もいたわね、そう言えば」

「さもありなん……」とため息をつく間もなく、塩崎が唐突に切り出した。

「史郎と深歩ちゃんがそうだったな」

(！)

うつすらと聞き覚えのある名前が久世川の口から飛び出し、準は思わず顔を上げる。

「あ、参考までに言っておくと、深歩ちゃんってのはここでウェイターやってる女の子。この近くにある秋津薬科大に通ってて、今たしか3年生だから——史郎ちゃんと初めて会った時は、まだ高校生だったのね」

「うーん、そこはかとなく漂う犯罪臭……」

塩崎の説明を聞くなり、誰にともなく呟く未波。すかさず初島から抗議の声が上がる。

「人聞きの悪いこと言わないでくれよ。暇潰しに募集をかけたら、偶然女子高生が来てしまった。ただそれだけの話だ」

「何をやってたかにもよりますね」

「府中のゲーセンでダーツとかビリヤードをやったくらいだ。とにかく、法に触れるようなことは何ひとつしてない。第一、下手に手なんか出そうものなら他の参加メンバーが黙っちゃいないよ」

と、久世川が「なるほどな……」と頷いた。

「？」

頭上に巨大な疑問符を浮かべながら久世川を注視する未波。

「史郎のヤツ、見るからに運動神経悪そうなのに、ダーツはやたら上手いんですよ」

「余計なお世話です」

「あれって真ん中に近いほど点数高いんですけどっけ？」

未波は初島のツツコミを難なくスルーして久世川にたずねた。

「真ん中も一応それなりに高いんですが、1回のスローで入る最高得点は60点、つまり20のトリプルゾーンにダーツが刺さった時ですね。ちなみに真ん中は50点なので、17から20のトリプルゾーンに次いで5番目ということになります。——ここからは史郎が説明してくれや」

久世川は初島へと視線を流しながら言葉を区切った。

「ダーツもトランプと同じように、遊び方が色々あるんだ。どのゲームでも1ターンあたり3回投げるのが基本ルールなんだけど、特にスタンダードなのは8ターン分の合計点を競う『カウントアップ』かな」

「その場合、全部20のトリプルゾーンに刺されば、1440点満点でパーフェクトって解釈でいいんですか？」

「理論上はね。でも、実際にやってみると思ったほど上手く行かないし、初心者のうちには的に刺すだけで精一杯。おおよその目安としては、そうだな……初挑戦で300点越えれば上出来だと思っよ。ちなみに俺の自己ベストは796点」

初島はそう言うのと携帯を取り出し、何やら操作してから未波に手渡した。それを横から覗き込む準と二三香。

表示されていたのは、私服姿でガッツポーズをキメる初島の写真だった。日付は5年前の12月23日。祝日で仕事は休みだったようだ。高さ2メートル以上はありそうなダーツの筐体も一緒に写っており、ディスプレイには確かに『796』の数字が並んでいる。「今のダーツって機械式なんですね。それにしても、ほとんどプロ並みじゃないですか！」

「いや、これでもせいぜい素人に毛が生えた程度のレベルだよ。プロ同士の対戦とか地区大会決勝になると1000点越えが当たり前の世界だし。ダーツは大きめの漫画喫茶に行けば大抵置いてあるから、機会があつたらやつてみるといい」

「奥が深いんですね。何だか面白そう……」

「ね。先生、今度私たちも連れてってくださいよ」

おもちゃやゲームをねだる子供のように、初島の腕をつかむ未波と二三香。

「え、えーっと……そうだな、例の件が落ち着いたら、みんなで行こうか」

と、ジト目の塩崎からツツコミが入った。

「……史郎ちゃん、顔赤いわよ？」

「そ、そうか？ 気のせいだろ」

平静を装いつつ答える初島の顔は確かに赤く染まり、目に至っては完全に泳いでいた。

見かねた久世川が2人の間に割って入る。

「奈津、そのへんにしとけよ。……悪かったな、史郎。長々と話を脱線させちまつて。俺は下にいるから、注文決まったらいつでも呼んでくれや」

「助かりました。最近やたらと絡んでくるんで困ってるんですよ」
初島は軽く頭を下げながらメニューを受け取る。それを不機嫌そうに横目でにらんだまま、無言を貫く塩崎。

準たち3人も、ただ居心地が悪そうに沈黙するしかなかった。1000人を超す秋津学園の生徒の中で最も塩崎・初島に近い、1年

3組のクラス委員という立場を考えれば、至極当然の反応と言える。にわかに険悪なムードを漂わせ始めた元オフ仲間に、久世川は苦笑いを浮かべた。

「奈津の言い分も何となく分かるけどな。直接口に出さねえだけの話で。ま、何はともあれ史郎、俺はお前さんの味方だ」

「……どういう意味です？」

一拍の間を置いてたずねる初島。

しかし、久世川はその問いに直接的な答えを返すことなく、

「仕事の時間だ。これから大事な話があるんだろ？」

改めて念を押すように低い声で告げると、足早に1階へと消えて行った。

第二章 教師たちのジレンマ #8

「カッコいいわ、シビれるわ。見た目怖いけど」

「久坂さんはああいふ強面が好みなの？」

うつとりと目を細める未波に、塩崎が意外そうな顔でたずねた。

「うまく言えないんですけど、あの独特の雰囲気惚れちゃいました。？安心して？って言うよりは？心から信頼して？何でも話せそうな」

「直接本人に言ってやればよかったのに。まあ俺も奈津も久世川さんには色々相談に乗ってもらってるし、話しやすいつてのは同感かな」

そうつぶやく初島の手元には、新聞記者よろしくB6サイズの手帳が広げられている。

準は二三香を皮切りに自分自身、そして未波と、能力発動・行使の瞬間に幾度となく立ち会ってきた。しかし、初島と塩崎は未知の能力に対する戸惑いから立ち直っていないばかりか、自分を除く4人分の能力をいっぺんに把握しなければならない。さらにルイの説明が加わると、人間の記憶力ではもはやお手上げだろう。

「さて……口頭であれこれ能書きを垂れるよりは、この場で実演した方が分かりやすいと思うんだけど、どうかしら？ 問題なければ拳手願います」

シャーペンを片手に臨戦態勢の初島に代わり、塩崎が音頭を取り始める。

「……異議なし！」「……」

「み、見事にハモったわね。順番はどうする？」

「発動した順番でいいと思いますよ」と未波。

「OK、それで行きましょう。誰が最初？」

「はい、私です」

おもむろに二三香が立ち上がった。

能力に関しては、おそらく5人の中で最も扱いに慣れている二三香。

しかし、能力の？行使？ではなく？披露？^{プレゼン}となると話は別らしい。固く真一文字に閉じた唇が、その緊張感を物語っている。

そして、意を決したように顔を上げた次の瞬間。

音もなく二三香^{ふみか}の姿がかき消えた。早くも塩崎がパニックに陥る。「消えた！？」透明人間になる能力……じゃないわよね……？」

「……さあな。妹尾さんの説明を聞かないことには何とも。とりあえず落ち着けよ。奈津らしくないぞ」

意外にも冷静な反応の初島に、準と未波は思わず顔を見合わせた。と、次の瞬間。

「ただいま戻りました」

忽然と姿を消していた二三香が再び現れた。

「おかえり——じゃない、急に消えたんてびつくりしたよ。ところで後ろに持つてるのは何？」

「すみません、初島先生。^{つじま}うまい台詞が浮かばなかったので前振りなしでやらせてもらいました。渡瀬君と未波は何回も見てるから今さら驚かないわよね？あと、これは一応ヒントのつもりです」

二三香はそう言つと、後ろに隠し持っていたモノをテーブルの上に置いた。

「これは……学級日誌じゃないか！職員室を出る時、たしか奈津の机にあったはずだぞ」

「はい。職員室に行つて取ってきました。たつた今」

「レポート、つまり瞬間移動ね」

呆然自失で沈黙していた塩崎がぼつりと呟いた。

「正解です！ただし、移動できるのは私が記憶している場所に限られますけどね。……塩崎先生、大丈夫ですか？」

「な、何とか。一応覚悟はしてたつもりなんだけど、いざ目の当たりにすると結構来るわね」

実際、塩崎の頬はバカ殿メイクでも施したかのように白く色褪せ、

額にはじつとりと玉の汗が浮かんでいた。

「その点、あたしと準ちゃんの能力は二三香のと違って精神的な負担が少ないから安心だねっ」

「いやいや、普通の人間からしたら俺たちも十分おかしいから。そのあたりの感覚が麻痺してきたら人間どころか地球上の生命体として終わりだぞ」

冷静さを保っているという点では未波も大したものだが、こちらはいささか楽観主義が過ぎる。

いくら人間離れた能力を授かったからとて、人間社会から隔絶されても問題なし、ということにはならない。むしろ、人間社会で上手く立ち回るために使う能力だとさえ準は考えている。もっとも、その願いは良い意味であっさり潰えてしまったが——少なくとも手品のようなノリでひけらかすシロモノではないはずだ。

と、ひととおりメモを取り終えた初島が2人の間に割って入った。

「次は渡瀬君と久坂さん、どっちかな？」

「準ちゃん、出番だよ」

そんな未波の声に押されるように、準は椅子から立ち上がる。本当はいちいち席を立たなくとも、座ったままで事足りる？儀式？なのだが……興醒めにならないよう、そのまま進めることにした。

「俺から目を離さないください。ヒントも答えも、すべてそこにありますから。あ、別に瞬きくらいはOKですよ？」

「……」

塩崎と初島が無言で頷く。

それを確認すると、準は静かに目を閉じた。

普段ならば絶対にしないような、大仰極まりないパフォーマンス。自分でやり始めておいて言えた義理ではないが、さすがに少し恥ずかしい。必死に笑いをこらえる未波と二三香の顔が脳裏に浮かんだ。それをかき消すように、心の中で叫ぶ。

（いでよ、我が守り神・ルイー！）

準はルイ召喚中の姿を見たことがない。アニメに登場する忍者や

超能力者が使うような分身術を何となく想像したことはあるが——あるいは、生死の境を絶賛さまよい中の人間に稀に起こると言われる幽体離脱とか——それ以上の事は今までしてこなかった。

しかし、である。どちらにせよ、人間の体から赤ん坊ではない別の人間が出てくる光景は、さぞかし猟奇的でグロテスクなものに違いない。まさに、二次元では許されるが三次元では許されない現象の典型だ。万が一、塩崎と初島をショックで卒倒させてしまったら……と思うと憂鬱になってくる。

やがて、ピンクのパーカーとデニム素材の短パンを身に纏った黒髪ロングの少女が、準の傍らに姿を現した。ちらりと横目で確認し、塩崎・初島へと向き直る。

「どんな能力かは見てのとおりなので割愛します。あと、この子の自己紹介も後ほど改めて。次、未波」

？当人の体から、12〜13歳くらいの女の子が分裂？

何とも要領を得ないメモを取る初島を尻目に、準は再び席に戻ると、ルイが手招きをしているのが目に入った。

「どうした？」

「こんな説明で大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない。むしろ少し大雑把でちょうどいいくらいだ。あの2人の顔を見てみる」

「あつ、たしかに。？何の能力か？以前に？何が起こったのか？状況そのものを把握できてない感じですね」

「だろ？ だから、出番はもう少し待っててくれないか？ 下手に先生たちを混乱させるのは得策じゃない」

「承知いたしました」

ルイはそう言うのと、空いている椅子にちょこんと腰を下ろした。

同時に未波の声が耳朶を打つ。

「じゃ次は先生たちですね」

「未波……？ もう終わったのか」

準がルイと話し込んでいる間に、未波は自分の出番を終わらせて

しまつたらしい。

「だって、あたしの能力はその場で宙に浮いたらおしまいだもん。それに準ちゃんは何回も見てるし、今さら改めて説明するまでもないかな」と思つて」

「……正論だな」

未波のことだ。デモンストレーションとなれば、無駄に張り切つて天井スレスレまで上昇するに違いない。

しかも、その水平座標は準のすぐ隣。未波の動きを目で追いかけるようなものなら、たちまちスカートの中を凝視するような構図が出来上がってしまう。そして、向かいの席には塩崎と初島がいるわけ——。（社会的な意味で）知らず知らずのうちに命拾いをしていたことに気づき、準は安堵のため息をついた。

第二章 教師たちのジレンマ #9

「私たちからは以上ですけど……何か質問はありますか？」

「だいたいのところは分かったし、私からは特にないわ。強いて言えば、渡瀬君の分身みたいな子の存在が気になるけど」

「でも後で説明があるんだろ？ それなら俺も現時点では特にない」となると、次はいよいよ私たちね」

塩崎はそう言つと、隣に座っている二三香の頭に手をかざした。

「えっ？ あ、あの……」

「ごめんね、妹尾さん。ちょっと実験に付き合ってもらつたわね。あ、座つたままで大丈夫よ」

「——アレをやるのか」

突如、謎の言葉を口にする初島。塩崎も意味深な笑みを浮かべてオウム返しの返事をする。

「ええ、アレをやるのよ」

「先生、アレって何ですか？」と未波。

「妹尾さんを見てれば分かるわ」

塩崎は手短かに答えると、静かに目を閉じた。

言われるままに二三香を凝視する準・未波・ルイ・初島。

異変はすぐに現れた。

青白い光が塩崎の右手から放たれたかと思うと、一気に二三香の全身を覆い始める。やがて、その光は少しずつ小さく弱くなつていき——塩崎が目を開けると同時に雲散霧消した。

「ふ、二三香……？」

未波が魂の抜けたような声を漏らした。

無理もない。光の中から再び姿を現した二三香は、ほんの十数秒前までの二三香の姿ではなくなっていた。体は小さくなり、髪型も前髪ぱつつのセミロングを後ろで無造作にまとめただけのお子様スタイル。目元に辛うじて二三香の面影が残っているような気もす

るが、全体的にルイよりも2、3歳ほど幼く見える。

と、目の前の幼女が不機嫌そうに口を開いた。

「ちよつと未波。あんた、さんざんエラそうなこと言っというて何よ、その間抜け面は」

少し舌つ足らずな、年齢相応の声が薄暗い客席に響く。しかし、未波に対してだけ微妙に棘のある口調は、紛れもなく二三香そのものだ。さらに、奇異なものを見るような視線を自分に向けている人物が未波だと理解していることを考えると、やはり二三香本人なのかも知れない。

「それにしても塩崎先生、周りの物がさっきより微妙に大きく見えるんですけど……もしかして大きさ変えました？」

「私は妹尾さん以外何もいじってないわ」

「それじゃ私の体の方が小さくなった、ってこと？」

返事の代わりに、その場の全員が首を縦に振る。

「う、嘘でしょ!？」

途端に泣きそうな顔になる二三香。見かねた初島が半分宥めるように問いかける。

「妹尾さんは小学生の頃、前髪を揃えて後ろでまとめてなかったかな」

「え、どうして知ってるんですか？」

「どうしても何も、任意の対象物の時間軸を操作するのが奈津の能力なんだ。たとえば、カビの生えたミカンを新鮮な状態に戻したり、渋柿を食べられる状態まで進行させたり。試しにトイレの鏡で確認してみるといい。自分でも見覚えのある顔になってるはずだ」

「ちよつと確認してきます！　ちなみに、これって元に戻せるんですよね？」

「もちろんよ」

塩崎が力強く答える。それを見た二三香は一目散にトイレへとダッシュして行った。

再び訪れた静寂を破るように、準はぼつりと呟く。

「ってか、あれだけ髪型が変わったら、鏡を見る前に違和感に気づいてもよさそうなんですけど」

「よほどびっくりしたみたいね。妹尾さんには悪いことしちゃったな」

「それにしても——これはないと思うぞ」

ため息まじりに床から何かを拾い上げる初島。

テーブルの上に置かれた？それ？に、一同は思わず絶句した。

「これ、まさか……二三香の、スカート？」

「ああ。小さくなったのは妹尾さんの体だけで、おそらく服の大きさまでは変わらなかったんだろうな。サイズが合わなければ当然、立ち上がった瞬間にずり落ちる」

「そうなりますと、二三香さんは今……」

ルイの言葉に、初島は無言で首を横に振った。

どうしてこうなった！　としか、もはや言いようがない。

懐かしさに顔をほころばせた二三香が、ブラウスの裾から水色の逆三角形をちらつかせながら戻ってきたのは、それから数分後のことだった。

「なあ二三香、いいかげんに機嫌直せよ」

自分が落としたスカートを初島から受け取った瞬間から顔を真っ赤にして押し黙ってしまった二三香に、準は半ば呆れ顔で声をかけた。二三香本人してみれば災難だったし、気持ちも分かるが、第三者的に見れば所詮逆ギレに過ぎない。見たくもない、と言えば嘘になるが、予期せず見てしまったものを咎められるのは、やはり腹に据えかねる。

自分の出番に移るタイミングを完全に逸してしまった初島はと言うと、考え事をしているのか、あるいは待ちくたびれて眠ってしまったのか、目を閉じたまま微動だにしない。もし後者なら起こしてやろうかとも思った準だったが、少し考えて思いとどまった。この超能力騒動に加えて、新しい仕事と職場に馴染まなければならぬ

という重圧を初島は背負っている。ほんの一時の安らぎを邪魔するほど準も野暮ではない。

とはいえ、このままでは初島の能力披露が宙に浮いた状態で終わってしまう。さて、どうしたものか。

と、その時。導入は思わぬところから始まった。

「二三香さん。少々厳しいことを言うようですが、どんな服をどれだけ重ね着しようと、初島先生的能力を前にしては、何の意味もありません」

「……どういうこと？」

低くて微かにしか聞こえなかったものの、声の主がルイということもあつてか、ようやく口を開く二三香。

「せっかくなので試してみましよう。準さん、とりあえず何でもいので硬貨を1枚お借りできますか？ あ、初島先生には見えないようにお願いします」

「別にいいけど何に使うんだ？」

財布から適当に硬貨を取り出し、ルイに手渡す。穴が開いているのが指先の感触で分かったので、5円玉か50円玉のどちらかだ。

「まあ見てのお楽しみです。初島先生、ちょっとよろしいですか？ あまり聞き慣れない声に名前を呼ばれて驚いたのか、初島もぴくりと体を震わせて目を開ける。

「私の手の中に硬貨が1枚あります。？能力を使つて？何円玉か当ててみてください」

ルイはそう言うつと、右の拳をテーブルの上に差し出した。一瞬間食らったように硬直しつつも、すぐに眼鏡を外してそれを凝視する初島。

回答は意外に早く、しかし恐るべき精度で行われた。

「中身は50円玉だね。さらに言つと、世にも貴重な昭和62年製造のものだ」

「——ファイナルアンサー？」

「——ファイナルアンサー！」

値踏みするようなルイの視線に、初島も自信満々の笑いで答える。
ルイは満足そうに頷くと、軽く握った拳をゆっくりと開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7507t/>

アラウンド・サーティーン

2011年12月18日07時48分発行